Fate/White Christmas

カタストさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この小説は、二次創作ではありますけど、原作Ｆａｔｅシリーズのキャラがクリスマスに組んず解れつするとかそんな事は全然なく、作者がＦａｔｅシリーズを見て突発的に『ああ、聖杯大戦やってみてぇな』って妄想から始まったシリーズ物です。

これが作者が型月から設定だけ勝手に奪って作ったオリジナル（？）ストーリーであることだけ了解してからお読みください。それと、原作キャラはほぼほぼ出さない予定で居ますけど、もしＦＧＯなどなどで出ちゃった時は、ご愁傷さまとでも思ってそのまんま見てください。

それと、この話書いてる中の人がガバいので、ちょくちょく編集ミスったまま投稿してしまいます。『此処おかしくね？』とか思ってた所が、後から見たら直ってたら、そういうことだと思ってください。

日本のある都市、門科において、戦争が勃発しようとしていた。

七騎対七騎の、人を超越した英霊がぶつかり合う聖杯大戦と呼ばれるものである。

門科の管理者である、真流涼を始めとした全てのマスター達は、その戦端を開こうとしていた。

それとは全く関係なく、門科で一番の評価を受ける、橙乃匡生は、曲がりなりにも一般より多くは外れていない生活を歩んでいたが・・・。

目次

プロローグ　～光を纏う、闇に潜む～ ―― 1
序章『Ｌａｕｎｃｈ，ｍｙ　Ｌａｎｃｅｒ』
聖杯の行方 ―― 6
匡生という男 ―― 15
まともじゃない ―― 26
其は闇に潜むもの　～〝闇〟のランサー～ ―― 34
〝蛇〟 ―― 48
踊り舞台 ―― 57
そうして巡り合う ―― 65
第一章『Ｂｒｏｋｅｎ　ｊｕｓｔｉｃｅ　ａｗａｋｅｎ』
少年の目覚め ―― 72
好みの女性 ―― 80
刻印 ―― 87
《仕事》 ―― 93
朝焼け ―― 102
不運続き ―― 112
開戦、そして参戦 ―― 124
レクチャー　―前― ―― 138
お前の願いは ―― 155
嗤う少女 ―― 170
剣二本、槍一本　《前》 ―― 182
剣二本、槍一本　《後》 ―― 188
黒い激突 ―― 199

プロローグ　～光を纏う、闇に潜む～

いつも、輝く物は俺の背中にあった。
なぜなら、何もかもに打ち勝ってきたから。追い抜いてきたからだ。
〝何か〟が俺の前に有ってはならない。〝何か〟が俺の上に立っていてはならない。
そういう風に生きてきたんだ、ならば、俺の背中に何があろうとも う関係なくなっていた。
俺達以外に誰も存在しない荒野。
だが、ここに居る俺以外の2人は、人間ではない。いずれも人々が喜々として語れるような英傑より分かたれた、人を超越した英霊達。今、語る者が誰も居ない神話がここに再臨している。
「なぜ、貴方が前に出るんですか!? 貴方はマスターです！私に守られなければならない立場なのに、挙句私の前に立つなど有っては成りません！」
俺の後ろで〝闇（ノワール）〟のセイバーが叫ぶ。
貧窮にして豪奢。清廉にして剛毅。
相容れぬ本質を持ち合わせた少女は金色に煌めく細剣（エストック）を除いては、ほんの少しの金具を附したドレスのみを装った、剣士（セイバー）と言うには戦場に余りに不釣り合いな格好の手弱女。
本来、それは剣士となるべきではなかった。その少女こそ一つ目の異質さであった。
「君は逃げると思ってたよ。我（アタシ）が誰かを分かってて、正面に立っているなんて。我（アタシ）、君の事を見誤っていたみたい」
俺の前で、〝光（ブラン）〟のアーチャーが叫ぶ。黒々と凶（まが）つ槍をその手に持っている。彼女の一存で、それは簡単に放たれ、俺達を貫いて何処かに消えていくだろう。
俺の後ろにいる少女とはまた印象を異とする少女。その少女は、ナイフのように鮮やかに煌めく殺気を放つ少女。何より、彼女の頭から生えた、豹（ジャガー）の耳と、俺の姿を鮮明に写し込む鏡で作られたの義足が、

彼女が人より外の存在であることを思わせる。矮躯に込められた魔力は、それこそ人の概念を超越したものであった。
本来、それは英霊として人間に使役する所以も無かった。　その少女こそ二つ目の異質さだった。
「そうだな。お前は見誤っていた。俺が生きるとか、願いを叶えるとかいった事に固執するような男じゃないのは分かってるだろ。」
ならば、この俺は三つ目の異質なのだろう。
サーヴァント、並み居る英霊の分霊、人の形をした奇跡に挟まれ、それに抗おうとしている、単なる魔術師の男。本来ならば、俺はこんな場所には立たず、セイバーに戦いを任すはずであった。
だが、今のセイバーは何も出来そうもない。だったら、俺が戦わなければならないのは当然だ。
「このままだったら、セイバーは消える。そうなったら俺は負ける。それじゃ意味がない。俺は勝つためだけに戦う。その為になら死んでも構わないんだからな」
後ろで、セイバーが息を呑む音が聞こえた。　前で、アーチャーが無邪気に頬を笑いに歪めた。
二人共、この反応だけ見ればただの少女なのだ。多分、後ろのセイバーは悲しむような呆れるような顔をしているんだろうな。
だが、この姿勢を歪めることは出来ない。　これが俺が生きてきた道のりなのだから。
ここで、俺が負けるような事を指を咥えて見ていることは絶対に出来ないんだ。全てに勝つためだけに全てを捧げたのだから。
「アッハハ！　最高だよ！そこまで清々しく『勝つことが全て』って言われると却って面白いね！それでこそ、この槍をぶつける価値があるよ」
アーチャーは、手に持った槍に魔力を込める。　ただそれだけで、周囲の空気は形持つ悪意に変化（へんげ）を遂げた。呼吸をしようとするだけで、体の周りに粘着くような不快感が湧き出てくる。
「此れより借り受けるは、我が輩（ともがら）の神鎗。同調を開始する」
〝光〟のアーチャーが一言紡ぐ度に、不快感が増す。　それほどの

魔力が、彼女の黒い槍に溜まっているということだ。
「――信じる物のために戦うこと
――自らを偽らず戦うこと
――自らより高潔なものとの闘いであること
条件満了。最大出力、宝具開帳！」
アーチャーは、鍵を開ける。　1つ、2つ、3つと順番に。一つ開ける度に、あの槍は黒色の炎を纏い、禍々しい雷を発現させていく。あれならば、都市の1つは簡単に吹き飛んでしまおう。人間一人なんて、それこそ紙のように貫き焼き払ってしまうだろう。
だが、アーチャーはそんな事を気にすることもない。人間が食べる肉の数を覚えないように、彼女もまた払う犠牲を無視すると決めたようだ。
「やめてください！　そんな宝具ものを投げたら、どれ程の犠牲が出るか分かっているのでしょう！」
セイバーが吼える。　彼女とて、こんな言葉を彼女が聞くとは思っては居ない。だが、彼女はそうあらなければならない理由がある。
誰よりも正しくあらねばならない理由。　俺と対極にいるからこそ、彼女は止められぬと解っていながらも訊かずにはいられない。セイバーの本質を見抜いているからこそ、アーチャーもその言葉を無碍に否定したりはしない。
「セイバーの言いたいことは十分解るよ。　でも、我は止められない。この大戦を勝ち抜いて、願いを叶える為に現界してきた。その為に払う犠牲がどれ程大きかろうと、アタシには関係ない」
「くっ・・・」
「じゃぁ、覚悟は良いんだよね？　セイバーのマスター」
魔神が問いかける。態々分かっていることを問い直したのは、彼女の性ゆえだろう。
「ああ、来い。　全力で止めてやる」
俺の手袋は、少ないながらも対魔力の呪いが施されている。あの魔力の塊の砲弾だろうと、少しは和らげることが出来るはず。

「無理です！マサキ！あれは人間が止められる域を超えたものです！無駄死にする前に逃げてください！そうすれば貴方だけは助かります！」
　後ろから、声が聞こえる。セイバー、俺を嫌っているはずなのに、俺を助けようとするとは・・・どれほど彼奴は正しくあろうとしているのか。でも、その意見は見当違いなのだ。
「俺はここから逃げられない。たとえ逃げることが出来たとしても、俺はここから逃げることは許されない。俺は、勝たなければならないんだからな」
「なっ・・・！」
　もう、俺は後ろを振り返れない。　彼奴の怒った顔は正直苦手だからな。
　俺の前にいる奴の方がよっぽど俺に似ていて、波長も合うんだが、世界は皮肉なことにアーチャーと俺を絶対的な敵に仕上げてしまっている。
「――悪いね」
　アーチャーが、ふとそんな言葉を漏らしたのが聞こえてしまった。
　嗚呼、お前は悪い。だが、そんな事はもう関係ない。
　俺は炎の中で1度死んだんだ。ならば、もう俺は命の存在さえも希薄。
　体が在る意味はない。精神なんてとうに死んで、この命を支えているのは、たった一つ。
　幼いころに誓ったあるユメ。　それが、俺の背骨の代わりになっているだけの話。
　だから、アーチャーは関係ないんだ。
「俺は勝つ。ただ、それだけだ！」
「・・・ハハッ、一瞬でも我(アタシ)が悪いと思ったのが馬鹿みたいじゃん！じゃぁ、いくよ!!」
「ああ、来い！」
　アーチャーは、体という弓に番えた黒黒とした槍の矢を放つ。それは、大砲よりも高い威力で射出される禍々しき怨念の一矢。

あれが、彼女が唯一捧げた友情の権化であると理解できる者は果たして何人居るだろう?さっき開けていた鍵が、歪んで伝わった伝承を正し、自らの手のもとに戻すためのものであると気づくものは居るのだろうか。

彼女が今から放つのは、太古において太陽という一柱の神を撃ち落とす為に投げ放った、神威の黒曜石で形どられた一つの破壊の究極――!!

「第五の太陽(トラウィスカルパンテクトリ)よ滅べ、我が憎しみと愛のもとに!!」

真名と共に放たれた黒槍は、放たれた側から、彼女の間に合った地面を蒸発させていく。太陽を堕とす為の槍なのだから、地球なんて最早意味を成さないということだろうか。

それを本気で受け止めようとしている俺なんだ。よっぽど俺は狂っている。だからセイバーは俺を憎んでしまっているのかな。

だが、俺は勝たねばならない。　その為なら、何もかも支払わなければならないから――。

そうして俺は受け止めた。　破壊の奇跡を。

序章『Ｌａｕｎｃｈ，ｍｙ　Ｌａｎｃｅｒ』

聖杯の行方

この物語を語るに当たり、冬木の聖杯戦争の終焉の形は知らなければならない。

第四次聖杯戦争は終結した。かの『魔術師殺し』が聖杯を破壊したことによって、幕を閉じることになった。５０年来の聖杯戦争がそんな幕引きで良いのか、という事もあるだろう。しかし、知る者は知っていた。

あれは、黒の呪いがふんだんに詰まっていた破壊の聖杯。その中に溢れる魔力は、暗く、昏い。喰らうための物。なれば、破壊されるのは当然の摂理だった。

しかし、四個目の聖杯はそこで終りを迎えなかった。

かつて、聖人と呼ばれた１２の家系が有った。それは、第四次聖杯戦争によって朽ち果てた聖杯をかき集め、ありとあらゆる方法で保存した。

ある者は、自らの工房の中でひっそりと、

ある者は、自らの伴侶の体に埋め込み、

またある者は、自らの命の引き換えに、聖杯の所持を永遠の秘跡とした。

さらに、その１２の家系の内１つが、大聖杯を破壊。聖杯を呼ぶ為の小宇宙、神的な魔力さえ有った魔術回路の塊を破壊した。御三家がその事実に気づいた時には全てが終わっていて、ただ泣くことしか出来なかったという。

冬木の聖杯戦争は、第四次で壊滅的になり、強制的に終了した。

、かに思われていた。

真実はそうではない。彼らは、新たなる地で誠に勝手ながらも聖杯戦争を執り行っていた。

１２に分けられた小聖杯の構造を解析し、願いを叶えるための魔力の器も整えた。

破壊された大聖杯は、その１２の家系の内１つ。強力な『復元』の魔術師が復活させることによって、寸分違わず組み合わせることが出来る為に、小聖杯を呼び出せるだけの準備も調えられる。

１２の家系は、遠坂・マキリ・アインツベルンの御三家や、魔術協会聖堂教会などの強大な組織の助けを得ずして、聖杯戦争を行えるだけの準備が出来ているのだ。

不幸なことに、１２の家系は、好奇心も旺盛で、魔力もまた絶大だった。故に、やらなければ良いものを、自らの力で強力な霊脈に大聖杯を繋げ、聖杯戦争を執り行っている。彼ら１２の家系が執り行う聖杯戦争は、嘲笑と侮蔑の意味も込めて『実験聖杯』と呼ばれていた。

それもそのはず、小聖杯を呼び出すためには六騎分じゃ足りない不完成な代物。彼らが執り行うのは、七騎対七騎の、システム上は可能と言われていたが冬木においては行われなかった『聖杯大戦』であった。

１回目は、小聖杯が織りなす強大な魔力を制御しきれず失敗。

２回目は、魔術協会が送り込んだ刺客によって、失敗こそしなかったが、家系に多大な犠牲を伴った。

そして、此度は３度目、今度こそ最高の成功を収めるために、聖杯大戦をこの地で。

――――突然だけど、真流（まりゅう）は家柄だけは１０代以上続く名家だ。それが魔術師として開眼したのは第五代当主・真流清（まりゅうきよら）だと言われている。まぁ、正確には魔術の力を使いこなし始めたのは、であろうけど。まぁ、魔法使いや二十七祖の師を持たずに歪まずに進めてきたのは、私の家の数多い誇りの一つだ。まぁ、この魔術の特性には少し目をひそめるしか無いけど。

当然ながら五代も経つ頃には、魔術もそれなりに洗練されてきている。今の私は、「水」「金」の属性を持つそこそこ優秀な魔術師だ。褒められたものだろう。

・・・と、言ったことを朝起きた時に思うことで、私の家の嫌な所を目につけるのを和らげようとする狙いもあるけど。１２月の朝はどうしても身に沁みる。

いや、朝は決して弱い方ではないのよ?むしろ寝覚めが良すぎて、合宿の時に友達に羨ましがられたぐらい。
和室で起きて１０秒で冴える頭を動かし、白の寝巻から制服に着替える。寝巻は、大河ドラマで着られるような、白装束。今となっては慣れちゃったけど、友達に見られた時は少し驚かれちゃた。その時まで変だって思ってなかったもの。
さて、襖を開けたら・・・か。私は毎朝の習慣になってる深呼吸を行って、思い切って襖を開ける。
毎朝の通り、中庭に繋がる縁側に、ビッシリと黒スーツが並んでいる。私が襖を開けたと見るや、一気に開け、狭い縁側に更に所狭しと並んで、私が十分通れるだけのスペースを作ってくれる。そして、人体の何処からそんな声が出るのかという疑問まで浮かびそうな大声で朝の挨拶だ。
「おはようございます！　涼嬢(すずか)！」
一斉に『おはようございます』の大合唱。こんなの求めてない。やめろと言っても聞いてくれないので、これが十七年続く私の人生の朝の行事だ。これにさえ目を瞑れば良い集団なんだけど・・・。
「お嬢様。　タイが乱れておいでございます。失礼致します」
私が二歳の時から一緒に居る爺やが、実に失礼なことにほぼ無断で私のタイに触れて直す。こんな事を許せるのは爺やぐらいものだ。
「お嬢様、ハレー建設が来週の返済を伸ばしてくれと申してきております」
「来週が限度、それでも払えないようなら親指から一本ずつ切りなさい」
縁側を通りながら、私は業務の確認をする。これも朝の恒例行事である。
「涼(すずか)嬢！　奴等が俺たちのシノギに手を出そうとしてます！」
「放っておきなさい。そのうち逃げていくし、もし逃げなかったら教えこんでやれば良いだけよ」
「涼嬢、昨日捕らえた刺客はどうしましょう!?」
「ネズミでも使えば?」

そうして、私は居間に着き、既に配膳されてる食事の前に正座して朝食を開始する。
何の因果か、真流の家は今は無法者（ヤクザ）の頭目の家として栄えてしまっていた。どうやら、五代目当主がこの形にしてしまった結果、家が断ち切れるどころか、思ったよりも合致してしまったのが原因らしい。そこから三代掛けてこのスタイルを確立させてしまったらしいが、ここに魔術をほぼ全く使っていないというのが私は未だに信じられないでいる。まぁ、縄張りを人並み以上に大事にする私達と、土地の霊脈を確保することで一層強力になる魔術師としての在り方がマッチングしたとも言える。
結果的に、門科（かどか）市を裏から牛耳る家系として定着してしまったのは言うまでも無い。
まぁ、家そのものには不満はないんだけど、食事を五十人前後の組員に見張られるのはどうにかして欲しい。これでは、運ぶ食べ物の味も分からなくなるというものだ。相当いい食材を使っているはずなのに、その味を理解できずに居るのは１００％私の組員たちの責任だと思う。
さて、気が張りつめたままの朝食が終わって、順調に出掛ける準備が整った。後は玄関から外に出るだけ。
「お嬢様！　その手、どこでぶつけられましたか!?」
爺やが凄い目つきでこっちを見てくる、それは心配というよりは怒りに近い。きっと、ぶつけた〝何か〟を許さない気だろう。私が小指をぶつけたからと言って処分された箪笥の数は知れない。
だが、今回はそれとは別物。私の右手にあるのは、三画限りの命令権。
サーヴァントを律する絶対の権利、令呪が私の右手に宿っていた。どうやら、聖杯は私をマスターだと認めてくれたようね。
「大丈夫よ、爺や。気にしないで」
「で、ですが！」食い下がる爺や。
「大丈夫だって。じゃぁ、行ってきます！」
半ば強引に私は外に出ていった。帰ってきたら大層怒られるけど、

知ったことじゃなく私は学校のほうが大事だから。
令呪が宿った右手を見て想起する。アレは、涼しい夏の夜の事だった。

数ヶ月前、3人の魔術師が私の屋敷を訪ねてきたのだ。魔力を隠そうともせず私に接触してきて『君と話をしたい』と言ってきたのだ。通さぬわけにも行かなかったから、誰にも知らせず屋敷の応接間に通したのだ。知られずというのは変か、口止めして。
話はこうだ。
聖杯大戦を開始するのに、土地の管理者である貴方の許可が欲しい。この土地の霊脈に大聖杯を接続する許可をくれ。
との事で。冬木の聖杯戦争の事は聞いているし、ここの土地の霊脈が日本でも有数だということは知ってる。おそらく、英霊（サーヴァント）を7体か14体召喚した所で枯渇することはないでしょう。
魔術師の素性に関しては然程興味はなかった。気にするようなことでもない、魔術師に必要なのは敵を詮索する心ではないんだから。
つまり、私は二つ返事で承諾した。そろそろ14人のマスターが選ばれて令呪の刻印が現れる頃でしょうと思っていたから、推測は当たったということかな。
実験聖杯大戦・・・それは、表向きは七騎対七騎の聖杯の奪い合いだが、その実は全く違う。
大聖杯は、それ自体がとても高度な魔術回路で作られていると聞く。大聖杯を強奪した12の聖人と呼ばれた家系は、それこそ魔術協会から大バッシング。下手すればお家の断絶さえありえる。いや、実際そうなった家系が多い。
それでも、知識欲からの研究を抑えられないのが魔術師というものだから、12の家系はやめようとも思わないから困ったもの。きっと最後の一家になっても止めるつもりはないんだろう。でも、そうならないために、明確にチームを分けて行う。
かつて12の家系のチーム。〝聖人〟とそれを擁護する闇の国。
〝聖人〟を排除するために尽力する、魔術協会から派遣されたマス

ターで組まれる光の国。
２回の実験聖杯大戦を経て、闇の国は勝てず１２個有った家系は４個に減った。おそらく、今回か次で１２の家系は完全に途絶えてこの実験聖杯戦争も終わって、冬木でいつも通りの聖杯大戦が行われるんだろうな。
最後の冬木の聖杯戦争・・・第四次聖杯戦争が終わって丁度十年経つ。冬木の聖杯戦争は五十年程度のスパンで行われていたけれど、実験聖杯は毎回新鮮な霊脈を使っているから期間が短いと聞く。
一次に２年、二次に３年、今回の三次に５年。
便宜上、４．３次聖杯戦争と呼ぶらしいけれど、呼び方なんてどうでもいい。
重要なのは、私が管理している土地で聖杯戦争が行われること。仮初のものとは言え、聖杯大戦がこの土地で行われたとなれば、真流の血と私の名前は栄えるでしょ。そうすれば、より一層この土地を支配するための箔がつく。
自分がマスターになるとは思わなかったけど、戦い抜けばより箔が付くことに為る。そうなることに越したことはない。
しかし、そうなると困ったことになったなぁ。この場合、私はどっちにつけば・・・？

と、言った所で我に返った。私は学校に来てる途中だった。いろいろ考えてたら、どうやらメインストリートに合流してしまったらしい。しっかり気を引き締めないと！
何を隠そう、私は色々隠してる。まぁ、流石に性格まで隠しては居ないけれどね。でも、家柄の事とかは知られちゃマズイし、自分が魔術師であることなんて以ての外。
私は、何処にでも居る家庭の普通の女の子・・・って事になってる。というかしなきゃ困る。
でなければ、私の家は無法者の巣窟ってことになる。事実だけど、広まったら困る。
「おはよう、涼さん。いつも朝早いよね」

校門をくぐった先に居たのは、私より背が２ｃｍ程低い男子だった。
麻加部あさかべ風太ふうた。私より随分背が低いくせして、同学年の中では相当腕が立つ。それも、1年の時に柔道部の都大会で相当良い成績に食い込み、当時の3年の卒業とともに部長に押し上げられている。その時に学校名を取って『霞ヶ原の嵐』と異名を付けられてたりする。
私は、家を出る瞬間を絶対に学校関係者に見られたくないという一心だけで他の人より早く登校してるから、必然的に朝練が始まる前の風太君に出会うことが多い。私自身部活はやってないから、偶に柔道部の訓練を覗くことはあるけど、しっかり優しくも適切に指導してるみたいで、私の目から見ても新入生は粒揃いだからなぁ。風太自身レベルアップしてるし、この学校で魔術無しで彼に敵う人間が2人いるかどうかってレベルだろうな。
「おはよう、風太君。貴方も練習に精が出てるわね」
「そりゃぁね。今年の新人は皆強いから、気を抜いたら僕が抜かれそうだからさ。涼さん、今日は見ていく？」
「今日は遠慮するわ。大会も近いんでしょう？なら、部員だけで集中してやるべきじゃない？」
「いや～・・・皆、涼さんが居たほうが精が出るみたいでさ・・・どうも・・・」
風太君が頭を掻いて応える。　どうも、嘘は吐いてないみたいで、こういう事を聞くと私の隠匿が上手くいってるんだなぁと気分が良くなる。
「でも、毎朝こんなに早く来るなら部活に入ればいいのに。柔道部はマネージャーいつも足りないんだよね」
「遠慮しておくわ。人の世話をするなんて私らしくないんだもの」
「そうかぁ・・・残念」
風太がしょんぼりする。小動物的な仕草は彼の人気を支えている理由であり、彼の強さがギャップとなってるとかなってないとか。
「あら、じゃぁ私が居ない所でも集中できるように頑張らなきゃね」

「あはは、それもそうだね。　じゃぁ、涼さんは教室に？」
「そうだけど・・・」
　意識せずとも言葉を詰まらせてしまう。私と同じで、毎朝部活もないのに早く来て、教室に居座っている奴が居るのを知っているからだ。私が柔道部を用もないのに見学するのは彼奴が居るからでもある。
　そして、彼・とは相性が良くない。というか、彼と相性が良い奴なんて居ないんじゃないだろうか？
「さっき下駄箱見てきたけど、彼は来てないみたいだよ？」
「本当？　じゃぁ心置きなく教室に行くわ。　ありがとね、来られると困るから、もう荷物置いてくるわ」
「そうだね。　早く置いてきなよ」
　風太君の許しも出てきた所で、私は思いっきり走って教室に向かう。
　３階にある教室まで走っていくのは少々つかれるが、彼奴に会わなくても良いというのなら安いものなんだから。
　１００ｍ１２秒台のダッシュ（魔術行使なし）で階段を駆け上がり、３つ先の教室に向かう。ベストタイム更新！誰にも見られることがないから出来る暴挙でもある。
　そして、教室のドアを開け、誰も居ない教室に荷物を置いて早速教室から出て――――
「今朝も息災みたいだな。　真流」
「えっ？・・・うわっ」
　出ようとした私を教室の入口で止めていたのは、私が最も恐れている男だった。
「・・・なんで・・・」
「なんでとは失敬な。　お前より早く来ていただけの話だ。なんでお前に糾弾されなきゃならないんだ」
　そこに居たのは、さっきまで話していた相手とはまるで正反対。風太君が小動物ならば、目の前の男――橙乃（とうの）　匡生（まさき）は、鷹や鷲のような目の男だった。

一言で彼が纏う雰囲気を表すなら、それは『恐ろしい男』
危険さでは決してなく、威圧という言葉は相応しくなく、畏怖というには高尚すぎる。
ただただ、恐ろしい。　そんな男は、私の天敵でもあった

匡生という男

匡生という男は、一言で言えば傑物だった。　何事にも秀でた才能を見せて、彼が負ける物を見つけるのはツチノコを見つけるのと同格に難しいとも言われて、一種の都市伝説となっている。
勉強をさせれば、少なくとも学校内では彼に敵わず、
拳を振らせれば、彼に屈服しない男は居らず、
全校生徒の前で発表させれば、全員が彼の言葉を無視できない。
彼の目立った弱点はと言えば、必ず寄る人間を突き放す態度だろうか。お陰で、顔立ちはモデルと言っても通じそうなものであるのに、彼に浮いた話は全く無い。というか、友達がいるのかどうかすら不明。彼を慕って寄って行く人間は要るみたいだけど、果たして彼はそれを仲間と思っているのかどうかは・・・まぁ、多分思ってない。煩い雀ぐらいが関の山だろう。
そんな男が、読んでいる本から全く目を離さずに問いかけてくる。因みに、『黒猫』だった。
「で、なんでとはどういう事だ？」
そこを掘り下げないで欲しかったのに。　いつも無口な癖に、こういう時だけ饒舌なんだから。
「別に？　ただ、苦手な奴とは会いたくなかっただけよ」
「なるほど。　そういう事か」
そんなこと、いちいち問われなくても解っている癖に・・・。本当に嫌味なやつ。
本からは一度も目を離していないのに、彼奴の言葉だけで何かを見透かされているような気がしてならない。下手すれば、私が魔術師であることまで見抜かれているんじゃないだろうかと思うぐらいだ。
「わ、私はもう行くわよ。　貴方とは一緒に居たくないもの」
「そうか。　一つ聞きたいことが有るんだが？真流」
うわっ、そんな言い方ないでしょ。なんでコイツは、頭が良い癖して人に嫌われるような物の言い方しか出来ないんだろう。
「最近のこの街が少しおかしい気がするんだが、心当たりは有るか？

真流」
　コイツ、やっぱり気づいてるんだ。
　心当たりなら有る。聖杯の魔力が満たされた事だろう。サーヴァントの召喚をするぐらいなら半年以上も前から出来るぐらいに魔力が溜まっている。敏感な人間なら、魔術師でなくとも街全体に違和感を感じることだろう。
　なら、宝石みたいに優れている功刀なら、この街の異変には気づいているのかもしれない。
「さぁ、どういう風に違和感があるのか言ってくれないと、私にも分かんないよ」
　だけど、敢えて惚けないと、私が困る。だから、知らないふりをした。
「・・・そうだな。言葉で表現出来ないような事だ。お前が分かんないって言うなら、多分感じていないんだろう。なら良い」
　良かった。橙乃も上手い具合に勘違いしてくれた。　これで追及も免れることも出来て、私は凄く嬉しい。だったら、一刻も早くこの教室から離れるに限る。
「じゃぁ、私もう行くわね。　風太くんを待たせてるものだから」
　さっき行かないって言った手前少し恥ずかしいけれど、しょうがない。というか、さっき、見当違いな事を言って私と功刀を合わせた罪が麻加部君には有る。
　早いところとっちめてやらないと気がすまない。
「ああ、真流。　手は大事にしろよ」
「え!?」
　嘘・・・え?まさか、令呪を見られた?　いや、橙乃は無意味な事を言うような人間じゃない。
　こんな事を言うからには、絶対に見られてしまったんだ。
「わ、解ってるよ!　じゃぁ、また後で!」
　私は、居てもたっても居られず、すぐに教室から出て扉を締めた。
　橙乃が魔術師だという事は聞いたこと無いけれど、彼がこの令呪(しるし)の意味を知っているかは知らないけれど、彼から出来るだけ離れようと

しなければいけないような気がした。
どんなに不自然な流れで彼から離れて、疑われたって仕方ないって思うぐらいには、彼の詮索が恐ろしかった。なんでかは分からないけれど、女の勘って奴かもしれない。
そうして、私はなるべく早く、長く走った。出ていった教室に辿り着こうとした時と同じぐらい、いや感覚的にはもっと速く。
「はぁ、はぁ・・・はぁ・・・」
肺の中の空気を使い尽くして、汗が垂れ流れようとも走って。　足が立つことさえも拒否することを覚えた時、漸く私は走ることをやめて、その場にへたり込んだ。
どのくらい走ったかは分からない。　足が暫く動かなくて、廊下に座り込んでいたときに、私の後ろから足音が聞こえてきた。とても静かな足音だ。
私の脚はとってもわがままで、勝手に立ち上がって足音から距離を取って相手を見た。
そこにいたのは、青というか銀というか、そんなグラデーションをした美しい髪色をした少女だった。凛とした顔は、少女というよりは青年に近いが、立派な少女。私はこの少女に見覚えがある。
「あ、ええっと・・・アントニア、さん」
「はい。　アントニアです」
アントニア・バルツァ。私より1つ下の学年に、夏休みが始まったときに転入してきた美少女。でも、美少女と言うよりは美女と言った方が正しいぐらい、スラッとしたスタイルと高い身長が似合う。これで私より年下なんて言われる方が信じられないけれど、事実だ。なんでも、親の都合でギリシャから日本に渡ってきたという。若いのにご苦労様。
私が、彼女を知っている理由は、彼女が柔道部にマネージャーとして新しく入った部員であるからでも有る。夏休み以降に柔道部の見学をした所、彼女が居るのがふと気にかかったから話してみたら、私とも少しずつ仲良くなっていったのだ。と言っても、彼女からしたら、偶に会う先輩ぐらいにしか思ってないだろうけど、それでも険悪

にならないだけ十分。
「大丈夫ですか？　真流先輩」
　そう言って、アントニアさんは手を差し出してきた。そういえば、私はへたり込んでたんだった。道理でアントニアさんが嫌に大きいと思った。
「え、う、うん。ありがと・・・」
　凛とした表情・・・というか、無表情のまま手を差し出してくるその姿は、なんというか・・・王子様が手を差し出してくるみたいで、少し照れくさい。
「はぁ、橙乃もアントニアさん位気立てが良かったらなぁ」
「橙乃、って。　匡生、先輩のことですか？」
　アントニアちゃんは、私を立たせた後抑揚のない声で問いかけてくる。どうやら、橙乃の事で心当たりがあるようで。アイツは良くも悪くも噂のタネが尽きない奴だから、この学校に来て短いこの子でも名前だけは知ってるんだろう。
「その橙乃先輩って、あの風太・・・部長を殴り倒した事があるって本当ですか？」
　ああ、その噂か。　なら柔道部である彼女が知ってるのは本当だ。
「うん、確かに。　橙乃は風太君を殴り倒した事があるよ。」
「それって、どうしてか。　分かりますか？部長は、トラブルを起こすような人間じゃないと思ってたんですけど」
　無表情で、静かな声だけど、声に沸々と熱が篭っているのが分かる。多分、心の底から気になるんだろうな。さっきの事も有るし、ここで言っておかないといけない気がする。
　あんまり話したくない事なんだけどね・・・。
「えぇっとね。　この学校に文化祭が有るのは分かるよね？アントニアさんも、二月前に参加してたし。メイド、似合ってたよ」
「恥ずかしいので思い出させないでください」
　・・・多分恥ずかしがってない。余計な話はしないで欲しいって事なんだろうか。前言撤回、この子の機微は余りわからない。
「ごめんね・・・。で、話を戻すけど。私達も去年やってたんだけど、

クラスでやる団体の中で意見が割れてさ。所詮学校内での企画なんだから自分たちが楽しむことを優先する派閥と、やるならしっかりとやりこなし、出来るだけ企画の完成度を優先する派閥。クラス内は、風太君を代表とした楽しみ派と、功刀を代表とした完成度派で割れた。それでも、ある程度は上手くいっていたよ。

でも、ある日、風太君が居ない隙に、功刀たち完成度派が独断専行的に作業を進めていってしまった。暗黙の了解のような部分があって、互いに不干渉な場所だったり、お互いの同意の上で決定した部分を、功刀は勝手に改めて、楽しみ派を困らせたんだ。

当然、風太君は大激怒。でも、怒った風太君を功刀が窘めた。それで堪忍袋の緒が切れた風太君は、襟首を掴んで功刀を押し倒して、一発殴った。・・・だけど、それを待っていたと言わんばかりに、功刀は反撃を開始。躊躇なく顔や鳩尾も殴ってさ。風太君は最初に殴ったのを最後に、功刀に手も足も出ずに、殴られるがまま。気絶するまで殴られた。

そうなったら、後は簡単だったよ。それまで体格を無視して風太君が大会で良い成績を残していたのは皆知ってた。逆に言えば、それを簡単に制した功刀が無理矢理に計画を断行するのは止められなくなって。学校側はこの殴り合いを問題にはしたけれど、風太君にも殴った事実は有ったから、結果的に喧嘩両成敗って事になって、両者3日停学。でも、そうなる事を見越してた功刀は、自分の仲間を言いように使って簡単にクラス団体を征服したんだ。

そうして、一番完成度の高い団体が完成して、私達のクラスは見事に売上一位で表彰されましたとさ。これだけの話だよ」

そう。たったこれだけの話、世は事もなし。でも、ここには功刀という男の性質が見事に現れてる。

きっと、匡生は麻加部君がどうなろうと知ったことじゃないんだと思う。多分、これが麻加部君じゃなくても結果は同じだっただろう。要は、彼は自分本位で物事を考えるんだ。それが、自分が一番力を持っていると事実・認識共にそうなのがタチが悪い。私の偏見が交じった判断だろうけど、自分では多少的は射てると思ってる。

「なるほど、そんな事が。　だから部長は・・・」
「そう、風太君は匡生君に苦手意識を持ってるってこと。あんなに一方的に殴られちゃ、そりゃ苦手意識も持つよ・・・」
　と、ここまで話した所で、まばらながらも生徒が廊下を歩いてきた。どうやら時間がそれなりに経ったようで、ちょっと気の早い生徒なら登校し始めている時間帯だ。来る時間帯に関しては、私と橙乃が異常なだけ。
「そういえば、アントニアさん、マネージャーの仕事は？　柔道部（あそこ）、仕事凄く多いでしょ？」
　そう言うと、アントニアさんは、少し・・・本当にほんの少し微笑んで、こう答えてくれた。
「ご心配なく。　いつもある仕事は全部終わってます。それで、今日の朝練習は緩めにするので、どこに居るかだけ伝えてくれれば外に居ても大丈夫だと部長から言われました。」
「そ、そっか・・・」
　そういえば、アントニアさんはこの学校の第二の完璧超人なんだった。見目麗しく、勉強も運動も完璧、おまけに（功刀と比べると十分に）優しい。今頃一年男子の間ではもう人気の的らしい。
「ふぅん。　じゃぁ、この教室からはもう動けない感じ？」
「そうですね。　1年教室の廊下に居ると伝えてしまったので・・・あまり大っぴらに動くと部に迷惑がかかるかもしれません」
「そっかぁ。　なら仕方ないね。じゃぁ、ここで」
　私は、アントニアさんと別れて、柔道部に向かった。
　それで、麻加部くんをとっちめる・・・事は出来ないので、思いっきり恨み節を垂れ流していたら、顧問の体育教官が結構苦い顔をしながら時計を見ていたのが目に入ってしまった。
　そこには、ホームルームの時間までおよそ１０分の針を示した時計盤があった。麻加部君は部長だから、部室の片付けもあるので、これ以上拘束している訳にはいかない。
　だから、さっさと退散して、教室に向かうとなかなか人数が増えていたから、涼しい顔をして座るに限る。功刀に怪しまれてるかもしれ

ないけど、それは今に始まったことじゃない（かも知れない）し、今更どうなることじゃないからなぁ。マズそうだと思ったら、口封じすればいい。やり方はいくらでもあるわけだし。

「おーう、お前ら席につけ～」

と、担任の教師が入ってきたと共に静まり返って全員が席に着く。

それを始まりとして、学校の責務・・・要は授業の時間が始まり、私はそれに耐えることを強いられたのだ。

もちろん、授業を受けることを〝耐える〟と表現したわけではない。私が耐えると表現したのは、橙乃の対応だ。

授業を受けている間、アイツは事もあろうに私のことをずっと見つめてきた。いくら怪訝に思うと言うのは有っても、まさか公然で監視してくるとは思わなかった。そんな状況に、私の精神力が耐えきれるはずもなくって、ジリジリと日照りが続くように削られていく。

休み時間なんか、授業と授業の合間に必ずと言っていいほど話しかけてこようとするから、すぐに席を立って女子トイレに避難するしかない。流石に女子トイレに入り込む程精神が図太い訳ではなかったようで助かった。

そして、昼休みになって私は、ようやくかと言った感情を持ちながら席を立った。なんでか知らないけど、橙乃がクラスメートに囲まれている状況を利用させてもらって、駆け足で屋上に向かう。橙乃と一緒に居ると必ず絡まれるから、追いつかれてはならないと、屋上についたら物理的だけではなく、持ってきた結界を張る礼装・・・要は魔術で鍵をかけるのも忘れない。瓶を取り出し、赤黒い液体を一滴二滴と零す。これで問題なし。

私は安堵のうちに、朝の内に購買から仕入れておいたパンの袋を開ける。なんでコレを買うために行列を作るのかは全く理解できないけれど、２００円で惣菜パン２個を買うことが出来るならお得なんじゃないかと思う自分もいて、どことなく矛盾した気持ちを抱く。でも、やっぱり休み時間にあんなに殺到する理由は分からない。

「はむっ・・・やっぱり、何度食べても普通なんだよねぇ・・・」

これ以上考えると、パンの事だけで休み時間が終わってしまいそう

な錯覚に陥ったから、必死にこの思考を振り払う。今は聖杯大戦の事に集中しなきゃ・・・。やっとこさ手に入れた、静かに思考する時間だ。大事にしなきゃ。

「ええっと、監督役のあの人に聞いた話だと、7人対7人のチームで争う聖杯戦争・・・って認識で良いんだっけ。それで、私は・・・どっちなんだっけ？」

聖杯戦争を執り行う人間とそれを擁護するマスターが〝闇〟、聖杯戦争を止めるべく魔術協会から参戦するマスターが〝光〟。私は魔術協会から督促状なんて渡されてないから、恐らく〝闇〟での参戦になる。前回の実験聖杯戦争でも、土着の魔術師が〝闇〟のサイドでの参戦をしたケースがあったらしいし、ほぼほぼ確定だろうけど、一応家に帰ったら確認したほうが良いかもね。

でも、そうなると問題は、私が陣営内チームメイトを把握してないことになる。そこも含めて確認すればいっか。

「でも、〝闇〟かぁ・・・」

実は、私の魔術の先生は、実験聖杯戦争に参加したことがある。だから、監督役から聞いた話と、先生から聞いた話の二つから多角的に今回の背景を把握することが出来てた。

それで、先生から聞いたある話を思い出してる。今までの2回の聖杯戦争で、〝闇〟の側・・・つまり、聖杯戦争を執り行う側は、2回とも敗北してる。いやまぁ、1回は別に敗北ではないらしいけれど、この状況に至って何となくその理由が掴めた気がした。

〝光〟の側は、魔術協会が結束を持ってこっちを潰そうと立ち上がってきてる。超一流の魔術師が一度に攻めてくるようなものだ。組織力も、私みたいな都市レベルの少組織では抗いようもない。物資・人材・結束力において私達より上。まず勝てない。

結束力でこっちが勝っているんなら、私が陣営に誰が居るかを把握できないなんておかしいもん。

「こりゃ、どうしようもないかな～・・・」

ちょっとだけ、ホントにちょっとだけやる気が削がれたような気がした。そんな不吉な思考を振りのけるように、別の思案に思いを馳せ

た。
私のサーヴァントはどんなのが来るかな～とか、味方の魔術師にはどんなのが居るかな～とか。聖杯戦争に関係あるかもしれないけど、結局は取り留めのないような思考を幾つか。そんな思考の過程で、ふと父さんの顔が浮かんだ。聖杯戦争について考えてたんだから、父さんのことに行き着くのも当然の帰結だけど、ほんの少し悲しくなる。
父さんとは産まれた時から一緒に居たけれど、最後まで良く分からない人だった。
凄く厳格であることには変わりないんだけど、出処の知れない包容力を感じられる人だったのは覚えてる。とても博識で、活力（バイタリティ）に満ち溢れていたことも。無口な人で、父さんと会話をする時は二言三言で済ませるのが規則（ルール）だった。なんでも、不要な会話は思考の妨げになるとか何とか。でも、私はそれを不思議と受け入れることが出来て、事実他の組員と比べても私は父さんと会話が成り立っていた。それと、魔術の稽古も取ってくれていた。ストイックな稽古だったけれども、耐えられないものではない。私は父さんの稽古で確実に力を上げることが出来ていた。
それが、五年前の・・・丁度、今日みたいに晴空で肌寒い風が吹く日だったなぁ。父さんは、この家を出ていくと言ったんだ。その時、私は言い知れぬ胸騒ぎに突き動かされて、規則（ルール）を破って何度でも止めようとした。でも、結局私の制止を受け入れてくれなくて、まるで木枯らしのように飛び出していってしまって。通り過ぎた風が戻ってこないように、父さんは帰らぬ人になった。父さんが死んだことを伝えてくれたのは、今の先生になる、とても若々しい女の人だった。そのまんま私の稽古はその人に引き継がれていった。優しくて、力強くて、何も文句はないはずなのに、何処か空虚な感じがする。もう父さんの死は受け入れたことのはずなのに。
「・・・やだなぁ、こんな事を願ったって、戻ってくるわけじゃないのに」
戻ってくるわけじゃないのに、涙が溢れたのはなぜだろう。
・・・いいや、涙が溢れたのはもういい。もう良いんだった。ここ

を勝ち抜けば、聖杯なんてモノが私のものになる。話の通りなら、それはあらゆる願いを叶える事が出来る願望機。誰かにみすみす取られるぐらいなら、私が手にしてやる。
その為になら、私は・・・。
「よーし！　〝聖人〟だろうとなんだろうと私の元に集まりなさい！絶対に勝たせてあげるから！」と、空に向かって拳を突き上げて。
ガタッ。
ん？ガタッ？
物陰で何か、誰かがずっこけたような音が聞こえたから、その音の元に行ってみると、そこには何故か凄く焦った表情の風太君がしゃがみ込んでいた。
私の話を盗み聞きしてたわけじゃないだろうし・・・一体何のために、こんな所に・・・。
「や、やぁ、涼さん。　どうしたんだい？こんな所で」
「それはこっちのセリフなんだけど。　風太君こそ、なんでこんな所にしゃがみ込んで・・・」
そんな風に問い質してみると、ひどく焦った様子で返してきた。
「いや、立ち上がろうとしたら小銭落としちゃってさ！　大丈夫！もう解決したよ！それじゃぁね、涼さん！」
「あ、待ってよ！」
そう言って、全然会話も成立しないで立ち上がって言ってしまった。　風太君、あんなに背がちっちゃいのに凄い早いからなぁ・・・私が追いかけても絶対追いつけないもん。うん。
なんであんな所居たんだろうなぁ、別にこんな所に何もないのに・・・。
同じ場所にしゃがみこんでみても、決して何か変わったものが有るわけでは・・・いや。
「何だろこれ・・・結界？の基点かぁ。　それも、結構ハイレベルなものだ・・・」
効果自体は単純な物で、結界内の人間の失神。それと外側の人間への隠蔽効果。両方共多少の対魔力があれば抵抗できるものだった。

その効果の結界は私でも書こうと思えば書くことが出来るぐらい、オーソドックスなもの。
でも、問題はこれが学校内ここにあることであって・・・。誰かが趣味で仕掛けたんじゃなければ、恐らくは聖杯戦争のマスターが書いたものだろうな。取り敢えず、この結界は無効化しとかなきゃ。
「ってあれ?・・・この結界、かなり高度なレベルで描かれてる・・・。私には、これを止めることが出来ない・・・。」
魔術の勉強はそれなりに重ねてきたつもりだったけど、まさか私も無効化出来ないほど高度な結界を仕掛けられてるなんて・・・しかも、よく見れば、現代に使われないぐらい稀少な紋様も書き込まれてる。勉強ってホント大事。でも、そうなると、これを書き込んだ人間がマスターだという考えは改めなきゃ行けない。
これを書いたのは、サーヴァントだ。 それも、相当魔術に通じた英霊。魔術師キャスターが妥当だと思うけど・・・。でも、あくまで、サーヴァントが関与してるってだけで、紋様を知っていればマスターだって書くことが出来る。
そうなると、さっきしゃがみ込んでたのは・・・。
「・・・麻加部君、魔術で掛けた鍵、しっかり開けていったよね・・・?」
そこまで考えて、止めた。チャイムが鳴ったのも有るけど、彼を問い詰めるのは別に今じゃなくたって構わない。
盗み聞きしてたのか、結界を書き込んでたのか、別の用だったのかは知らない。でも、いずれ理解わかることなんだから、今無理に問い詰めるのは違う。そう思ったから。結界だって、効果を抑制することが出来たから良しとしよう。
そう思って、私は屋上を後にした。結界は何れ起動してしまうだろうけど、その時はその時だ。とにかく、午後の授業をしっかり乗り越えなきゃ。そうしたら、家に帰ってやるべきことをこなさなきゃいけない。

まともじゃない

「今日が終わった・・・」

全ての授業が終わる頃には、私の体力は既に底をついていた。一日中橙乃に見つめられて、我慢の限界だ。あれ以上見られてたら、胃に穴が空いていたと思う。

だから、帰りのホームルームが終わった瞬間、急いで教室を出て、校門から出た。それで、やっと彼から逃げられたことで安心して、道路にへたり込んだ所だった。

正直、精神から来る疲労とかで、暫くは立ち上がれそうにない。近くに公園のベンチがあったから、なんとかそっちに座れたものの、体力が回復するまでには暫く掛かりそう。こんな事なら、さっきコンビニか自販機で飲み物買っとけば良かったかなぁ・・・。

「涼お姉ちゃん。　大丈夫？」

「大丈夫じゃない・・・出来ればスポドリよろしく・・・」

疲れてる折に、丁度聞こえてきた声。まるで神が叶えてくれた奇跡みたいに、絶妙なタイミングで座り込む私の前で微笑ましい顔と声が浮かんでいた。

「分かった～♪」

それで、つい反射的に頼んじゃった。それで、その子は公園の自販機にタッタと駆けていって、２本のペットボトルを持って戻ってきた。それで、青いラベルの貼られたスポーツドリンクで満たされたペットボトルを渡してきた。

だけど、私はそのペットボトルのキャップを捻ることは出来なかった。

「あれ？　飲まないの？」

スポーツドリンクを持ってきた少女はあどけなく首をかしげる。その様は、年相応のものであって、その外見だけで判断するならば、このスポーツドリンクをぐい飲みする事に抵抗感は感じないだろう。

ただ、この少女。見た目に反して、血腥（ちなまぐさ）すぎた。そのことを前提と持ってきてこの少女を観察すると、相当悍ましい人間であると結論付

けることが出来る。
　防寒具にくるまれた彼女の体は、臓物と腐臭の温床だ。何度体を石鹸で擦ったとしても、その匂いを洗い流すことは不可能なぐらい。特に右手が酷い。あの手に付けている指輪の礼装もそうだけれど、右手が放っている雰囲気は最早屍体や幽鬼と何も変わりがない。老獪の黒魔術師や死霊魔術師（ネクロマンサー）でさえ、ここまで体が変質することはないだろう。即ち、経験だけで言えばそれ以上であると言える。
　それだけなら、まだ偶然と片付けることが出来ただろう。ただ、この少女は私の名前を知ってた。敵意こそ感じられない・・・けど、ここまで強大な魔術師が私を知ってて接触してきたって事は、それなりの理由があって来てる。そして、私はその理由にすぐに思い当たった。
「貴方、名前は？」
　そう訪ねると、少女はキョトンとした顔を一瞬浮かべ、それからケラケラとお腹を抱えて笑い始めた。まるでおちょくられているようで正直気分は良くないけれど、私より少し下の同年代・・・おそらくは、１４，１５辺りの見た目の少女がそんな行動をしていても、さほど嫌悪感を抱けないのは見た目ゆえだろうか。
　それでも、忘れちゃいけないのは、この子が恐ろしき魔術師であることなんだけど。
「いや～、驚いちゃった。まさか、魅了の魔術を掛けられてもお姉ちゃんがそこまで察しが良いなんて。今日出掛ける時しっかり体を洗ってきたはずなんだけどなぁ。私と同年代だと思って甘く見てたかもね」
「残念ながら、その匂いには慣れてるから。　貴方の目論見が外れて悪かった？」
　そう言った所で、その少女は唇を笑顔に歪ませた。しかし、それはさっきまでのおどけた笑みとは全く違う。まるでその少女の回りに急に闇が刺したように、闇夜の蝙蝠のような笑みをそこには浮かべていた。
　背中の震えを感じてしまう、止められない。自分より年下であるは

ずなのに、あの威圧には逆らえない。いや、威圧というのは強者から弱者に恐怖を与える行為だ。あれは威圧なんて優しいものじゃない。
あれじゃぁ、あの子は死神と同じだ。彼女は多分、恐怖なんて与える気はない。おそらく、私が勝手に怯えてるだけ。だけなのに・・・その恐怖からは、もう私は逃げられずに居た。
「まずは、これから入ろうか」
そう言って、彼女は今まで見せていなかった右手の甲を見せてきた。そういえば、今までは笑う仕草や、ペットボトルを渡す仕草の中でも、右手を見せようとはしていなかった。
そして、そこにあったのは。矢張りと言うべきか、赤色の痣がそこに浮かんでいた。まるで、逆十字のように浮かんでいたその令呪は、彼女の性質を物語っているようにも思えた。
「おっと、挨拶が遅れちゃった。初めまして、私は黒戴杏梨（こくだいあんり）。光（ブラン）のマスターを精一杯張らせていただいてるから、よろしくね？」
防寒着（コート）の裾を持ち上げて一礼する高貴さに、さっきの死神の笑みを忘れそうになる。でも、私の頭脳は彼女の名字に少し引っかかりを覚えた。
「黒戴・・・？」
黒戴、それは青森を拠点として活動する、呪い・口寄せの大家だったはず。西欧の黒魔術にも精通している家系だから、その後継者はこれほどの死臭を放つのも当然だろう。だけど・・・
「おかしい・・・黒戴の家系は、既に絶たれているはず・・・。それに、〝光〟は魔術協会から派遣されたマスターの筈じゃ・・・」
黒戴は既に絶えた家系だった。理由なんてどこにでも有るようなもので、優秀な魔術回路を持つ子孫を残せなかったこと。尤（もっと）も、日本じゃ黒魔術は排斥される風潮があるから、それ以前に零落の兆しは見えていたわけだけど、それがトドメとなっていた。それで、黒戴は途絶えた。
私はそう聞いていたけど・・・この子が狂言を言う子には見えないし、そもそもあの気魄を見たからには、その言葉を信じないわけにはいかなかった。でも、そうにしても、一度消えた家が魔術協会に依っ

て派遣されるのもおかしな話だと思う。
　そんな心から漏れ出した私の言葉に反応したように、歌うようにその子は返した。
「へぇ、なかなか勉強してきてるじゃん。感心感心、貴方の言う通り私が居なかったら確実に途絶えてた。」
「そうか・・・養子に、出されてたんだ」
「うん、マスターになったのなんて成り行きだよ。　大した理由なんて無い」
　魔術の世界では、どこかの家から断絶しかけている家に養子が出されることは決して珍しいことじゃない。養子を出す側の理由は、友好か物資か親戚関係にあるのか、それこそ様々だけど、養子を受け取る側は自らの魔術を世に残したいという意思の元にあるのは間違いない。でも、結局は赤の他人の子供を使ってるわけだから、血族を使った時よりも遥かに弱まるはずだけれど・・・。
　元々この子のポテンシャルが高かったのか、それとも親戚関係の子供を使ったからとかの理由で刻印との適合率が高かったのかは分からない。でも、この子は魔術師として卓越したモノを持っているのは間違いなく、それゆえに恐ろしかった。今回マスターに選ばれたのも、多分そこに関係してるんだろう。でも、相手がその話を進めない以上、私から聞けるのはここまでだった。
「なんで、マスターが私に挨拶しに来てるの・・・？」
「あぁ、そんなに気を立たせないでよ。今回の戦地の管理者に挨拶しに来ただけだって。」
　この分なら、私の令呪にも気づいてるだろうけど、そんな戯言を言っても彼女は嘘を言っているようには見えない。当然、あれだけ見事に自分の雰囲気を変えられるような子だから騙されてる可能性はあるけど・・・。
　一応、私は自分の懐にある武器に手をかける。この子に交戦の意思は無いはずだけど、私の見立てが間違えてる可能性もある。何より、あの恐怖を植え付けられて警戒を解けと言われる方が無理に決まってたから。

「ホントだって。　私ってそんなに信用ないかなぁ・・・」
　その子は、サイドテールにまとめた自分の頭を掻いた。いやまぁ、正直無いのかと言われたら分からないけど・・・信用しちゃいけない類の人間なんだろうなぁってのはある。
「え？　何・・・？　へぇ、サーヴァントを連れずに歩いてるんだ。この類の子が、別途行動をさせるような事はしないと思うから、もしかしてまだ契約してないのかな？　質問しやすくなる分には構わないけどね」
　突然、黒戴は中空と会話を始めていた。ひょっとしなくても、彼女はサーヴァントと契約してるんだろう。サーヴァントはその体を霊体・不可視化して連れて歩くことが出来るらしいから、彼女もそれをやってるのかな・・・。
　なんて思案していると、突然頭に痛みを感じた。　内部から来るものじゃなく、外部から、それも物理的な痛み。それに反応して、私が眼を動かすと、黒戴はあの死神の笑みを浮かべてこちらを見据えて右手を伸ばしていた・・・私の頭に。
「じゃぁさ、挨拶ついでに一つ質問いいかな？」
　そう言って、その子はベンチに座る私の頭を掴んでいた。しかも掴まれたのが右手、あんな手でまんまと掴まれる私にも非はあるけど、腐臭の濃さに暫く動けなくなりそうだった。彼女の手そのものが一つの墓場である可能性さえも疑ってしまうほどに。
　おそらくは、彼女の右手の人差し指と中指に付けられた指輪こそが、彼女の魔術礼装なのだろう。つまり、この体勢ならば彼女は自分の魔術を私に一瞬でぶつけることが出来る。それこそ、私が抵抗の意思を示した瞬間に。
　恐ろしすぎた。彼女が私の生殺与奪を完全に操作している事を厭でも理解して、声が出ない。
「ここってさ、居るよね？　橙乃が」
　その名前を聞いて、私は思考がフリーズした。予想とは大きく外れた質問と名前を出されたからだ。
　彼は聖杯大戦とは何も関係がない。そのはずだ。でも、ここで名前

が浮上するからには、大きな意図があるに決まってる。私はそれに足る物を耳に入れたことがなかった。
「どう、して、その名前が・・・」
口を動かすのだって一苦労だった。彼女の強迫は私の体の自由をいとも簡単に奪っていっていたらしい。
「おしえなーい。　あ、でも、貴方の答え次第だったら考えてあげなくもないよ？」
そりゃぁ、言おうと思えばいくらでも言える。自分が同じクラスであることも、彼の生活サイクルも分かる範囲で教えることが出来る。
でも、彼女の意図が分からない以上、答えることなんて出来ない。私の擦り切れた理性がそう叫んでいた。
その叫びを心にしっかりと留め、出来る限り抗う。それでも彼女の視線に射止められて、今すぐにでも口走ってしまいそうだった。
今にも言ってしまいそうだという頃合い。私の鼓膜が揺れた。
「アンリー・・・どこー？・・・」それは、住宅街にある公園に谺(こだま)して、微かながらも聞こえてきた。少女はその呼び声に反応したからか、私の頭に添えていた右手を離して、公園から出ていこうとする。
「はーい!!」
黒戴は、無邪気さを思い出したように取り戻して、自販機に向かったときのように可愛い足取りで公園から外に行こうとする。
「・・・いいの？私を解放して」
彼女の行動のあまりの不自然さに、つい私が質問し返していた。でも、正直誰もが思い浮かべる疑問だろうから、その質問自体私は、反射的に口走ったものだと認識するものとした。
だけど、黒戴はくるりと振り返り、年相応の笑顔を浮かべてこう答えてきたんだから私は何も言い返せなかった。
「良いよ！　だって、重要な質問だけど緊急の質問じゃないから！　じゃぁね涼お姉ちゃん！」
と言って、私が返す言葉を探している内に公園から離れていって見えなくなってしまった。
黒戴が見えなくなった途端、疲れがぶり返してきた。おそらくは、

彼女の恐怖に精神が耐えかねていたからだろう・・・既に、限界を通り越していた心は、彼女が見えなくなったのをスイッチにして活動を静止したように重くなる。
「はぁぁぁぁぁ・・・」
そして、私の肺の中にあった空気を全て絞り出した渾身のため息を最後に、私は一時間近く喋らずに座り込んでいた。
その間、スポーツドリンクを片手間に飲んでいたけど、特に何かを仕掛けられた様子はなく、ただ単に新品のスポーツドリンクを美味しく飲み干してしまったんだった。
結局、あの後公園に居座る気になんてなれなくて、すぐに席を立って家に帰った。
玄関には組員たちがまた一列に並んで出迎えてくれる。腹から出された声は、疲れた体によく響く。声の力で私の体が自壊してしまいそうだ。
そう、うんざりする気持ちで廊下を歩いていると、爺やが電話を持ってこちらに寄ってくる。
「お嬢様。　〝クロウ〟を名乗る人物が、お帰りになられたら折返し電話をと言っていましたが、如何致しましょう」
「・・・了解。　頂戴」
爺やは、無言でコードレスホンを渡すと、そそくさと退却していった。そんなやり取りをしている間に、私の部屋に辿り着いていて、組員達は既に居ない。自分の持ち場に戻ったようだ。
私はしぶしぶと、ボタンを押して彼女の電話を呼び出す。すると、コール音が一回鳴り終わる前に不機嫌そうな声が聞こえてきた。
「遅い」
「ごめんなさい」
ノータイムで返答する。クロウは、今回の聖杯大戦を取り仕切る監督役・・・と言っても、明確に〝闇〟のマスターとして参加するプレイヤーでもある。
どうやら、聖堂教会の代行者として、自分たちの行為の正当性を主張するために、敢えてマスターとして君臨しているらしい。大人の世

界は色々有る。
　そんなこの人は、とても厳格で完璧主義者然としたところがある。この人と話すと、自分が間違っていたという錯覚に負われる事は珍しくない。
　今は教会に居座って、こんな人だからこそミス無く仕事を熟してるらしい。こんな性格でも、２０代前後のとても美しい女性だ。彼女目的に教会を訪れる人も最近増えた。
　まぁ、彼女の鼻の頭の皺が取れたところは誰も見たことがないはずだけど。
「それで？　こんなに待たせたんだ。しっかり〝闇〟のマスターとして戦力になってくれているんだろうな？　サーヴァントは召喚したな？」
　あぁなるほど。今回はそういう用件だったらしい。
「これから召喚するところです。　用がそれだけなら、切りますよ」
「切るのは構わんが、用件はこれだけではない。　サーヴァントを召喚したのなら、私の所に来るのを忘れるな。渡すものが有る」
　きっと、それは今膝の上にでも置いて、手慰みに弄っていたりするんだろう。
　私は、これ以上彼女と話しているのも嫌になって、分かりましたとだけ返事をしたらすぐに通信を切断した。
　今日を通して分かったことは、此処最近この街に変人が増えつつ有るということだ。
　マスターってのはこういう人間ばかりなのだろうか・・・黒戦もクロウも、一般人とは一線を画している。実力もそうだが、性格もだ。
　私だけは、まともであろうと、そう決めて召喚の準備に取り掛かった。

其は闇に潜むもの　～〝闇〟のランサー～

縁側から、山間に沈みゆく夕陽を眺める。隣には、茶柱が立った湯呑が音もなく佇んでる。組員の内一人が勝手に作ってくれたものだ。湯気がまだ余裕有りげに揺れているのを見て、まだ飲み頃ではないなと思いふけった。

実のところ、召喚を執り行う前に少しぼんやりしていようと思って縁側に居たら、勝手に置かれてた代物だ、飲む気になるかどうかさえ怪しいのだけれど。

水面に浮かぶ天井を見て、自分が如何に恵まれてるかを思い知る。それこそ、こんな戦争に参加しなくても良い程に。

大きな家に生まれて、蝶よ花よと育てられ、自分で言うのもなんだけど完璧な女子に成長した。私ほどの完成品なんて、そう多くは居ないだろう。

実のところ、これは確認だ。自分が聖杯戦争に参加する意志の。

土地の管理者だからだという義務感なんて無く、この世界から悪をなくそうなんて荒唐無稽な正義なんて持ち合わせてない。

私がこの戦争に参加する意義は、どうしようもなく我欲のためだ。そして、大抵の人間はその我欲の為に命を掛けてこの大戦に望む。

怖いか、と問われれば、怖い、と即答できる。しかし、怖いからと逃げられる状況でもないし、逃げられる心情でもない。

なんてったって、夢見てしまったのだ。私の夢が叶った世界を。一体どうなるのだろう、なんて思いを馳せるしかなかった幻想の内側を。

妄想の果てを実現するために、命をかける。なんて狂気的。私も大概まともじゃなかったのかな？

「ま、それはこれからわかることか」

夕陽はもう残光だけを残して去りつつ有る。私の魔力が最も高まる時間がやってきた。湯呑をひったくり、喉から流し込む。

ああ、やっぱり熱すぎたようだ。何処か火傷した気がする。　でも、熱すぎるぐらいが丁度良かったみたいで、内側から力が湧いてく

るのがなんとなくわかった。
私は速攻夕陽から背を向けて、襖を開けて私室に入る。
それで、私室の隅に目を向ける。箪笥に魔力を込めると、箪笥がひとりでに動き出し、人一人漸く通れる程度の隠し階段が姿を現す。おそらく初代の遊び心だろう。箪笥の裏側に隠された隠し階段を只管降りていく。そんな仕掛けで１００年近く組員全員を欺けているのは、私の部屋、ひいてはその箪笥そのものに人払いの結界が張られているからだ。その点に関しては感謝してる。
そして、５０段ほどステップを降りて、出迎える無骨な鉄扉を、体の力全てを掛けて開く。
その向こうに広がっているのは、本当に殺風景。部屋の隅にある数個の棚と、部屋の中央に描かれた魔法陣を除けば、ただ鉄筋コンクリート造りの壁紙もない一室だった。
こんな場所で召喚されるサーヴァントは、少し可愛そうだな・・・そう思いながら、触媒の用意を進める。
「ま、屍霊魔術師（ネクロマンサー）なんかは墓場で儀式を行いそうだし、私なんか可愛い方か」
嘯（うそぶ）きながら、私は棚から黒々とした塊を取り出す。
これは、私が今回用意した触媒である、神代から存在した木炭だった。これを手に入れるための苦労と、時計塔に勘付かれない為の苦心が脳裏に蘇った。
それを魔法陣の真ん中に置き、魔法陣に欠陥がないことを確認した・・・うん、問題なし。
鉄筋コンクリートの床に、ナイフで溝を付けて作られたこの魔方陣は、私の血を注ぐことで初めて完成する。つまり、まだ未完成品。そんなこと、この段に入ってはもう関係ないけど。
そして、念には念を入れて、この部屋自体に簡易的な人払いの結界を貼った頃には、時間はギリギリいっぱいと言ったところだった。
「それじゃぁ早速・・・」
急に恐怖を想起する。
命を賭ける恐怖、戦争に出陣する恐れ。

今から私が聖杯戦争に入り込めば、そうでなかった頃の世界には二度と戻れないという確信。そんなものが今更になって脳裏を掠める。
そして、掠めただけだった。もし怖くなれば逃げ出せばいいなんて考えてた頃が遠い昔のように懐かしい。
「後から逃げるくらいなら、最初っから断ってるっての」
そんな言葉が、スッと口から出てきた。自分の奥底にあった、本心だ。
それは、雨雲を払う涼風のように、迷いを吹き飛ばしてくれた。
これは、ささやかな願いを叶えるために、１４人の魔術師が犇めくような闘いだった。それは最初からだ。
なら、私も命を賭ける。そんなものは当然の対価であって、避けては通れない道だ。
時刻を見る。午後六時。丁度ピッタリ。きっと外では、星が光を放つ準備を始めてる頃合いだ。夕と夜の境界が曖昧になるこの時間が私の魔力のピークだなんて、なんて世界は皮肉だろう。
私は、懐からナイフを取り出す。刃渡りが私の拳ほども有る、凶悪な形をした、とある連続殺人鬼が愛用していたと言われる業物。これだけで、魔術師相手の武装としての形を為す、優秀な刀。
そんなものを、自分の手に突き刺した。
痛みが私の腕を駆け抜ける。だけど、これは私の成功のために受け入れなければならない。滴り落ちる血が、足元の魔法陣に注がれていく。陣に満たされる、私の魔力。
それに応じて、魔法陣は朱く輝き出した。この魔方陣の成功を確信して、高揚を抑えきれない。
だけど、まだだ。これはまだ途中経過点にすぎない。本番はここからなんだから。
「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。其は闇に潜む者。
降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国へ至る三叉路は循環せよ」
この数節を唱えただけで、ただの魔法陣から吐き出される気魄。今の私が大魔術に接続するための歯車であるということが伝わってく

る。それと同時に、臓腑を引きずり出されるかのような不快感を私の中に生み出してしまう。

ならば、私に必要なのは、英霊を召喚するための高揚感だけではない。儀式を成功させるための冷徹さを取り戻さなければ。ここに要るのは、拳銃を自分の口に入れ引き金を引くための、悲しいまでの冷徹さ。不快感なんて、体から消し去ってしまえとばかりの大胆さ。

「閉じろ（満たせ）、閉じろ（満たせ）、閉じろ（満たせ）、閉じろ（満たせ）、閉じろ（満たせ）。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。」

練習のときはあんなに噛んだのに、いざ本番になると絶対にそんなことにならないと不思議な確信が私の心に満ちていた。

だけど、それも当然。今の私は、神話・伝説・信仰から幻想を引き出す糧にすぎない。だったら、失敗しないのも当然だ。この体は既に、人間でありながら、ヒトとは掛け離れたものなんだから。

「――――告げる

汝の身は我が下に。我が命運は汝が剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

この部屋に満たされる空気でさえ、魔法陣に侵食され始める。足元から溢れる赤光が、既にこの部屋を神聖な何かに変えつつあった。この不快感さえも、尊いものに感じてしまう。

「――――誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷くもの」

この二節が終わった瞬間、私の手の平に異質なものが握られた感覚があった。血に滲んだこの手で掴めたものが有るとすれば、それはたったひとつ。

英雄の存在、世界に轟いた英霊の神秘をこの手に掴んだ感覚を握りしめ、この儀式の成功の絶対を知った。

そして、最後の一節。

この一節を唱えれば、この儀式は終わってしまう。魔術回路を荒れ回された痛みも、今この瞬間になれば手放すのが口惜しい物に変わっていた。だけど、一節を告げねばならない。

部屋中に光が満ちる。私の体に神威が舞い落ちる。そのカムイが、

この世界に招かれた英霊そのものだと認識して、この儀式の完成の言祝ぎを紡ぐ。
「――――汝三大の言霊を纏う七天
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」
瞬間、部屋中に暴風が吹き荒れた。私は、頭に手を翳して吹き荒れる嵐と満ち満ちた灯（あかり）に、私は気を失いそうな衝撃を受けた。
それでも私が気を失わずに居たどころか、恍惚とした気持ちで居たのは。私が一瞬たりとも目を閉じずに居られたのは。
私の目の前に、奇跡（サーヴァント）が有ったからだろう。
「・・・お前が、オレのマスターなんだな？」
魔法陣の中心、私の前に聳えて立つ壁のように現れたのは、若緑の外套を身に着けた美形の男だった。余韻のようにたなびく黒髪でさえ色っぽい、そんな男の肩に乗せられた手槍が酷く様になっていた。
軽口めいたその言葉を、反響のように聞きながら私はこんな事を思っていた。
仮に私が世界の果てを見たならば、こんな気分になるのだろうか、と。それほどに、彼の存在は尊いものだった。
立ち尽くすサーヴァントは、こちらをじっと見据える。私の身長もさほど低くないと思っていたけれど、目測２０ｃｍ以上身長が離れていそうで、天上から見下されているような気分になる。
「そう。　私は真流　涼、よろしくね」
と、私は笑顔を浮かべて右手を差し出して握手の構えを取った。サーヴァントとの信頼関係は、必然的に共闘関係を築く以上何よりも重要なものになるから。
でも、私の目の前に居る男は、私の手を一瞥しただけで握手をしようとはせず、口を開いた。
「こんな何も無いような所でオレを召喚するとは、なんとも可哀想な女だこと。若く見えるのに、心は寂しいお婆ちゃんか？」
「会ってすぐの相手にそんな暴言叩けるようじゃ、私はまともなサーヴァントを引けなかったみたいね。凄く残念」
即答した。これは私の本心だった。

個人的に話を聞いてる限り、サーヴァントとマスターの信頼はかなり勝敗に関わってくると聞いてたから、そっちが嗜めてくるなら、私もそれなりの姿勢を取るしか無いと思っていた所だ。だから、信頼を築くのはやめて、悪魔的な対応をとってやろうとも覚悟してた。

そんな覚悟を決めていると、瞬時に男は表情を緩めた。

「うぉぉい！悪かった！　オレが悪かったから拗ねないでくれよ。ただ、名前からお前は東洋人だろうから、怒らねぇだろうと思ったから、ちょっと詰(なじ)っちまっただけだよ。許してくれ」

いや、そういう問題じゃないでしょう・・・。

「怒らなきゃ良いってものじゃないでしょう？　今後は改めなさいよ」

というか、怒るまで詰るつもりだったのかな。　だったら、それはそれで容赦はしなかったけど。

でも、腹の奥底で煮えくり返ってる私とは別に、男は軽佻とも取れる笑いを浮かべて気風良く返してきた。

「オッケー。　オレは女の言う事は無視しないタチでね。」

・・・なんというか、コイツが現世に居たらナンパ師なんじゃないだろうかと思える軽薄さを感じ取っちゃう。心の奥底で私を馬鹿にしてるんじゃないかと思ってしまう。

いや、ダメダメ。マスターである私がサーヴァントを信じないでどうする。既に私は聖杯戦争に参加した身。だったら、マスターとして責務を果たさなければ。

取り敢えず深呼吸。そして、サーヴァントのステータスを見出さなければ。

「分かった。そう言ってくれると助かる。じゃぁ聞くけど、貴方は、ランサーなの？」

出だしのセリフとしてはこんなものじゃないかな。

でも、男はさっきと違って不機嫌さを隠さない。この男がナンパ師だったとしても、そうでなかったとしても不機嫌さは少しは隠そうとするはず。それを隠さないからにはよっぽどの事を言ってしまったはず・・・でも、クラスを聞いただけだけど？

「触媒、木炭(アレ)だろ？　オレの素性を分かってて、そういう確認作業をするのはあんまり好きじゃねぇな。まぁ、ランサーで合ってるんだけどよ」
ランサーは露骨に目線をそらす。
まぁ、確かにあの触媒で召喚できる英霊は一人しか居ない。そういう意味では、彼の糾弾は決して間違っちゃいないし、私も同じことをされたら多少なりとも煩わしいかもしれない。
それでも、サーヴァントの事を正確に知ることは重要だから、弁えて欲しいけど。
「ごめんね。　でも、貴方の得意技って投槍でしょ？だから、アーチャーの可能性も疑っただけ」
「・・・なるほどねぇ？」
ランサーは、こっちを曇りない目で見つめてくる。と言うより、至近距離で目と目を合わせる。
確認するようだけど、ランサーは非の打ち所のない美男子。それに、指の入れ込む隙間も無いほど至近距離で見つめられて、頬を染めない女性は居ない。
この場で、年頃の女子代表として意見させて頂く。私は多分頬が赤くなってた。
だから、苦し紛れに目を逸らして、後ずさってから会話を続けるしか無かった。その様子を見てたランサーが視界の端っこで悪戯(いたずら)っぽく笑って居たのを見て少し冷静になれたんだけど、まだ心臓が早鐘を打ってる。静まれと心の中で唱えながら、理解を深めることを続けた。
「え、えぇっと・・・じゃぁ、続けて訊くけど。貴方の真名は『メレアグロス』で合ってるのよね？」
多少早口になるのを自分の耳で聞きながら、自分の心の中にあった想定を尋ねる。
すると、さっきの小悪魔的な笑みをやめ、心の底から自信の笑みを浮かべ、ランサーは胸に拳を当てて応えてきた。
「如何にも。　オレは、アレスの息子であり、カリュドーンの英雄たる

メレアグロス。ま、ステータスは自分で見てくれや」
メレアグロス――――運命を司る三人の女神から武功を約束された戦士。
本来、サーヴァントが持つ固有スキルはサーヴァントが一度開示しない限り見ることは出来ないけれど、そのランサーが見るように許可を与えてくれたお陰で、私が幻視しているサーヴァントの能力表(せっけいず)には、固有スキルや宝具の詳細が隅々まで見れるようになっていた。
その能力値は、私の予想を遥かに超えるものだった。Cを下回る能力値はDの幸運だけ。敏捷に到ってはA＋となっている。他のサーヴァントのステータスを見たことがないから全体的に見て強いのかは良く分からないけれど、矢張りメレアグロスの名を汚さぬ強さであることは確認できた。
対魔力も高いランクで有していて、Bクラスの神性も持っている。こうしてみると、メレアグロスという英雄が如何に強い者か分かる。召喚できた自分が却って信じられないぐらいに。
「あぁ、ところでマスター。一つ聞いていいか？」
「ふぇ、え？　何？」
能力表に見入ってた私は、自分の頭上から話しかけられて、思わず変な声が出た。
こんな所で話しかけてくる人間、更に私をマスターなんて呼ぶヤツは一人しか居なかった。でも、何と言うか、声色がさっきまでの物と違うような気がしてならない。
反応して見上げてみると、さっきまでの軽薄とも取れる笑いが消え去っており、真摯な男の炯眼がこちらを見つめていた。それで、知識としてしか入っていなかった、当然の事実が脳裏に湧き出た。
私の眼の前にいる男は、偉業を成し遂げた英雄だったのだ。そんな当たり前の事を、彼の問いを聞きながらゆっくりと噛み締めていた。
「マスターの、聖杯に掛ける願いを聞いておかねばならねぇからな。今の内に教えてくれ」
そう質(ただ)す表情は、まるで罪人を見定める裁判官のように、こちらの奥底を見破らんとしているみたいだった。

私とサーヴァントの関係は、何より聖杯を手に入れるという、参加者ならば持ち得なければならない欲望が繋ぎ止めていると言っても過言じゃない。もしも、私の目の前に居る男が手段を選ばないで戦いを進める男だったなら、私を無能と断定した瞬間に、私を無残に殺す算段を立てるだろう。それが、五肢を引き千切って畑にばら撒くことか、腱と回路を切って敵に引き渡すことかは分からないが、少なくとも安息の内に死ねるような幸福な事は起きなくなる事には何も変わりがない。それは、サーヴァントが私を憎らしく思った所で同じことだ。

即ち、ランサーは私を見極めている。自らが仕えるのに、不足ない人間であるのかどうかを。

「私が聖杯に願ってる事なんて、些細な事だよ」

そう私が言ったら、ランサーが顔を顰めるのが目に見えた。

私の願いを聞いたら、ランサーは幻滅するかな。だけれど、嘘をつくのは良くないことだと思ったから。これから袂を分かつとしても、私は真実を伝えなければならないと思っていた。

『今より、ほんの少しだけ私が生きやすい世界の実現』。それが、私が掛ける願い。」

「ふぅん、具体的には？」

「それは・・・正直、まだ決めてない。口五月蠅い私の家族達かも知れないし、魔力を上げることかもしれないし、この私の体の事かも知れない。或いは全部かも。でも、この願いだけは譲れない」

あるいは、父さんを生き返らせることかも・・・。その言葉は飲み込めた。少しだけ気恥ずかしかったから。それ以外を伝えると、ランサーは数秒の沈黙の後・・・不意に微笑んだ。今までの、不真面目な笑みではなく、多分心の底からの笑み。

その後、憎たらしくこう続けてきたんだから、私のサーヴァントは心の奥底から素直じゃない。

「全く・・・なんで、こんな謙虚なマスターを引き当てちまったかなぁ。オレは」

「あれ？　不満でもあるの？」

「大いに有る。2つもな。　1つは、なんでもっと大きい願いにしないんだ。別に世界征服とかでも良かったじゃねぇか。　それともう1つ、お前は自分に自信がないかも知れんが、マスターとして仕えるには申し分ない。気質もそうだが、力量もだ。ヘラクレスみてぇな、さらに強いサーヴァントを召喚しても良かったろうに。なんでオレにしたんだ？」

大いに有る、なんて言う割にはランサーは笑いながら軽口を飛ばしてきた。

まぁ、嫌われるよりは随分マシだから、受け入れるしか無い。

「世界征服かぁ・・・正直、思い浮かばなかったなぁ。でも、思い浮かんでもやんなかったと思うよ？私は自分が生きてる今の世界に満足してるもん。ただ、取り巻く環境にほんのちょっと煩わしいと思ってるだけ。だから、これぐらいが丁度いいんだ」

それに、世界を統べるなんて大きすぎることは私の身に余る。そんな事を願えるのは、私よりよっぽど強くて、魂の奥底から自信が有る人ぐらいだろう。

そんな事を言ったら、ランサーにまた笑われるかもしれないから、こんなセリフはおくびにも出せない。丁度ランサーも、少し私に圧倒されてる・・・・ような気もする。だから、ほんの少し言い返してやろうと思って、私は人差し指をランサーに突きつけた。ランサーは驚いたのか、少しだけ背中を仰け反らせる。

「2つ目については、言うまでも無いでしょ？　兄より勝る弟なんて居ないんだから。」

と、私は満面の笑みを浮かべて答えてやった。だけど、この答えはちょっとだけだけど本当に感じていた事だから、自分でも驚くぐらい簡単に口から飛び出していった。

その滑らかな回答に、ランサーは最初は大口を開けて驚き、その後に、腹を抱えて笑った。

「は、はははは!!　そうだな！そんな当たり前の事を聞いたオレが悪かった！」

「ふふっ、そうでしょ？」

そのまま、私達は暫く笑っていた。　出会って数分だと言うのに、心の奥底から通じ合ったように互いのことを分かった気になって、そんな些細で見当違いなことも笑いの種になってしまって。
結果、たっぷり2分は笑った後、ランサーは出会った時の軽薄な笑みを浮かべて、口を開いた。
「お前の願いを聞いたんだし、オレも言わなきゃなるまい。　オレは、ある女と会う事を目指して、召喚に応じた。お前の話を聞いた後じゃ、我欲に塗れてるようで多少恥ずかしいが・・・」
「その女って、アタランテの事？」
そう聞き返して見ると、ランサーはバツが悪くなったのか、目を逸らして静かに頷いた。
まぁ、メレアグロスはアタランテを愛したから魔獣の革を手渡した訳だし、正直予想はついてたけど。
それでも、そんな可愛い願いが、さっきの剣呑な表情から来てるんだろうなぁって不思議な確信があって、なかなか感心してしまっていた。
「はぁ、おい。　なんでそんな顔してんだ・・・」
「え？」
ランサーからの指摘で、自分の顔に手を当ててみると、唇が釣り上がっているのが分かった。
でも、その理由には割と簡単に行き着いて、笑いを保ったまま私は答えた。
「いや、私達お似合いだなぁって。　私だって我欲のために闘うんだもの、自分が生きやすい世界に変えたいって言う立派な我欲のために。だから、私達は気が合うんじゃないかな～・・・って」
「なるほど・・・確かにな？　二人共我欲の為に戦う、俗物的な戦士って訳か。」
「変？」
そんな、ランサーの本質を問いたような私のセリフに、ランサーはこう答えた。
「いいや？　気に入った。確かにそんな所が丁度いいんだろ」

その後に、ランサーはこう続けてきた。
「悪かったな、初めにお前を窘めちまって。お前は、確かにオレのマスターに相応しい・・・認めよう、オレはお前に従う。これからは、お前の願いを叶える為にオレの槍を振るおう、スズカ」
「なっ・・・！」
私は、彼のセリフに思いっきり驚いてしまった。いや、いきなり私を認めた事に関して驚いてるのも有るし、私を認めてくれたことは正直凄く嬉しいんだけど・・・。
「な、ななな、名前！　なんで名前呼びなの!!」
今まで、マスター・・・挙句お前とか言ってたのに、いきなり名前呼び！
ランサーがなまじ二枚目な事が更に私の精神を焼き切る。　魅了の魔術でも使われたんじゃなかろうかと思ったけど、残念ながらメレアグロスにそんな逸話は無い。つまり素。
私ってこんなに心が弱かったっけ・・・。
「サービスだ、それとこれも渡しておくぞ」
「この話は終わってない！　全く、召喚されたばかりの貴方が持ってるものなんて、武器ぐらいしか・・・」
そんな風に毒づく私を、左手で制したランサーが、私に何かを手渡してきた。
それは、薪のような物だった。いや、薪には違いないんだけれど、その内側に潜む魔力は・・・最早、魔術師（だれか）と較（くら）べることさえ傲慢と思える密度。武器でさえ無いのに、こんなに魔力を秘める物は・・・考えたくないけれど、宝具しか無い。
いや、私はこれを見た瞬間に正体を突き止めていた。なにせ、私はこれの成れの果てを使ってランサーを召喚したのだから。
曰く、英雄メレアグロスが生まれてから7日経ったある夜、アルタイアの寝室に三人の運命の女神モイライが現れた。そして、一本の薪を暖炉に投げ入れてこう予言したという。
――その子は百戦錬磨の武人となるだろう。但し、その薪が燃え尽きた時、子は苦しみ悶え命を落とすだろう。と。　アルタイアはそれ

を聞いた時、薪を誰にも見つからない場所に隠したという。
そして、魔獣狩りの一件の後、アルタイアが息子を呪う余りその薪を燃え盛る暖炉に入れ直した時、戦いの最中であったメレアグロスは不意に訪れた痛みと苦しみに耐えかね、最期を迎えた。
これが宝具だと言うなら、その逸話に添った宝具・・・つまり、ランサーの命そのものなんじゃ・・・。
「・・・ダメ、受け取れないよ・・・。こんなの・・・」
私は、その重責から逃げようとした。私一人の命だけでも守り切れる保証がないのに、ランサーの命まで預かるなんて。そんな物まで背負えるほど、私は大きくない。
でも、ランサーに差し出し返そうとしても、ランサーは頑として受け取らなかった。そして、私にもう一度突き返してきて、ランサーは口を開いた。
「お前は、オレのマスターだ。　だから、形はどうあれ、オレの命を預かる義務がある。」
「・・・でも・・・！」
反論しようとする私の口を塞ぎ、ランサーは私の耳元で呟いた。
「スズカならやれるさ。　なんせ、オレが認めた女なんだからな」
そう言って、ランサーは私からそそくさと離れていく。
でも、それを分かっていて私はランサーについていくことが出来ない。なんて大莫迦者なんだろう私は。
あんな言葉に絆されるなんて、どうかしてる。仕方が無いから、私は悪態をつくことしか出来ない。
「もう・・・こうなったら、ランサーの命は私が持ってるよ！　どんなことになっても知らないからね！」
「お？　スズカは、オレに恨まれるような成果しか出せないのか？違うよなぁ？」
意地悪っぽく、ランサーは私を詰(なじ)った。
でも、最初に会った時とは違う。今度は、私はどことなく爽やかな気持ちを持って答えた。
「そうじゃないよ！　最後に私達が戦場に立ってた時、貴方が私に頭

を下げることになっても知らないから、って事！」
「っははは！　そんな日が来ると良いな！」
ランサーが笑ったのを皮切りに、私達はまたずっと笑ってた。そして、部屋に取り付けられた時計の短針が８に差し掛かっているのを見て、２時間近くこんな所に居たのは初めてだなぁなんて思いながら、召喚の儀を終えた。
結果は大成功。　ランサーの宝具も、即席だが強固な結界が貼られた金庫に保管することにして、私達は地上に上がった。持ち歩かなくて良いのか、なんてランサーが聞いてきたけど、流石にそこまで度胸があるわけじゃないと返したら、呆れながらも認めてくれた。
何はともあれ、この軽佻浮薄な男と私が組むなんてと思うと、不安なれど明るくもあったのは分かってた。ランサーは間違いなく超一級の英雄で、私には不釣り合いなほど輝いているような男だったから。

〝蛇〟

「そういえば、そろそろ御飯の時間だった」
　箪笥に薪を仕舞いながら、ふとそんな事を思い出した。壁に備え付けられた時計を見ると、案の定時計は８の時刻を示そうとしていた。
　夕食が８時なんて少し遅いかもしれないけれど、６時から魔術の鍛錬を始めると、疲れで体が錆び付いてくるのがそれぐらいだったから、自ずとその時間に夕食を用意してもらうのが当たり前になっただけ。ある種幼少期の習慣が抜けきれてないとも言える。
　そんな体内時計の正しさに多少歓笑しながら、階段を上がる。
　そして、自室に上がってきた時、ふと大事な事を指示し忘れたことを思い出して、ランサーの方を向き直る。
「そういえば、ランサー。サーヴァントは霊体化出来るって聞いてるけど、具体的にはどんな事になるの？」
「霊体化ねぇ。スズカが思ってるのとそう変わんないと思うぜ？不可視化と物理的干渉の相互不作用、と言った所だ。それが？」
「ふぅん。　じゃぁ、マスターとして最初の命令。これからは、基本的には霊体化して私と行動を共にして、人間に対して姿を現さないこと。緊急時とかは霊体化を解くタイミングはそっちに一任するけど、それ以外の時は私の指示が無い限り霊体化を解かないこと。　良い？」
　と、令呪が刻まれた右手を突き付けて言う。
　こんな事で令呪を使う気は毛頭ないけれど、一応『自分はマスターだぞ』という意思表示でもある。ランサーは私をマスターだと認めてくれてるみたいだけれど、違う人間で行動を同じくする仲間である以上、すれ違いを起こすことは許されないから。
　で、当のランサーはと言うと、笑顔を全く崩さず承ってくれた。
「良いぜ。　元よりそうするつもりだったしな。」
　そう言って、ランサーの体は青い霧のように崩れ、２秒もせずに消えてしまった。でも、私がマスターだからか知らないけれど、ランサーが変わらず私の前に立っている事が不思議と実感できる。

つくづく調子と物分りの良いサーヴァントを持ったなぁと感心しつつ、居間まで歩く。夜時は皆仕事だから、朝ほど喧しくないのは好ましい事なので、堂々と闊歩する。この季節は縁側に吹く夜風が肌寒いけれど、少々肌を刺す方が心地よく感じるのもあって、悠々と月を見ながら歩いた。

肝心の夕食も、鶏肉の照り焼きを始めとした数々の料理の載せられた皿を平らげることが出来て、久々に満ち足りて食事を終わらせることが出来て、私は至極満悦。３０分もしたら食べ終わって、歯を磨いた後に、私室に戻った。

「そういえば、今日は授業の内容が何一つ頭に入ってこなかったし、復習ぐらいはやっておかないとなぁ」

思い立って、鞄から教科書と筆箱を取り出し、正座して書き物机に向かって、さぁコレから始めようと伸びを行った所で、障子の向こうから慌ただしい足音が聞こえてくる。縁側を誰かが走ってるんだろう。

この家は広いし、きっと遠くの部屋に急ぎのようがあったんだろうと聞き流そうとしたら、今度は勢い良く障子が開いた。開いた人は、私が名前を知らないような下っ端だけど、額に汗を浮かばせているのを見るに、ここまで辿り着く事への必死さが伺えた。

「お嬢！　お知らせしたいことが！」

「何？」

「〝蛇〟が・・・！　〝蛇〟が現れました！。　居住区の路地裏で、麻薬取引の現場を取り押さえられたようです！」

蛇、そんな何でも無いような名前に、怖気立つ。背中に戦慄が走ったように、震えが生まれた。

「麻薬ぅ？　この街で？」

麻薬は犯罪だらけのこの街の中で、唯一と言っていいほど珍しく一切禁止している物だ。利益を追求するなら真っ先に手を出すべき代物であるべきなのではあるが、人道に悖（もと）る。古風だという誹りは甘んじて受けるが、譲る気もない。私や先代の決めた戒律を破ることは、この街では死と同意だ。

おおよそ、ルールも知らない仲買人が、自分で商売に手を出してしまったのだろうか。運の悪い人間も居たものだ。
「分かった、すぐに行く！　ジャケットの準備をしておいて！」
私は半ば二つ返事で答えた。　彼は、承諾の声をあげた後、お辞儀をしてすぐに障子を閉め出ていってしまった。
それと入れ替わるように、ランサーが念話で直接私の心に話しかけてきた。
『まさか、蛇一匹でここまで騒ぐとはなぁ。　見かけによらず、腰抜けが揃ってるのかね？』
「茶化すのはやめて。　貴方が思ってる蛇とは別物だから」
『じゃぁ、ご教授願いたいものだなぁ』
部屋着から、外向けの服、それも長袖長ズボンの見た目度外視・動き易さ重視の戦闘用の服をチョイスして着替える。今までそんなことは無かったけれど、万が一アイツに遭遇したとしてもある程度は対処できるようにだ。
「〝蛇〟って言うのは、1，2年前からこの街の夜に現れるって言われてる通り魔のようなヤツ。私達の同職の中で、いわゆるやり過ぎた連中を狙って襲ってる。死者は出てないけど、その殆どが死亡寸前の重傷で発見されてる。計71人がやられてる。私達は節度を持ってやってるから、被害は何一つないんだけど・・・」
『ふぅん、じゃぁ別に目くじら立てて追いにいく必要は無いじゃねぇか。なんでわざわざ』
「それが問題大アリなの。　私達は名実ともに、この一帯の管理者だもの。本来は、そういう奴の始末は私達の仕事だから。仕事を横取りされてる形。
例えるなら、私達が落とした宝石のネックレスを、これはお前のなんだから返してやるよってこれ見よがしに言われて手渡しされたようなもの。得をするのは私達でも、信用を落とすのも私達って事。事実、5代に渡って作り上げた私達の威厳が崩れつつある。だから、早急に押さえる必要があるってこと。」
抽斗から拳銃を取り出し、机に置く。今頃用意してくれてるジャ

ケットの内ポケットは、銃を収納する為だけに作られた物だけど、手元にない状況では仕方ないから机において置く感じ。
Ｈ＆Ｋ　ＵＳＰ。・４５ＡＣＰ弾（ポイント）を使えるからと言う理由で採用している拳銃でもある。でも、自分の魔術礼装らしく、工学的改造に魔術的改造を重ねて、小脇に抱えられるサイズながらも多少禍々しい形になってる。
『お？　随分と厳（いか）つい武器だなそりゃ』
「槍使（ランサー）いに言われたくない。　そもそも、これ殆ど消音器（サプレッサー）だからね」
さらに、マガジンを数個取り出して外に出る。数は重要じゃなくて、要は弾が入ってるのがあるってのが重要だから。
縁側を通って、玄関に到着すると、黒スーツの見知った組員が数人立った中に、爺やがジャケットを持って待っていた。黒革のジャケットを服の上から羽織られ、自分で袖を通し、内ポケットにさっきの銃とマガジンを通す。これで、戦闘用の私の形態が完成した。
「護衛は要らないよ。」
と、爺やが言うであろうセリフを先取りした挙句否定する。もちろん、その場に居る全員は驚くが、このやりとりそのものは何回も繰り返したものであるから、驚く以上のリアクションはしないでいてくれた。正直、そっちの方が遥かに助かる。
『本当に良いのか？　本当に？』なんて霊体となってるランサーが誑かしてるけど、絶対に本心じゃない。目につくような　いやらしい笑いを浮かべてるのが目に浮かぶ。
「は、はい・・・。では。　場所はこちらです・・・」
なんて、爺やが小声で言いながらメモを渡してくる。そこまでして私についてきたかったのかは知らないけど、大人数で行動されるは私達の仕事柄よろしくない。そもそも、現場になった場所と、狙われた人間の様子を見に行くだけだから私だけでも問題ないし。
肝心のメモに記されていたのは、ここから１０分と掛からないような近場だった。
それで、私は玄関から飛び出て、裏手の駐車場に停めてある自分のオートバイに跨（またが）った。

「そういえば、さっきは確認できなかったけど、ランサーは騎乗スキルは・・・」
『騎乗は持ってねぇから、乗り物を持って走った方が速ぇな』
「あっそう・・・」
サーヴァントって皆こうなのかなぁ。それだったら、神代や古代の戦争で戦車に乗ってた英雄は皆、自分の足のほうが早かったりして・・・。
そんな事無いと信じるしか無いか。
と、半ば諦めに近い想像を振り切って、エンジンを吹かす。苦労して免許を取った甲斐があって、歩きだと２０分は掛かるような場所まで7分で着けた。
現場は、想定通り人通りの少ない路地裏。繁華街から幾らか離れた場所であって、ビルの集合体なれど、街灯は無いような寂れた場所。ここを目的地と定めない限りここに限りつくことは困難だろう。おかげで、警察に知られる前に私が辿り着くことが出来た。
その中でも更に奥まった場所、入り口と出口以外存在しないような場所、裏社会の取引の場所としてよく使われる場所が、件の現場だった。
「暫くここは使えないなぁ・・・いい場所なのに」
そんな愚痴を零しながら、バイクから降りる。ランサーも同じタイミングで私の隣に並ぶ。霊体化してるとは言え、バイクに走って追いついてる訳だし、敏捷Ａ＋は伊達じゃないって事か。
『そう言えば、聞いてなかったんだけどよ。なんでソイツは〝蛇〟なんて呼ばれ方をされてるんだ？』
「あぁ、それ？　まず解ってる情報として、そいつは素手で相手を殴り倒してるんだよ。護衛が何人で、どんな武器を持ってるとか関係なくね。それで、その様を実際に見たって自称してる組員が、ソイツは〝蛇〟を使ってたって言ってるんだよ」
『こっちでも〝蛇〟か・・・』
「その〝蛇〟は・・・拳法の一つ。ま、一種の都市伝説だよ。人体の破壊に特化した拳法だそうで、それを習得するためには赤子の頃から鍛

錬と人体改造を欠かしちゃならないらしいけど、その詳細は誰も知らないなんて、やっすい小説に出て来るみたいな武術。だけど、それ以外にはそいつの正体に関する話は噂も流れないから、それの呼称も〝蛇〟になっちゃったって事。でも実際、素手で破壊したにしては破壊の痕はいつも酷いもんだよ？　爆竹の方が安全かもしれないね」
『はぁん。　なるほどねぇ？』
　と、そんな事を会話してたら、現場についた。そこには、男が６人は転がってる。
　〝蛇〟の現場を見るのは数度目だけれど、何度見ても凄惨なものだ。これを生きていると判断するほうが難しいと思える程に傷つけられている。ここまでやられたら、傷つけられていると言うより拉げ（ひしゃ）てると表現するほうが正しい。多分生死の状況だって、今は生きてる、という判断のほうが正しいんだろう。無残に破壊された呼吸器官が、壊れた縦笛（クラリネット）のように歪んだ呼吸音を立てている。男の周りのビルディングの壁だって、まるで大質量がぶつかったように、一点を中心にヒビ割れてる。まるで災害だ。
「お、おぉぉ・・・」
　と、私が検分してると、男の一人が目を覚ました。
　ドラム缶みたいにぶくぶくと太った体つきの中年の男の顔に、私は見覚えがあった。足を洗ってこの組を抜けていった、古くの直属の部下だった。私達の管理が行き届いているこの街で、麻薬取引なんて納得の行かない事だったけれど、この男が持つコミュニティなら私に知られず行うことも決して不可能じゃないだろう。多大な苦労と犠牲を払うことになるだろうけれど。おそらく、外から引き抜き（ヘッドハンティング）でも受けて、この街で麻薬の流通でも任されたんだろう。よく周りを見渡せば、針金細工のなり損ないみたいに折れ曲がった人体の中に、少し前に抜けていった組員の顔が複数あった。
「お嬢・・・助けて下さい・・・。　救急車を・・・腹に、穴が開いて・・・。アイツ・・・素手なのに、指で腹を・・・」
　知ってる。　その他に、螺旋巻きみたいに腕が取れかけてる。あの分じゃ生き残っても大腸大部分摘出＋義手暮らしになる。その前に、

何ヶ月かは病院で生活することに為るなぁ。となると、最早今まで通りに仕事できるかは分からない。手駒(なかま)は既に人間としての生命活動は望めないし。

だけど、私はその懇願を突き放すために、敢えて冷たい無言を貫いた。さっきまでの寒さは、まるでダウンバーストのようにその男を道路に引き付ける。既に、意識は途切れ掛けてる。私が助けを呼ばなければ、数分かそこらで目を閉じ、そのまま目を覚ますことはないだろう。

だからこそ、私は口を開いた。

「貴方に私をお嬢と呼ぶ資格はない」と。

その言葉を耳から入れた男は、この世の終わりを見たみたいに、顔色を灰色に変えた。無様に開いた口が痛々しい。

「貴方は私の組から抜けた、その時点で貴方は私とは関係ない誰かになれた。でも、私の領地に手を出すような男は、等しく〝私の敵〟だよ。貴方は、私に助けを求めるべきじゃなく、私を敵と断定して無事な脚で逃げるべきだった。もしくは、その懐の拳銃(チャカ)で応戦。・・・だけど、真逆貴方を処断しなきゃならないとは思ってなかった。流石に貴方を無残に殺すのは心苦しいから、処刑にしてあげる。」

私がそこまで言い切ってナイフを取り出す頃には、男は涙を流して嗚咽を漏らしていた。だけれど、ここで情けをかけては何も進展しない。情を殺して、悍ましい形をしたナイフを首筋に当てる。金属の感触が恐ろしかったのか、男は小さく息を漏らした。

「そう言えば、聞くことがあった。　ソイツの特徴は覚えてる？見た目、声、癖・・・なんでも良いけど」

「いえ・・・全然分からなかったで――――」

全部を言い終わらない内に、ナイフで首を掻っ切った。真一文字に切り結んだように、コンクリート製のビル壁に血痕が付着する。このナイフの切れ味は保証出来る、これだったら失血死で苦しまず死ねるだろう。

ナイフを拭きながら、この男と過ごした日々の思い出に浸る。この男は悲しいことに、意味のない嘘は吐かない男だった。ここまで手ひ

どくやられた相手を庇うなんて事をする理由は、脅迫されてる・・・ぐらいしか無いけど。まぁ、ソイツが誰かを脅迫するような相手なら、すぐに尻尾を表すだろう。

なにせ、手酷くやられた相手に報復してくれるなら、その《手段》は誰だって良いと思う連中だって裏には潜んでるんだから。

『なるほど。　スズカも大概だが、ここは酷い』ランサーが、私に聞こえるような小声でぼそっと言う。

そもそも、念話なら私にしか聞こえないんだから、小声で言う必要すらないんだけど・・・。人間大声より小声の方が気になるものだから、つい反応してしまった。

「・・・まず、大概の意味から問い質しちゃおっか」

『言葉の通りだ。ま、オレがお前に惹かれる訳が分かったとも言える。会った時から、英雄の目をしてたからな。身内には優しく、敵には苛烈な者の目をしていた。それが、こういう訳とはな・・・。マスターとして心強い限りだ』

「こういう稼業の人間は、情を捨てる場面が多いからね。見せしめだとか、違反者の処断だとか、淡白でロクでもない理由で人を殺すことだって指じゃ数え切れないほど有った。きっと、魔術師としての気概も、早い内に身についちゃったんだよ・・・で？　本題は？」

『あぁ。　ここ、まるで英霊（サーヴァント）が荒らしていったみたいに酷いって事だ。寧ろ、人間がやったって言われる方がピンと来ない』

その発言に、私は訝しみを覚える。この災害は昨日か今日起きたばかりのモノじゃない。1年や2年も前から、起こってるモノで、サーヴァントが召喚できる時期よりも遥かに前から起こってる事だ。

・・・だからこそ、その結論に至るのが怖かったのかもしれない。

「まさか、受肉した英霊・・・。」

『それはねぇな。　受肉出来る実力の英霊なら、もっと魔力の残滓が残るはずだ。すぐに駆けつけたんだからな。だがここにはそれがねぇ。それに、同じ理由だが、破壊の規模が小さい。まぁ、それは幾らでも偽装できるが、それをするつもりならまずこんなに目立つ方法で魂喰いは行わねぇだろ。これじゃぁまるで食い散らかしだ。

だったら、結論は一個だ。サーヴァント級とは行かずとも、それなり強力な魔術師が行ったって事だろ』

そんな会話をしながら、路地裏から出る。流石に血腥い話を外に聞かれる訳にはいかないから、念話同士で会話を続ける。

『でも、そこまで強い魔術師がこの街に居るなんて・・・。私は管理者（セカンドオーナー）だよ？そこまで強い魔術師が土着で存在してるなんて、先生を除いたら、有り得ない』

『四の五の言ってる場合じゃねぇのは解ってるだろ。兎に角、ソイツを見つけ出すしか無い。もし敵として立ちはだかられたら・・・ま、無ぇと思いたいがな』

そんな会話をしていると、ふと、視線が気になった。道路からじゃなく・・・上から見られていることに気づいて、探し始める。

すると、月を背にして、この市で一番高いランドマークビルの屋上に立ち尽くす人間を見つけた。おそらく、私から彼処まで、直線距離で５００ｍはあろうかと言う所から、こちらを静かに見据えているだろう人間。

見られっぱなしと言うのも癪だから、こっちも視力を魔術で水増しして抵抗して覗き返す。

・・・そこには、見知った顔の人間が立っていた。なんでアイツがあんな所から私を見ているのか分からない。でも、私は立ち尽くしたまま見つめ返しても、相手は視線をそらす素振りが全く無い。

まるで、私を見るのを楽しむようにこっちを視線で射止めている。

もう遅いかもしれないけど、私はそれに気づかないふりをしながらバイクに乗って帰るしか無かった。でも、その帰路が終わっても私の体から鳥肌は引っ込んでくれなかった。

踊り舞台

「ダルい・・・休みの電話行ってるよね・・・」

時計の短針が１０を過ぎて、私はようやく布団から芋虫のように抜け出た。

理由はたくさんあるが、その全部は要約すると〝疲れてるから〟となる。

まず、昨日のこと。　〝蛇〟が現れた件だ。

今までは、被害者の体は放っておいたけれど、今回は訳が違う。もともと私の組に居た事もあって、警察なりに発見されたらウチに粉が掛かる可能性がある。だから、海に沈めてきた。その労力もあるし、家に帰ったら説明を求められて、発見した時の状況から相手がどうとか細かく説明させられた。

お陰で床に就いたのは2時を過ぎた頃。これでダルくならないはずがない。

でも、それぐらいなら大丈夫。夜更かしだって何回かやってるし、夜更かしした時だって疲れるは疲れるけど、学校行けないほどじゃない。

学校に行けないほど私から活力を奪ってるのは、今私の傍らに立って笑いをこらえてるランサーだ。

サーヴァントと言うのは、魔力を思った以上に食い尽くすらしく、私の体は・・・何と言うか、内臓が一つ抜けたような虚無感に襲われてる。ついでに、睡眠後だと言うのに体力が全く無く、動くことすら許してくれていなかった。こんな状態で、あの大声挨拶を受けたら仰向けに倒れたんじゃなかろうか。寝坊してよかったなんて事はないけど、縁側にあの鬱陶しい連中が居ないのは少々胸がすいた。そんなことを考えながら、朝食の席に着くと、いつもより少なめのお粥が運ばれてきた。私は病人じゃないんだけど・・・。否定をするのも面倒なので、匙を取る。

『今日は学校・・・とやらに行かないんだろ？　どうすんだ。引き篭もるのか？』

ご飯の粥を啜っていると、頭の中で声が聞こえてきた。ランサーの念話だろうが、頭に声が響いてくるのは寝起きの頭には多少痛い。
「引き篭もるなんて事はしない。別に家に篭ってまでやること無いし。　だから、取り敢えず散歩しようと思う。ランサーだって、聖杯戦争の舞台をしっかり確認しときたいでしょ？」
『まぁ、知らないよりは知っといた方が良いしな。　マスターがそうしてくれるってんなら、別に拒否するつもりはない。だが、体調は・・・』
「体は慣れてきたからね。　昼頃には出歩けるようになるんじゃないかな」
そう言うと、ランサーは『良かったな』とだけ言って黙ってしまった。まぁ、私個人の見立てだと、楽しみがこらえ切れず、会話をシャットアウトすることで隠してると見た。1日も一緒にいれば挙動の意味も多少は知れてくる。男と一つ屋根の下居るのも悪くはないと思うけど、そう表現すると尻軽っぽいから控えておこう。
さて、そんなこんなで昼頃になって、組員の制止も振り切って外に出る。一人で出たけど、まさか話し相手が居るとは解ってないだろうから大袈裟になるのも分かる気もするけれど。
あの時と違って、歩きで外に出たから、ランサーにとっては初めて見るものばかりで新鮮だろうな・・・。と思ったけど、ランサーからは感嘆の声も漏れてこない。ランサーの姿は見えないから、声を我慢しているのかどうかは分からないけど、そもそも我慢するような男にも思えないから多分ホントに何も思ってないんだろう。
「貴方の時代からは数千年は経ってると思うけど、別に感動とか無いんだね」と、一応問いかけてみた。すると、気怠げなランサーの返答が聞こえてくる。
『知ってるとは思ってたが、サーヴァントは召喚されたら召喚された時代の知識を与えられる。例えば、天を衝く灰色の塔が乱立してるって程度の事は元より知ってるからなぁ』
「超高層建築物（スカイスクレイパー）はこの街には無いっての」
しかし、そう考えると確かにランサーからしたらここら辺りの衝撃

は少ないものだろう。
　坂の上に構えられているのは、全てが屋敷と呼べる豪邸ばかり。私の家もそうだけれど、何と言うか慣習ばった物があって、坂を登るほど家が大きく豪華になっていく習慣が門架市には存在している。私の家は当然ながら、最も高い場所にあるわけだが、金持ちの家は無駄に大きい割には、無駄なものは何一つ置かないので、長く見ていられるほど面白い風景は存在しない。
　・・・まぁ、静かで長大だという事で、人払いさえ完璧ならば闘いの舞台に選ばれそうな雰囲気にあるという事は後で伝えておかなきゃ。
「ま、今は別の所行こうか。　お見通しだと思うけど、ここは見る所何も無いからね」
　そう促して移動した先は、昨日訪れたばかりの街。　流石に平日の昼だから人通りはそれなりだが、休日になるとそれなりにごった返すようなメインストリートだ。他の県の都市開発の煽りを受けて、急速に発展が進んだ街だから、門架市の人間は、ここを新都と呼んでる。
　横浜のランドマークタワーや、六本木ヒルズとは規模がぜんぜん違うけれど、それでもこの街にはタワーマンションなんかの高層ビルが並んでる。当然、駅もここに敷設されてるし、その周りには一際高いビルが勢揃いだ。
「ランサー、貴方が想像してたような場所って、こういう場所でしょ」
　そう問いかけてみると、ランサーは何処か浮足立つような口調でこう応えてきた。
『あぁ。　しっかし、昨日も見たには見たが、壮観だな。こんな場所が、オレの時代の遥か後に出来たと考えると、なんとも羨ましい話だ』
「そう言われると、貴方をこの街に喚(よ)んだ甲斐が有ったと思えるよ」
　でも、ランサーにはもう言う必要もないと思ったけれど、この街は一回面の皮を剥がしてしまえば、犯罪がカビのように湧き出る街だと言わざるをえない・・・まぁ、それを先導してるのが私の組なのはあんまり大きな声で言えないんだけど。
　要はここも暗がりを作ろうと思えば作れるって事。　こうやって

街の全体を見渡せば、隙が無いようで、簡単にサーヴァント同士の闘いを引き起こすことは出来る。良い街を引き当てられたものだ。
「それじゃぁランサー、登るよ」
『は？　登る・・・あぁ、彼処か』
宣告すると、ランサーは思い当たるフシが有ったみたいで、直ぐに納得してくれた。
その後、私達はこの街で一番高いビルの天井に登ってきた。新都と、その周辺を一瞥することが出来る素晴らしい場所で、弓兵（アーチャー）同士この取り合いになる可能性さえもあるような所。展望台って訳じゃないから、百メートル以上地面から離れてるのに手すりもないのは危ないし、事実立入禁止だけど、魔術師には鍵付きドアなんて大した意味を持たなくて、私は極々偶にここに足を運んでる。
街を高い場所から見渡したいという好奇心半分、管理者としての義務感半分で。今回は必要があってやって来たわけだけど。
『ここが、昨日アイツが居た場所か・・・』
と、私の仕事をランサーが代弁してくれた。
〝蛇〟と思しき男が、昨日私達を見下ろしていた場所。何か手がかりを残しては居ないかと思ってここにやって来てた。でも、徒労に終わりそう。
そもそも、こんな所で手がかりを残すような人間ならば、二年に渡って私達を苦しめるはずが無いんだ。これでも、私達は表裏共に街一番の組織力を持った団体なわけだから。さて、折角来たんだから、街を見渡しておいて、ランサーに解説しておこうかな。
「ランサー、あっち見て」
『――――お、おう』
いやに歯切れの悪いランサーだ。さては、高所からものを見るのは初めてかな？
それを無視して、私は新都の外側を指差す。そこは、１８０度対面するようにして二箇所を指差すと、ランサーも少し興味を持ったようだ。
片方は平野に、私達の家ほどじゃないけどそれなりに大きな屋敷や

寺が並ぶ場所。ビルの屋上からでも寂寥が漂うのが十二分に伝わってくる。
「あそこは、この街で一番寂しい場所。　ここを新都とするなら、あそこは『死都』だね」
　屋敷の多くは空き家か他の街に住んでる金持ちの別宅で、めったに人が入ってこない。そこにある寺でさえ、住職じゃなくて野良猫が定住するような廃れよう。
　門科市は一年を通して寒い。日本海側に属する以上、降雪量だって決して少なくないし、雪が積もらないときはそれほど強く北風が吹いてきていることを意味してる。
　都会から『リラックスしに』引っ越してくるような人間は、この街の冬の寒さと積もった雪に開かなくなるドアと使えなくなったインフラに絶望して去っていく。一種の試練だ。
　そうして居住区は自然と新都の周りを囲むようにして作られ、街外れに増えていった空き家や別荘用豪邸が集まる場所が『死都』だ。その名前に相応しく、私達は〝それ相応〟の使い方をさせてもらってる。
　そこまで説明すると、ランサーは苦笑いを飛ばしてきた。どうやら、理解してくれたようだ。
「で、あっちは・・・ま、教会だね。ま、大方の予想通り、ただの教会じゃないよ。あそこに監督役が居る」
　そっちは、私達の家があるほどじゃないけど程よい標高の高台の頂上にある教会がメインだ。というより、その高台の土地はほとんど教会の所有物。公園や墓地なんかが多く、家なんかは一個もない。
　監督役の顰めっ面が浮かぶような孤立主義の現れである。元々人気がない場所だった・・・のに、あの修道女崩れのおかげで訪れる人間が増えたのは皮肉なものだ。
『へぇ。　挨拶はしたのか？』
「やめてよ・・・そりゃいつかは行くけど、彼女には出来る限り空いたくないんだよね・・・」
『それ、一生行かなくなるパターンじゃないのか？』

私は口を噤む。図星にはこれが一番聞くのだ。うん。
そして、正面に臨む荒野に目を向ける。
そこで何か違和感を覚えた。本来ならば、街の外の海に沿って茫洋たる荒野が広がっているはずなんだ。何やら、私より数個前の世代で起きた大災害の名残が残ってるとかで、街の誰もが近づこうともしない、不気味な荒野。だけど、ここから見える範囲で、荒野には一個の建物が建っていた。
それは、一般人が見たとしても、それは単なる廃屋には見えないことだろう。そう片付けるには余りに巨大で、乱暴だった。恐らくは、一般人に対しては知覚不能な隠蔽が施されてるだろうからあんな雑な立地に建てられてる。
でも、魔術師、それも私みたいなサーヴァントのマスターが見たならば、余りにもあからさまに露骨に建てられた《拠点》だった。今見れば分かる。なぜさっきまでアレが視界の中に入っていなかったのかが謎だ。あれじゃぁ誘ってると思われても仕方ない・・・実際誘ってるのかも分からないけれど。一見ただの廃れた家か何かに見える。坂の上にはあのレベルの豪邸は乱立してるし、『ちょっと変わった場所に建てたんだなぁ』ぐらいにしか感じない。でも、アレが擁する魔力は明らかに異常だ。バビロンの空中庭園が地上に有ればあれ程の魔力を有するだろうというレベルの、最早暴力的と表現できる魔力。神秘的遺物（オーパーツ）の一種だろうけど・・・あんなものは今まで無かったし、今この状況においては、あんなものがある理由を二文字で説明できた。
『宝具、か・・・なんともぶっ飛んだ物を持った奴が居るな。　スズカは今の今まで気づいてなかったのか？』
「もしかして、さっき歯切れが悪かったのって・・・」
『アレの説明をすると思ってたからだ。驚いたぞ』
それは悪いことをした。でも、知覚不能がかなり高いレベルで組まれてるのはここから見てるだけでも分かる。
それが宝具であるという推測に関しては、私も実際同じ結論に至ってた。気が合うというかなんというか。
サーヴァントが7人も居れば、建築物の宝具を持ったサーヴァント

が居ても不思議じゃない。〝光（ブラン）〟の側はこの街に攻め込む侵略者のチームだから、拠点となる場所も必要になる。だから、狙って建築物の宝具を持ったサーヴァントを召喚した可能性だって十分に有り得る。

問題は、あの拠点・・・というより神殿がどの英霊が持ち得る宝具だったか。あの神殿（ほうぐ）が持ってる魔力を鑑みるに、相当に名の知れた英霊もしくは建築物なんだろうけど・・・。カーバ神殿のアブラハム、万神殿（パンテオン）のアウグストゥス、エジプトの建築王ラムセス二世など、可能性は無限にある。実際に詳細を知らないとどんな建築物かさえも分からない。

「ランサー、あれの詳細を見れる？」

『あぁ～・・・無理だな。見るからに神殿だが、装飾も余りないから、ヒントらしきものはオレにも見えない。スズカに見えてねぇのを言うならば、かなり年季の入った岩で作られてるな。神殿みてぇだが・城のようだと言われても、納得はできる』

「確かに」

頂に設えたドームや、外壁に整然と開けられた覗き穴。何より、一棟の神殿とは思えない広大さ。まるで城だ。城としての側面を持った神殿なのか・・・何はともあれ、ここで傍観してても何も進展しないし、あっちに気づかれる可能性もある。と言うか、私達がここに登った時点で気付かれたと考えたほうが良いかもしれない。早急に、ビルから降りる。でも、俯瞰だけで満足する気はない。

「ねぇ、ランサー。　初めての仕事を頼もうかな？」

『ほう？　初仕事が、本拠地突貫かい。決行はいつにする？』

まるで否定する様子を浮かべず、ランサーは霊体化を解いて私の前に出て、好戦的な戦士の顔を浮かべた。階段を降りる真っ最中だったから、共に真っ直ぐ立っている私とランサーが同じ高さで目線が合う。それがなんだかとても心地よかった。それに、物分りの良い私のサーヴァントにも。

「当然、今夜！　私も同行するよ！」

そう私は宣告した。私自身の目で、肌で感じたかったから。ラン

サーに否定されても構わなかったけど、出来ればこの要求は通したかった。令呪を翳(かざ)さず、この判断の全てをランサーに一任する。

でも、杞憂だと思い知った。

「了解だ！　足を引っ張んじゃねぇぞ？スズカ！」

「あったりまえじゃん！」

そんな、一歩間違えれば即敗退するような要求を鵜呑みにしたランサーは、呑気にもこっちに手の平を向けた。それがハイタッチの合図だと気づくまでは数秒かかったけれど、気づいた後に響く乾いた音は気分が良かった。

そうして巡り合う

「今更だが、本当に行くんだな？」

神殿を見据える荒野と街の境界線に立っている私に、姿を表しているランサーが言った。

正直、ライダースジャケット着てる私の姿は想像したくないけど、バイクを乗りこなす時にはこれが結局安定してしまうのだ。

とまぁ、そんな事は置いておいて、私達はこれから件の神殿に向かう。当然中に入り込んで詳しく調べる気なんて更々なくて、ただ単に近くから見たいだけ。危険は伴うけれども、いきなり私達を全力を以て討ち倒すようなことはしない・・・と信じてる。迂闊かも知れないけどね、そもそもランサーは不死だし。あの後ランサーから宝具の詳細を聞いたけれど、自分以上の神性を持たない相手・・・つまり、Ａランク以上の神性を持っていたとしても、最大で５割までしかダメージが通らないんだとか。薪を壊されるか燃やされた時は、数分しか命が持たないらしいけれど、それを考えても恐ろしい宝具。

要は何が言いたいかと言うと、多少のリスクを背負っても問題なし。ランサーが私を守れない程無力なはずもないし、少しばかりは強気に行かなきゃ。

「そりゃ行くよ。　唯でさえこっちはむっちゃくちゃ不利なんだからさ」

「〝闇〟が、か。　そうだな、スズカはそれを憂慮していると見えるな」

「当然だって、そりゃぁ・・・」

・・・って、話をつなげかけたけど、さっきまでさんざ議論した後だから止めた。余りに白熱したから、組員が何回か見に来たぐらいだ。霊体化してたからランサーは見えなかったみたいだけど、うっかり私が声を荒げた時が最悪で、暫く監視されたぐらいだもん。

ともかく、私はアクセルに手をかける。硬い感触が手袋越しに伝わってくるのを思って、思いっきりアクセルを捻った。公道ではないから、最高時速お構いなし。体感だけど、１２０ｋｍ／ｈは出てるん

じゃなかろうか。それに平然と付いてきてるランサーに目配せすると、ランサーは微笑んで返してくる。『もっと速くて大丈夫だぞ』と言わんばかりの、自信に満ちた笑みだ。それを見てなんだか安心した。

そんなやり取りをしながら走ってると、地面になにか大きめのものが転がっているのが確認できた。別に放置しても良かったんだけれど、ここは敵地。何が有るかわからないから確認しておくことも重要だと感じて、急いで止まる。立ちゴケしないように、それでも迅速に止まるために、バイクを進行方向と垂直にした瞬間にブレーキをかける。急激に止まったことで、慣性が働いて体が吹き飛びそうになるのを必死に堪えた。バイクのタイヤから、ゴムが摩擦熱で燃えたのか煙が立っている。不快な匂いに鼻を押さえて、私は地面を確認する。

そうすると、ランサーが醜悪な物を見かけたように顔を歪めてた。

それもそうか・・・そこに――――いや、そこらへんに落ちていたのは、生物の欠片だった。それも、小動物とか犬・・・最悪、人間とかでも、私は驚かなかったかも知れない。

落っこちてたのは、未知の生物の欠片だった。超自然的、まるでRPGに出てくる触手の生物。まるで豆腐でも地面に叩きつけたように粉砕されてるのに、蛸に似た触腕が痙攣を止めない。生命活動を止めてるのに、怨霊（ゾンビ）のように獲物を求めて彷徨ってるかも知れない。

「なんだ、こりゃぁ・・・」と、神話の中であんな魔獣を倒したランサーでさえも、疑いの中で眉をしかめずに居られなかったんだけれど。実は、これの詳細に私は覚えが有った。

第四次聖杯戦争の中で、海魔と呼ばれる生物が暗躍したという。それは、蛸とヒトデが混じったような触手生物。邪神（クトゥルー）の落とし子とも呼べるそれは、挙げ句体長数十メートルまで肥大したモノが召喚されて、大暴れしたらしい。私は直接見たことは無かったけれども、話には聞いてる。これは、それに酷似してるような気がする。深紫の体躯、蛸に似た触手、ここまで徹底的に潰されておきながらもなお足掻きを止めないしぶとさ。

「う～ん、っとなると、これは魔術師（キャスター）の仕業かなぁ・・・前回召喚されたサーヴァントがもう一回召喚されないとも限らないし・・・。第四

次の魔術師(キャスター)は確か・・・」
・・・う～ん、思い出せない。
ま、後でもう一回聞けばいっか。そんな風に軽く考えて後にした。
でも、この生物、見れば見るほど恐怖を煽るようには思えない。厄介そうだなぁと感じては居るけれど・・・。でも、ランサーの顔を見ると、少しだけ恐怖が混じってるように見えなくもない。ここは思い切って聞いてみよう。
「ねぇ、ランサー。なんでこれが怖く感じるの？」
「ん～、蛸みたいに見えるからだろうなぁ。　オレは蛸は良く食べたから、余り怖いとは感じねぇが、他の国だったら、そりゃぁもう恐ろしく感じるんじゃねぇか？未知への恐怖ってやつだろ」
「あぁ、なるほどね」
そこまで聞いて、ある話を思い出した。どうやら、日本人は、蛸などを始めとした海の生物を『食物』として見るからクトゥルフなんかに恐怖を感じないとか。逆に、欧米人は蛸はあんまり食さないから怖いんだとか。悪魔の魚(デビルフィッシュ)なんて言うぐらいだし。
「それじゃ、ランサーは怖くないんだ」
「少しだけだな。　実際、無視できるぐらいだ」
「そっかぁ。　でも、なんでこんな所に――」
そんな気楽なセリフに相槌を打ちながら疑問を呈していたら、奇妙な音が鼓膜を震わせた。
私達が出した音でもなければ、海魔が蘇った音でもなく。それは、遠方から聞こえた剣戟だった。
鉄と鉄がぶつかり合う、ともすれば心地よく感じてしまうぐらい透き通った音。でも、その実決して笑っていられるようなモノじゃないのは私達は知っていた。
その音は、私達の前方から聞こえてきてる。もしかしたら、その音の主は、この海魔をここまで粉々に砕いた者なのかも。それならば話は早い！　敵ならば倒し、味方ならば加勢するのみの話。そこまでを数瞬で結論づけた私達は、互いに話を合わせるどころか目配せさえもせず、無言で音の方向に加速を始めた。

「ランサー、戦える!?」
「愚問だ！　こんな所に来てる時点で、戦いの準備はとうに終わっていたさ！」
なんて心強い仲間（サーヴァント）だろう。まぁ、そんな事を言っていると、1分も経たずに音の中心。つまり戦地が見えてきた。それを見て、私の第一印象はこれだった。
――あぁ、なんて美しいんだろう。
そこには、三人の戦士が居た。三つ巴の闘いだったと思ったけれどそれは違うと思い知った。これは、二陣営の闘いだ。1対2なんて状況、当然2体の方が勝つし事実そうだった。1体の方は2人の猛攻に押され続け、相手に剣を返す暇もなかっただろう。
一人は、凄まじい威光を纏った女性だった。ここに来る前は、きっと女王でもしていたんだろう。そんな確信、理解を排斥出来ない。目を離すことさえ不可能な聖性（カリスマ）を有した女性。紛れもなくサーヴァント、紛れもなく人外。そんな者を、容易くまで叩きのめしているのは、一対――とまで表現できる二人。
比翼にして連理だろう。それは男女だった。男は己の拳足のみを武器にして、少女は釘のように細い剣を扱っていた。それだけなら良いけれど、問題はその洗練された動き。互いの動きを数手先まで当然のように知り尽くし、その上で最適解を求めるような動き。自分の手足がこれからどう動くのかを知っているように、男女はその連携のもとに動き、サーヴァントを追い詰めていた。きっと、そんな連携ができるのは百年来の盟約で結ばれた親友同士なんだろうなと思って二人に着目してみたら。嗚呼、現実はそう上手く立ち行くはずもない。現実よりも現実感がなく、しかし紛れもない現実なのだけれど。
その二人は、口喧嘩を絶やさずに居た。息つく暇もなく矢継ぎ早に、まるで自分達が殴っている敵がついでのおまけで、目もくれるはずもねぇと宣うような、教科書に載れるような無関心。
「邪魔をするな！　こいつは俺の敵だ！お前には関係ないだろう！」
男が殴りながらも、言葉の弾を最高（しょう）の相棒（じょ）に当てる。黒を基調とした、というか黒一色とまで言える格好は、殺し屋のコーディネートだ。

彼が着けている手袋と靴は、非常に高い練度で作られた魔術礼装なのだろう。サーヴァントは彼の攻撃に顔を顰めて防御するしか無い。およそ人間が生きる年月には不可能とさえ言えるレベルに研ぎ上げられた拳法には、称賛の声しか上げることしか出来ない。

「いいえ！　この者は裁定者（ルーラー）たる私に手を上げたのです！必要最低限の応戦は必要不可欠、私の威信に関わります！」

少女が切りつけながらも、絶好（おとこ）の們に応じる。　豪奢なドレス、戦闘経験なんて絶無だろうと思える可憐な少女だけれど、その実剣術は華麗なもので、男の攻撃に対する防御の隙を突く見事な剣技。剣に籠められた魔力は、到底私には作れない、どころか見たことさえもなく。細身の剣には不釣り合いな、重量さえ感じさせる魔力を持っていた。

「あのなぁ、支配者（ルーラー）だかなんだか知らないが、お前が手を出すな！」

「なっ！　貴方こそ何故私の戦いに手を出すのです！　これは人間には速すぎる舞台です！早急に撤退の選択をなさってください！」

「はっ！　人間には速すぎるだと!?事実、俺は手を出せてるだろう！お前の邪魔さえなければもっと力を出し切れるんだ！解ってるだろうからさっさと下がれ！」

「何を勘違いなさっているのですか!?　〝光〟のライダーは私の攻撃に対して防御していて、貴方への注意が薄れている間に攻撃しているに過ぎません！言うなれば私のおこぼれを拾っている形！しかし、私は人間に対して危害を加えないよう、最大限気を配ってやっているのですよ!?　貴方こそ下がった方が良いのでは!?」

・・・お互いの話は平行線。　一触即発の相手だったのだろうか、それでも奇妙なことに、戦いにおいては唯一無二の戦友であるかのように連携をとって戦えているのが不思議でならないんだけど。何者なのアイツ等。

終いには、男がサーヴァント――――ライダーの腕に手を掛けて、片手で山嵐を行うようにライダーを投げた所を、少女の剣が斬りつけるというという高等テクを披露。これにはライダーも、ただ単に投げられて血を吐くしか無かったようで、膝立ちになって苦しむしか無かった。

でも、そんなサーヴァントにはもう用は無いようで、こんなにも完璧な合体技を成功させた片棒（パートナー）を互いに指さして、こんなセリフで彼らは闘いを締めていた。
「なんなんだお前は！」
「なんなんですか貴方は！」
――事実は小説よりも奇なり、という言葉があるように。確かに今直面していた事実は、どんな小説よりも遥かに『奇』だった。
それでも、その『奇』とは奇天烈の『奇』ではなく、数奇の『奇』でもなく。
奇禍の『奇』であった事は言うまでもなかった。確かに、魔術師になってる時点で平穏な生活なんて捨ててた。聖杯大戦に乗り込んだ時点で覚悟もしてた。
でも、アレばかりは・・・受け入れられるはずもなくて。
嗚呼、あのライダーを打ち倒していた男女。　あれは、二人のサーヴァントではなく。
一人のマスターと一人のサーヴァント。
しかも、あのマスターは。　あの兇暴な四肢を操ってサーヴァントを殴り倒していた、恐ろしきマスターは、確かにビルの上から見下ろしていた顔と同じ顔で。　しかも、そいつは――――。
事実は、確かに奇禍で奇怪なものだった。じゃぁ、ここから小説の話を始めよっか。
言うまでもなく、この物語は、人間が願いを叶える物語だ。
でも、聖杯を用いた訳ではない。いいや、もしかすると人が願いを叶える物語なんて言い方も語弊が有ったかも。確かに敗者は多く居た。グッドエンドでなければ、バッドエンドでもないだろう。
真実（トゥルー）を掴（エ）んだ終（ン）わり方（ド）、って言い方が一番近いかも知れないけど。・・・コホン、じゃぁ仕切り直そっか。
これは、或る一人の少年が、願いを叶えるでなく、願いを諦めた物語だった。当然、ただ単に挫折しただけなら、こんな風に語りを始めたりしない。
願いを諦めた上で、遥か遠くの記憶に置き去りにしてきた、一つの

純真無垢な物を救い出す物語。その様は油で一杯だったグラスに、清らかな水を入れるよう。その過程で私なんかも巻き込まれて、聖杯大戦は進んでいった。そして、確かに少年は答えを見つけて、勝利は掴んでいたんだろう。

それじゃぁ、《事実(しょうせつ)》を始めよう。

第一章『Ｂｒｏｋｅｎ　ｊｕｓｔｉｃｅ　ａｗａｋｅｎ』

少年の目覚め

俺は蒼い地獄に居た。そこでは、誰もが紛れもなく敗者だった。

生者は居らず、死者さえ灼かれ、そこに残っているのは灰燼だけ。立っていられたのは俺だけで、まるで案山子のように、青の炎に満ちた地平線までのすべての景色を眺めていることしか出来なかった。

そんな、絶望がこの世に降ってきたような見渡す世界の中でも、立ち尽くしていることだけは出来なくて、他の生存者が居なかったかひた走った。

手足はロボットのように思考から離れて動き、網膜が焼けた眼は残った視点で精一杯生存者を、焼け焦げていない肌の色を探した。

そうして、途方のない時間が経った。ついに肌の色を見つけた。俺は頬の肉が切れるんじゃないかと疑ってしまうほどに唇を釣り上げて笑いながら、その生存者の元に駆け寄った。信じていた甲斐が有ったと思いながら、その人を見た。そうすると、信じていた甲斐とやらが、一瞬で吹き飛んでしまっていた。

無事だったのは、胴体と腕の一本だけだ。まぶたを閉じ、静かに死を受け入れるような、聖母のような表情を浮かべて、その人は瀕死の状態に陥っていた。死んでいたなら、まだ受け入れられたろう。ましてや、その手練手管を知り合った人間で無かったなら、この絶望を飲み込めたかも知れないのに。或いは、最初から絶望なんて無かったかも知れないのに。

視界が歪んだと思った。それは自分の涙だなんて思えなかった。

喉が痛かった。泣き叫んでいたのは自分の喉だなんて信じたくなかった。

全部全部、揺らめく炎のせいにしてしまえればどれだけ楽だったか。

視界の端に誰かが映った気がした。・・・まるで、これが約束され

た結末。希望(デッド)のない終わり(エンド)であって、それを垣間見てしまった。そんな物寂しげな光の眼差しでこっちを見ていた。

止めてくれ、そんな目で見るな。そうすれば自分を許せなくなる。

――ごめんね。

止めてくれ、そんな声を聞かせるな。そうなれば憎しみを抱いてしまう。

ああ、誰か俺を救ってくれ・・・!! この希望のない地獄から、誰か――!!!

ドシン。自分の体を強かに打ち付ける痛みと音で目を覚ます。

「・・・はぁ、またこの夢か」

ベッドから落ちたのを、状況証拠から導き出して、毛布を寝台の上に置き直す。その時に、寝台と毛布にしっかりと染み込んだ寝汗の量を見て、『あぁ、やってしまった』なんて朝っぱらから多少なりとも悲観的な表情を湧き出させてしまう。

最近、なぜか夢見が悪い。 この夢ばかり見てしまう。夢・・・というよりは、悪夢だ。夢は記憶の整理だなんて話をよく聞くが、態々一番キッツイ記憶だけを再生させてくれる意味を誰か教えて欲しい。これじゃぁ整理なんて生易しいものでは決して無いんだが。

時計を見ようとしたけれど、太陽よりも早く起きてしまったから全然見ることが出来ない。仕方なく、照明を点けると、まだ6時にすらなってない。悪夢を見た日は、早く起きるからか途轍もなく疲れているのに、眠気は全く起こらないから困る。仕方ないから台所に行って朝食並びに昼食の準備を始めてしまおう。

とは言え、朝は食パンと焼いたベーコンと多少の野菜で済ませてしまえば十分だし。弁当の材料は昨日の内に大半を作り終わっていたから、箱に詰め直すだけの作業で終わらせてしまう。結局、大した暇潰しにもならないで、6時半には朝食と昼食の準備が終了してしまっていた。・・・無趣味な自分をこれほど呪うことはない。家に居てやることもないから、さっさと学校に行ってしまおう。そう思って、学校鞄を手にとって玄関から出ていってしまう。

玄関を出ても、歩く人間は一人も居ない。これは何も時間帯に限った話じゃないというのは悲しい話だ。
俺の屋敷があるのは、街の人間には死都なんて呼ばれてる寂れた路地だ。屋敷に訪れる人間は広告をポストに入れる郵便屋ぐらいしか居ないのだ。
ここらあたりの区画には、常に人が住んでいる家なんて数個もない。広い屋敷が並んでるだけに勿体無い気もするし、道路を歩いていてもタイヤの音一つしないのも違和感があるというものだ。
つい物静かだと、やることもなく思案に暮れてしまう。
俺――橙乃匡生は五年ほど前に門科市に越してきた高校二年の男子だ。一般的に言えば、家族とともに暮らしている年代なんだろうが、俺にそういう存在は居ない。
何故かと言われれば・・・多少暗い話になるかもだけど、五年前に居なくなったからだ。なんとも歯切れが悪い言い方になるのは、死んでいてほしくないなんて、『死体が見つかってない』しか根拠のない淡い願いを持っているからに過ぎない。きっと死んだんだろう。
門科市に引っ越してきた理由も、父の遺言だ。屋敷があるから、もし自分になにかあったらそこに引っ越すと良い。そんな言葉に従った訳だけど、こんな黙りこくった場所だと思わなかったわけで。
まぁ、物が少ない分悩みが少ないのはこの場所の少ない利得の内一つだったんだが・・・。
「ッ・・・!!」
キーーン・・・突然ジェット機が通り過ぎたかのような耳鳴りと共に、世界が暗転する。俺は思わず歩みを止めるが、それは一瞬の出来事で、すぐに景色は元に戻る。
最近、こういう事が多い。自分が感じていた世界が、急変し、それを確かめようとしたら元通り。もう数カ月は経つだろうか、こんな事が数百回と有った。自分の体の異常かと思って、病院に行ったこともあるが、結局異状なしで突っ返されたのも一度じゃない。それと、その暗転の中心は決まって・・・。
「今日も、十字架か・・・。　俺自身は無宗教のハズなんだがなぁ・・・

？」
無宗教と言っても、最後の審判を頭ごなしに否定するわけでもない。ただ、特定の宗教に肩入れすることは無いという事。閻魔の裁判に掛けられるのかも知れないし、アヌビスの天秤に心臓を乗せられるのかも分からない。
否定しない代わりに、信じない。そういうスタンスで生きてきたはずなんだが。どうもここの所、この幻視とも呼べるコレのおかげで十字架をよく見かけるようになってしまっている。正直、慣れてきてしまった感はあるが、取り除かれるに越したことはない。今の俺の数少ない悩みの内一つでもある。
「・・・ジャンヌ・ダルクは、天使を幻視していたと言うが・・・」
もしや、俺も？　と思った所で、思考を無理矢理断ち切った。疲れ過ぎて、他愛もない妄想に囚われるようになるのが一番怖い。矢張りこの幻覚は毒だ。早いところ取り除いた方が俺のためだ。
そんな風に感じてると、学校に到着してしまった。思考を幻覚に関することに割いていた分、歩いてる実感が無かったんだろう。
悪夢を見た日は、こうして自然と学校に来る時刻が早くなってしまう。職員も含めた学校に所属している誰よりも早く到着してしまうこともまぁまぁ有ることだから、いつしか本を学校に持っていく事が必須になっていた。今日の読書はエドガー・アラン・ポーの『黒猫』。ここの所、ライトなノベルばかり手にとっていたから、リハビリ代わりに選んだ本だった。
「さぁって、今日はっと・・・」
と、学校の扉に手をかけると、鍵はかかってなかった。今日の職員は、早く来てくれていたようで凄く嬉しい。そして、玄関で靴を履き替えてると、ふと人影が有るのが目に入った。そこに目を向けると、案の定居たのは、この学校の生徒会長だった。
「よう、斎木（さいき）。　今日も今日とて、全校生徒の為に無償労働してるのか？」
そんな風に声を掛けると、斎木は不機嫌そうな顔でこちらを見てきた。恐らく、早起きしたからじゃなくって、俺に不本意なことを言わ

れたからだろう。
「無償労働ではない、生徒会長としての当然の義務と言ってほしいな。匡生君。　そういう君は、また読書をしに早起きしたのか？」
　眼鏡が良く似合う美少年の瞳が、俺と視線を合わせる。　女だけでなく男も惚れるような美貌を持っていて、事実バレンタインは生徒会室がチョコ倉庫になったという。如何に貞淑な人間だろうと、彼の顔を見れば頬を染めねばならない。そんな男が、俺とは友人・・・というより、良く生徒会の仕事を手伝うビジネスパートナーである。ま、それぐらいの距離感のほうが丁度いいしな。
「好きで早起きしてるんじゃないのは補足しておく。最近不眠症気味なんだ。　それで？今日は手伝うことが有るんだろ？」
「あぁ。　運動部が注文した器具が昨日の夜に大量に届いたらしくてね。そういうのは、君の専売特許だろ？」
　人より体が強いのは自負してるが、斎木は俺の事を肉体労働要員だと思っている気がする。勘違いしてほしくないんだが、別に俺は脳筋と言う訳ではなく頭脳労働もそれなりにこなせる。・・・まぁ、頭なら生徒会長だけで事足りるから俺を求めないわけだがな。
　それに、こういう仕事は上手い鍛錬になる。　生徒会長に恩を売れて、体も鍛えられるんなら、別に断る理由もない。
「よし分かった。　今すぐ行くか？」
「少々長くなる。　先に荷物だけ置いてこい。集合は校門前だぞ」
　と、生徒会長が忠告してくれた。　そこに俺は頷きだけで応じ、生徒会長と一度別れる。
「靴は・・・下駄箱に入れなくたって良いだろ。　ハァ、今日は『黒猫』読もうと思ってたんだがな・・・。ま、折角持ってきたんだし、歩きながら読むか。どうせ誰にもぶつからん」
　そんな事を口遊みながら、階段を登っていく。
　あぁ、静かな廊下は良い。普段が騒がしいからか、その差異は新たな印象を与えてくれる。たった数十秒の短い時間だが、本を読むのにこれほど集中出来る環境というのはそれほど――。
　ダッダッダッ・・・。

・・・誰だろうか。　別に急ぐ必要もない時間帯だと言うのに、全く風情のない人間が廊下を超スピードで走っているのが聞こえる。運動部が朝練でもしてるんだろうか。それならば、脳まで筋肉という誹りを受けても仕方あるまい。

まぁ良い。教室に着いたし、さっさと荷物を置いて、斎木に合流してしまおう。そうすれば、この不快な気分ともおさらば・・・ん。

この時間帯、誰にもぶつからないと思っていたが、俺の胸に顔を埋めるようにしてぶつかってきた者が居た。教室から急いで出ようとしてぶつかったって所か・・・まぁ、こんな時間に来るような奴は一人しか居ないわけで。

「・・・今朝も息災みたいだな、真流」

多少呆れながら、答えてやる。　今、胸に埋まるようにしてぶつかってきたのは、真流　涼。中々良い所の娘らしいが、それを鼻にかけることもなく、本人のスペックも高い。　ラブコメから抜け出てきたような非の打ち所もない少女。　そして、その少女は・・・

「えっ？　・・・うわっ」

この第一声から十分すぎるほど分かるだろう。俺を嫌っている。

「橙乃・・・なんで・・・」

「なんでとは失敬な。お前と偶々同じタイミングで登校してきただけだ。なんでお前に糾弾されなきゃならないんだ。」

もう、こんなやり取りをするような女が俺の事を良く思っているはずもない。

それは絶対のことであり、もう確定事項。日が西から登らないのと同じように、此奴は俺の事を良く思っていないのだ。

とはいえ、此奴の能力は認められる。この学校でも指折りのスペックであり、コミュニケーション能力も低くはないから、それなりに友人関係もあるようだ。俺とは違ってな。俺の周りは俺に取り入ろうとする奴が多すぎてな・・・若干嫌になる。

まぁ、この教室そのものに用は無いから、さっさと荷物をおいて出て行きたいところなんだが・・・どうも真流が進路を妨害している。適当に何かを話してるみたいだが、正直頭の中に入ってこない。だか

ら、適当に受け流して、さっさと話が終わらないかと願った。
「わ、私はもう行くわよ。　貴方と一緒に居たくないもの」
願いは叶いたり。　信じるものは救われるとはよく言ったものだ。
ああ、適当に送り出してしまいたいところだったが・・・妙なものを発見してしまった。
――刺青？　真流は、刺青なんて入れるような奴じゃ無いんだがなぁ・・・。
だが、右手には確かに赤い傷跡が見えた。　右手の三本の傷は、精緻に入れ込まれた物のように思えて、一種の紋様のように感じ取れる。刺青と表現したほうがそれっぽいだろう。気の所為だと信じたいが・・・。
「そうか。　一つ聞きたいことがあるんだが？　真流」
早足で行こうとする真流を呼び止める。　当然、厭そうな顔をして、こちらを振り向く真流。なんでここまで嫌われてるんだか・・・。
そこまで嫌な顔をされると、正直あの傷の事を『それ、刺青か？』なんて聞けもしない。聞き方の問題もあるかもだが、そもそも上手い聞き出し方が思いつかない。
・・・う～ん、これは、今の所は諦めるしか無いか。
「最近この街がおかしい気がするんだが、心当たりは有るか？　真流」
この質問の意図は、正直俺の脈絡もない思考からだ。
あんな悪夢・幻視は、この街の異変が起きてるせいだ。なんて、理由もなく決めつけようとしている。
どうせこんな質問をしたって、否定されるに決まってる。
「さぁ、どういう風に異変があるのか言ってくれないと、私にも分からないよ」
・・・否定してこなかったな。
とは言え、説明できるようなことではない。『最近悪夢を見る』『最近幻覚を見る』・・・うん、やっぱり言えないな。上手く誤魔化すしかないか。
「・・・そうだな。言葉で表現できないような事だ。お前が分かんないって言うなら、多分感じていないんだろう。なら良い」

「じゃぁ、私もう行くわね。　麻加部くんを待たせてるものだから」
　良かった。　上手く離れていってくれるらしい。真流も、上辺だけかもしれないが笑ってくれているから、致命的なほど悪い印象は与えなかったのかも知れない。
　じゃぁ、さっさと送り出して、俺も斎木の所に向かうとしよう。
「ああ、真流。　手は大事にしろよ」
　と、俺はこの発言が地雷だなんて思っても居なかった。だが、結果として、真流は心の底から、マムシか何かに出会ったように目を見開いて、驚いたようだ。
「え!?」
　単なる直感だが、この驚き方は、疚(やま)しい物を見られた驚きのような気がした。
　刺青のはずがない。だが、ここまで大きく驚かれると――――。
「わ、解ってるよ！　じゃぁ、また後で！」
「待て真流！　止まれ！」
　だが、走っていく真流を引き止めることが叶うはずもなく、俺は真流の右手に刻まれた紅い傷跡の事で悶々とするしか無かった。
「アイツ、本当に刺青を・・・？」
　そう呟くのが精一杯の、自分の不可解な気持ちへの抵抗だった。

好みの女性

「・・・って事があったんだ」
「そりゃぁ災難だったなぁ」
昼休みになり、俺は生徒会室に来て昼食を摂っていた。
なんでかと問われると、湯沸(ポット)かし器やら他種類のティーバッグやらが置いてあって、何かと具合が良いからだ。偶に茶菓子なんかも置いてあって、そういう日はありがたく頂戴してる。
大抵の日は斎木が仕事をしてるので、会話相手にも困らない。まぁ、おかげで他の生徒会のメンツとも知り合いになってしまったが、殆どが普通の良識人なので、コミュニティを築いておいて悪い事はない。
その代わりと言ってはなんだが、よく仕事を押し付けられるのはしょうがないことである。
「というか、ちゃんと聞いてるのかお前は。　今日の朝に、こんなにも不可解なことがあったというのに、まるで聞いてる風を示さないじゃねぇか」
「興味ないんだ君の話は。　仕事さえしてくれれば、ちゃんと話は聞いてやる」
斎木が、眼鏡を指で押し上げながら答える。　多少苛ついてそうだ。
とは言え、こっちもそれで止まるような男じゃない。今朝の理不尽を共有しなきゃこの腹は収まらん。
「仕事はしてるわ。　そろそろ大庭(おおば)書記には集中力を付けてもらわなきゃ困るな。誤字脱字がこんなにあったぞ」
俺はそう言って、生徒会新聞の初稿を突き返す。赤ペンで印をつけられた文章の(俺の)チェック(仕事)の跡を見て、斎木は笑顔を浮かべる。
「ああ、それでこそ橙乃だ。　今度大庭にはちょっとキツめに注意しておこう。　で、確かに、話を聞く限り確かに今朝の真流は異変があると言えよう」
「ちゃんと聞いてるなら最初からそう言えよ・・・」

どうしても、斎木から課された仕事が残っていたらこういう事が多い。
静かな怒りというのだろうか、一回仕事を持って帰ってしまった時は、冗談の一つも言えなくなるほど威圧を飛ばしてくるのだから嫌になる。
しかし、晴れて仕事は完了したので、早速機嫌が良くなった斎木に鬱憤をぶつけることにする。
「で、手の甲の傷跡が――」
「刺青だったんだろう？」
即答する斎木。　とんでもなく見当違いだ。
「それが有り得ねぇから鬱憤が溜まってんだ！　本当にさっきの話聞いてたのか！」
「聞いていたよ失敬な。　刺青じゃなかったら偶然か見間違いだ。・・・まぁ、君がそんな見間違いに囚われるような男じゃないと思ってるから、刺青だという主張をしてるんだ」
いきなり俺を持ち上げてもらっても困る。というか、マルチに活躍する斎木にそんな事言われても皮肉と思えてしまうのは当然の帰結だ。
だが、それはそうとしても、アレを見間違いだと思いたくない。血が滲んだように赤く見えたあの傷跡・・・それも、かなり正確に、意味のある紋様に見えたのは、気の所為ではないと思う。
「だが、真流が刺青をするとは思えないんだ。　だから、なんとかして手をじっくり見ようとしたんだが・・・」
俺の席は、真流より左側に位置するから、右手の甲は何か特別な事が起きない限り俺には見えない。しかし授業中に、姿を少しでも捉えようとして顔をそっちの方に向けていたら、教師から注意を受けてしまった。正直、それに付いてきたオマケの応用問題はどうとでもなったが、俺と真流は色んな意味で噂の絶えない二人なのが悪かった。
――まさか、橙乃君は真流さんのことを・・・？
そんな思考が教室中に蔓延した頃には、もう詰みだった。
休み時間は、男女問わず俺の周りに人間が集まり、心情を聞き出そ

うとしてくる。
俺にはそんな気はないと弁明しても、真流に恋慕してる男やら真実を見抜いた気の女子が離れてくれるはずもなく、結局休み時間にも真流を捕らえることは出来なかった。
そんな中、昼休みの少ないチャンスを生かして生徒会長に話を聞き出しに来たんだが・・・。
「お前がそんな事しか言えないんならお手上げだなぁ・・・」
「いやぁ、その噂は僕にも届いているよ。　聞いたときには、橙乃にもついに春が来たかと思ったんだが・・・」
「冗談でもやめてくれ。俺にはそんな気はないし、真流のほうはそれどころか俺のこと毛嫌いしてるはずだ。今回のことだけじゃない。例えば数月前のことだがな
アイツが学校に忘れていった体操服を、仕方がないから洗って返してやったことがあるんだ。すると、アイツこれ以上無い程に嫌そうな顔しやがって！」
「いや、それは君が悪いよ」
と、試しに愚痴を零してはみるが、斎木は全く眉を動かさない。俺のしている話に全く興味ない風を貫いている。挙げ句
「なぁんだ、じゃぁ嘘だったわけだね。残念」
なんて言う始末。
残念なんていうが、俺からすればたまったものじゃない。犬猿の仲の相手と色恋沙汰の噂が立たれてるんだ、事実無根にも程がある。
正直、アイツと馴れ合ってる自分の姿なんて想像さえ出来ない。条件的には申し分ないんだが、アイツの方が俺に近づいてくるはずがない。うん、やはりナシだ。
「はぁ、真流が俺の事を好意的にさえ思っていれば、幾らでもアプローチを掛けるというのに・・・」
そんな事をつい零すと、斎木が邪な笑顔を浮かべてこっちを見てくる。眼鏡の奥に、まるで紫石のように静かに輝いて、獲物を見つけたような表情だ。
「へぇ。やっぱり、気はあるわけか」

「だから、無いって言ったら無い。　お前もクラスメイトの奴らと同じようなこと言うんだな」
　こういうのを何ていうんだったっけか？　下衆の勘繰り？
　いや、そもそも斎木は下衆じゃない。　それは保証どころか賭けられる。
　そんな思考を頭の中で駆け巡らせていると、斎木が漆塗りの弁当箱の中身を平らげながら囀る。
「当然だ。橙乃匡生と言えば、何をやらせても超一流。そりゃぁ、多少荒いのは問題だが、そこにさえ目を瞑れば、日本にも指折りの傑物だろう。片や真流涼も、あれだけ美しければ、やっかみから醜聞の一つも出そうなものだが、それが全く無いことから有能さを証明されてる。
　二人共、学校は勿論の事、学外にさえファンクラブがあると来た。そんな二人が、くっつく可能性があるという噂が立てば、誰であろうと耳をそばだてずに居られないんだ。僕も例外ではなく、ね」
「短くまとめろ。それとそんな事言うな、むず痒い。後、もう俺を持ち上げることに関しちゃ何も言わんが、俺の弁当箱から食い物を取るんじゃねぇ。　お前、ボンボンの癖に市民から搾取するな」
　隙を突いたとでも思ったのか、俺の弁当箱に手を出してる斎木を注意する。だが、斎木は止まることもなく、寧ろ言い訳がましくこんな事を俺に言い聞かせてきた。
「良いじゃないか。　僕の家の家政婦より美味しく料理を作れる人間なんて珍しいんだ。からあげ一個ぐらい許してくれよ」
　そう言って、箸でつままれた俺の唐揚げを名残惜しく見つめながら、斎木は口の中に放り込む。それなりに自信作だったから、美味そうに食べてくれて悪い気はしないが、泥棒は泥棒だ。つまり有罪（ギルティ）。
　って事で、俺は棚に入れてある紅茶のティーバッグを取り、もう一杯の紅茶を作る事にした。一応斎木の表情を伺うが、笑顔を崩さぬままなので許可してるという事だろう。気にせずティーカップに新たな紅茶を注ぐ。
「そういえば、長い付き合いになるけれど、聞いてなかったな。

まぁ、君はこんな低俗な話を余り好まないと思った故だけれどもね」
「は？　一体何だってんだ」
熱々の紅茶を啜る俺に、笑いを崩さずにこう問いてきた。
「なぁに。『好みの女性のタイプは？』って奴だよ。雑談の一環だと思って聞き流してくれても構わないけれど」
なるほど、そりゃ聞きにくいわけだ。
この機会だから、って事もあるだろう。俺は自負出来るが、浮いた噂なんて一個も立った覚えがない。それが、まるで湧いて出てきたようにこの話が飛び出てきたわけだからな。斎木の言では、コイツも興味が無いわけではないだろうし。仕事人間の斎木でも珍しく聞く気になったわけか。
「別に教えてやっても良い。だが、物を聞く時は自分から、だろ？」
まぁ、雑談の一環だと言うなら、話を広げてやるもの一興だろう。それに、人気者でありながら浮いた噂が全く無いのは斎木だって同じだ。見目麗しく、生徒会長であり、成績はこの上ないほど優秀。
俺・真流・斎木、それと、名前は覚えていないが一年の女子も含めて、俺らのことは崇敬と畏怖を込めて『奇跡の二年』『霞ヶ原の四天王』だなんてまことしやかに囁かれてるそうな。自分で聞く分には恥ずかしくてたまらんが、それだけ別次元の人間が居るということ。
それで、ここに別次元がもう一人いるということ。聞かずにどうしろと。
「僕かぁ。成る程、そう問われると、微妙に答えづらいね・・・。しかし、第一条件は、聡明であることだ。話が続かなければ、関係が続くこともないからね。極論、それ以外の条件はないよ」
「はぁ・・・。総合病院の院長の息子様は随分控えめな事。　お前なら選り取り見取りだろうに。」
「こういうのは、より条件のいい事じゃない。より自分に見合うことだろう？」
正論めいた事を言う斎木。　まぁ、その思考回路は理解出来ないでもない。
斎木は、届かぬ星には手を伸ばさない。　自分の手についたもので

最大限の働きをするタイプだ。多分、アイツならどんな女も忽ちの内に良い女になる。多分斎木の中にも無意識にそういう自覚があるんだろう。だからあの程度のゆるさで良いのだ。
なんとも出来た男。　将来成功するやつって言うのはこういうヤツの事を言うのだろう。
で、斎木（そのおとこ）は手の平を俺に見せる。　話の続きを、という促しのサインだ。
「俺か。・・・正直、あまり考えたことはなかった」
「良いんだよ。　理想を言ってみればいい。それが難しいなら、身近な人物に例えてくれたっていい」
身近な人物・・・か。そう言われてみれば、一人対象の人間が居る。
「そうだな。　俺の理想は、自分のサポートに出来るだけなってくれる人間だ。能力は俺より高い方がいいし、俺に好意を持たないなんて論外。極論で言えば、俺では決して手が出せないような高嶺の花・・・か？　そういう意味で言えば、お前が一番タイプに近い」
人差し指で指された斎木は、静かに笑いながら答える。
案外驚かないようなものなんだな・・・。さては予測されてたのか？
「なるほどね。それじゃぁ、確かに真流さんは対象外だ。　しかしそれならもう一人でも良かったんじゃないのかい？」
「それはな・・・正直、よく知らない。だが、お前より能力が高いなんてことはないだろう。それに、お前を抱き込めば、金には困らん。だから、配偶者にするならお前だ」
「そんな打算的に言われても嬉しくはないけれど、まぁありがとう。参考になるよ」
何の参考だ？　それを明らかにしない限り、何処か不安になるんだが・・・。
それを暴こうと口を開こうとしたら、生徒会室にチャイムが鳴り響く。昼休み終了の合図だ。
「遅れるのは不味いね。　話の続きはまた今度だ」
そう言って、斎木は弁当箱を持ってさっさと出ていってしまう。結

局聞けずじまいか・・・。
最近の俺は逃げられるのが流行りなのかもしれん・・・そんな後悔をいだきながら、紅茶を急いで飲み干し、俺も遅れて生徒会室を後にした。

刻印

結局放課後まで熱りは冷めることはなく、俺にとっては鬱憤の溜まる一日になった。あんな出鱈目に等しい噂を流された挙げ句クラスメイトほぼ全員に拘束され、俺の目的は果たせずに居るなんて、不都合以外何でも無い。

なんとか、群がってくる奴らから抜け出して帰り道に入ったはいいが、朝から気になりだしてる真流の右手の刺青（？）の事が頭から抜けきらず、答えもわからないモヤモヤが後悔の念を作り出していた。

苛立ちながら帰っていても、時たま指を指されるようにして噂されてるのが我慢ならず、更に苛立ちが募るばかり。俺の家は学校から２０分とかからないが、それでもこんなに通学路が長く感じたのは久し振りだ。

「ったく、今日は本当に散々な一日だった」

家のリビングに入るなり、鞄を床に投げ捨てて、自分も投げ捨てられた様にソファの上に寝転がる。今日は本気で疲れた・・・こんなのは今日だけであって欲しい。そんな事を切に願う。

とりあえず、一旦寝て疲れを取ろう・・・、頭の中からあらゆる思考を抜いて、重力に身を任せる。ソファに仕込まれたスプリングの反射が却って心地よく、自分を睡眠に導入してくれる。

そうすると目を閉じてからものの数分で、多分地震が起きたって目を覚まさないだろうと思えるほど、深い眠りについてしまった。多分、今日の学校が特別辛かったせいだろう。今朝は悪夢も見て随分睡眠が短い。このまんま眠れるなら、それに呑まれてしまおう。

だが、それは許されなかった。

いい感じに休めていたと思ったら、またあの幻視が俺を襲ってきたのだ。それも、今回はいつものように世界が一瞬暗転してオシマイという訳には行かなかったようで、数百回と繰り返した十字架の幻視の内初めて、痛みを伴うものになった。

その痛みは、日常的に生きてれば決して出会う事はないだろう強さの、頭がカチ割れるような痛みであった。あるいは、頭の内側から何

かが生まれそうな痛みでもあったか。
痛い！　痛い！　　自分が叫んでいるのは分かるが、何を言っているのかは分からない。でも、意味のある言葉は言っていないんだろう、単に肺から声帯を通して空気が出ていくだけの行為のついでに叫び声が上がってるだけかも。
痛みに全てが持っていかれ、全身の感覚が消えていく。今俺が感じているのは、どこか遠くから聞こえてくるように響く自分の叫び声と、それより遥かに大きく脳への電気信号を支配する痛みだけ。既にこの痛みは俺が耐えられる強度と時間を優(ゆう)に超え、自我さえも消えつつあるんじゃないかと錯覚する。最早この痛みは引き返せる段階さえも超えて、永遠に俺を支配するんじゃないかと夢想する。暗闇の中心にある十字架が白みを増すように、俺の脳裏に焼き付く。この十字架の映像は、真っ白な紙に墨汁を垂らしたように、俺の中に残り続けてしまうという奇妙な確信を得た。
誰をも俺を救わないこの状況で、俺は一人叫び続けるのかと、ごく僅かに残った知性で悲しい現実を考え続けていると、不意に世界の暗転は消えた。
幻視がまるで嘘だったかのように消えると同時に、痛みも一瞬で消え去った。幻視は最初っから嘘だったというツッコミも自分で入れられる余裕もある。その痛みは、既に余韻も残さず俺の体からなくなっていた。
（おそらくあっただろう）叫び声も止め、辺りを見渡すと、俺はソファーから落ちることもなく、ただただ叫んでいただけらしい。仰々しい柱時計を見ると、寝始めてから１０分程度しか経っていなかった。
「はぁ・・・はぁ・・・」
叫び声を止めた代わりに、俺は息を切らす。疲れは休む前より更に増し、でももう一度寝る気には全然なれず、仕方なく椅子に座って、買いだめてあった蜜柑に手を取る。一人暮らしの癖にダンボールで買うとかどうかしてないか俺は。
甘い物でも食べてリラックスしよう、そんな事を考えながらテレビ

のリモコンを手に取る自分の手に、ふと違和感があって、じっくり見てみた。
ニュース番組で不祥事を起こした政治家がつまらない答弁をしているのを右から左に流し、自分の手に集中する。俺の右手の甲には、あの幻視に出てくる十字架が、版木で写されたみたいにハッキリと刻まれていた。幻視で見たのは白色だったが、これは赤色。そこまで考えて、ふと変なことを思い出した。
あの真流の刺青と、全く同じものなのではないかと。
真流のは、どれかと言えば十字架よりは魔法陣、に近い造詣をしていたような気がする。だから、全く同じとは言い切れないのだが、それでも出自を同じくする刻印なのではないかと思い付いた。
・・・それだと、アイツも幻視に苦しんでいたことになるが、どうも真流にはそんな素振りはない。という事は、偶然の一致だろう。
恐らくは、さっきの頭痛で苦しんでいた間に、偶々落ちていたガラス片か何かで切り裂いた傷が十字架に見えるだけだ。幻視だって、疲れを原因とする幻覚だ。それでおしまいにしよう。気にするのもヤメだ。
「次のニュースです。　日本海周辺にて、非常に強い雷が発生しました。元々日本海側は冬の雷が発生しやすい地域ではありますが、昨日発生した雷は数、強さ共に平年より大きく上回るものであり、一説によれば発生した電圧は２０億ボルトを超すとの見解も。そこで今日は、長く地球の気象について研究されてる――」
「マジか。　ここの近くじゃんか・・・最近俺の周りで変なことばかりだな」
正直、参ってる。　この雷がどうのだって、本来は俺のせいではないのだろうが、何処と無く気になってしまう。
最近自意識過剰なんじゃないか・・・？もう、こんな事ばかりばかり考えてても仕方がない。毎日の鍛錬だけやってしまうか。
そう思って、テレビを消して、家の中を移動する。なんでも、父が生きてる頃に知人から譲ってもらった屋敷らしく、本来は俺だけで住むような事はなかったんだが・・・。父が死に際に、門架に引っ越せ

と遺言を残していったから、言われるがまま住処を移した結果、自分ひとりで持て余す大きさの屋敷が遺産として残ってしまった形だ。
で、家の地下には、変な部屋があった。コンクリート造りの、恐ろしく広い部屋だ。棚なんかが置いてあるから、物置として使えってことなんだろうが・・・どうも広さが割に合わない。軽トラが2，3台は入りそうな広さだ。正直、一角さえ使ってしまえば用済みな部屋なんで、残りは鍛錬のためのスペースとして用いてる。空間を必要とするトレーニングだってあるから、なんだかんだで活用できるのだ。
「さて・・・いつもの、やってしまうか」
俺が指す〝いつもの〟とは、腕立て、腹筋、ラダートレーニング等を一通りこなすことを言う。一回に述べ三桁回数はやるが、これを斎木に話したらドン引きされた。でも、こんな事をするのには訳がある。
ともかく、それを終わらせると、いつもの力試しのような物をやる。
壁に立てかけてある鉄パイプを手に取る。無機質な冷たさが俺の肌を刺した。多少振り回して、自分の体の駆動を確かめた後に、呼吸を整えて、スイッチを入れる。
「・・・身体強化（リーンフォース）、開始（オン）」
魔力が腕を介して、自らの肉体を書き換えていく。魔術回路が自分の腕を別の物質に置き換えていく。力が満ち、神経の隙間に別の神経を埋め込む感覚。少しの痛みもなく、もう発射準備は完了した。
――身体強化。　俺が使える、数少ない魔術の一つ。正しく言えば、強化の魔術の応用編であり、一種の『技術』。自分の体の構造を枢要（メイン）から約款（ディテール）まで隅々まで理解することで、自らの肉体への強化を引き上げる、まさに極限。
拳を強化すれば硬くなる。脚を強化すれば回転数が上がる。そんな事は当たり前。問題は、それのスペックを最大限まで引き上げる事。それに必要なのは、正確無比なイメージ。それが失敗すれば、魔術回路が軒並み千切れて二度と使い物にならなくなるらしい。だが、数年前から続けてきた練習だ。今更失敗なんて侵さない。
その基本事項を確認すると、鉄パイプを握りしめた。すると、紙筒

をそうしたように簡単に握りつぶすことができる。金属とは思えないほど軽快な音を立てて、だ。そして、鉄パイプを空中に投げ、それを蹴り飛ばす。すると、蹴飛ばすまでもなく、脚に触れた段階で鉄パイプは粉々に砕けて壁に反射した。うん、魔術回路の調子は上々だ。何も問題はない。

そう、これが外でトレーニングをしない理由。魔術を展開した練習をしたいからだ。父さんから教えてもらったが、魔術は使えない人間からは隠匿するものらしい。これは、何より優先することらしく、父さんに魔術を教えてくれるようせがんだ時、最初に言い聞かされたことだ。結局父さん自身は魔術は教えてくれなかったが、代わりに多くの教師を俺にあてがってくれたから大して変わらんと思う。

肉体の鍛錬に重きを置いてるのもそれが理由だ。師匠が言うには、俺は魔術を主にした闘いは不向きらしく、肉弾戦で相手の優位を取れるように肉体を鍛えるしか無いという。なんともまぁ世知辛い話ではあるが、ファンタジーの魔法使いのようには行かないらしい。俺には相応しいぐらいの結末ではあるのだが。

しばらく魔術回路を回したまま動作確認をした後、部屋の片付けをする。あんなトレーニングをするのだから、当然その直後は部屋が荒れ放題なのだから。物の破片や、倒れた棚なんかの始末をするのは毎日のことだ。その途中に、目に入る。集合写真の姿。

家族だけで撮ったわけではない。俺の親父が、撮れる時に撮っとこうなんて柄にも無いこと言って、無理矢理家族とか、家族が世話になっていた人間で集まって、これまた無理に全員フレームに収めて撮った、見栄えなんてちっとも気にかけてない写真だ。だけど、今となっちゃ、こんなんでも大切な思い出だ。

なんせ、これを撮った日の内に、全員音信不通になってしまったんだから。

これが単なる偶然か、それとも父が直感的に或いは意図的に終末が訪れることを知っていたのか。そんな事は些末な事だ。この写真が残っていることだけが重要なのだから。自分があの街から生き残ったことだけを示せる、この写真があることだけが。

「つまんない感傷に浸ってる場合じゃないな。　すぐに〝仕事〟の時間はやってくる。急ぐんだ」

俺はまた、塵を拾い始めた。

《仕事》

オーブンから器を取り出す。熱々に加熱された皿の中で、ホワイトソースが煮立ったかのように気泡を幾つか出す。その音を聞くだけでも至福ってもんだ。

今日の夕飯はグラタンだ。というか、時間と気分が許してくれれば、大抵の夕飯はグラタンと何かになる。因みに、今日の付け合せはガーリックが効いたバタールと、消費しきれなかった野菜で作ったサラダである。

グラタンはこの季節、俺の食卓の上によく上がってくる食べ物だ。俺が個人的に好いているのもあるが、単純に温かい食べ物というのは価値が高いのだ。

門架市の冬は長い、だから温かい食べ物の出番が自然と多くなる。かと言って、スープや焼き物で済ませるのは味気なく、鍋など一人で食うのは悲しすぎる。今までそういう時には粥やうどんを食していたが、たまーに濃い味が欲しくなる時にコレは良い。大抵の物を入れても旨いし、一人で食べる分には器を複数用意する必要がない。しかも、おかず的な食べ方もできる。具材によっては意外と白米にも合うのだコレが。そりゃぁ作る時や後片付けの時面倒だが、それを無視してでも食べたくなる。そもそも、そういう作業には手慣れてて、特に苦なんて感じなくなってるのだ。一種の職業病かも知れない。

そんな料理を食べ終わり、白く汚れた皿などを洗い終われば、いよいよ《仕事》の時間だ。

トレーニングウェアから温かい格好に着替え、その上からいつもの漆のように黒く染まっている被り物（フード）付きの外套（コート）に着替える。コレ一枚で上下を両方覆えるから気に入っているのだ。さらに、机の上に置いてある、革製の手袋を着用する。傷に強い上に金属の意匠が施されていて、これ単体でも数万は下らないという品らしい。尤も、これは魔術礼装だ。値段をつけるとしたら数百万は下らないだろうし、どんなに金を積まれた所で譲る気もない。さらに、これまた魔術礼装の革靴を履く。最後に、フードを目深にかぶって完成だ。全身を黒色、し

かも何らかの魔術的な効果を持った品を身に着けている。怪しいことこの上ないし、今の俺は銀行を着て歩いてるようなものだろう。コレばかりは、作ってくれた先生に感謝だ。

「行ってきま～す」

学校に行くときにさえ言わないのに、毎夜のこの時だけは誰も居ない家に向かってこの言葉を口にする。誰かが俺の行動を見ているのだと、心の何処かで思ってるのだろうか。だとしたら、その人は笑っているのだろうか、それとも泣いてるのか。でも、今更止めることは出来ない。

家の前に人通りはない。この辺りはいつもそうだ。住宅が立ち並ぶ居住区、ビルが林立する新都、豪邸ばかり目につく高台、誰も寄り付かない荒野。ここはそれらから離れた場所、高台ほどじゃないが屋敷を持つ人間だったり、人々から忘れられた寺院だったりがそこらに立ってる、門架の中でも一番寂しい場所。そんな場所を通る人間なんて、全くと言っていいほど居やしない。だから、一応耳をそばだてて周りに誰も居ないことを確認したら、最初っから魔術回路を全開にする。強化された脚は、俺に人体の限界を超えた挙動を許してくれる。その脚力で自宅の屋根の上まで跳ぶ。脚力全般が強化された体では、三階建ての屋敷の屋根の上に乗るのも決して難しいことではない。そして、スタート地点に立った俺は、さっきの訓練のときのように、力を爆発させた。そして、隣の家の屋根に脚を着け、走るようにして次の跳躍を行う。こうやって、隣り合った屋根を地面に見立て、道路を見下ろしながら疾走する。消音の効果がある革靴だから思いっきり走っても良いのだが、全力を込めると屋根瓦を踏み抜いてしまうから、絶妙に調整しながら走る練習になる。高速で走る内は頬に当たる夜風が気持ちよくて、体の疲れを忘れさせてくれる。これを感じる時は、冬も良いかもなと言う気持ちになれる。

やがて、屋敷が並んでいた寂しい風景から、照明が点いていないビルが増えていく。新都に入っていっている証拠であり、その証拠に眠らぬ街が見る見るうちに近づいていっているのが目に見える。ここからは、力の調整がどんどん難しくなっていく。中心部に近づくほ

ど、ビルの高さは上がるし、屋上の装備は増えていく。エアコンの室外機やフェンスにぶつかる訳にはいかない。それに隣同士のビルであっても、5～10m高さが離れていることだって多い。状況によっては、街灯を足場にすることだってある。人通りは、自宅周りが少ない分、人々はごった返すような多さ。おまけに光も多い。ここで難易度はピークに達するから、集中力を切らさぬようにビルの屋上や側面を駆け抜けていく。夜の街を駆け抜けると言えば、カッコいいかも知れないが、俺の目的はそっちでは決して無いから、感慨は抱かないようにしなければ。

そうして、最難関の新都を抜ければ、目的地の居住区に辿り着く。ここは、マンションや、一軒家にしても高台のような豪勢なものじゃなく、小ぢんまりとしたマイホームのような物がメインの地区だ。これ以上屋根を走る必要もないので、適当な所で道路に着地する。5分ほどずっと走り続けだったから、息を少し切らしてしまった。だから、数呼吸置いて、息を整える。そして、自分の体が落ち着きを取り戻したと判断できた時、耳をそばだてる。だが、今回は出る時とは違い、魔力を込める。正直、感覚器の強化は苦手だから、少し慎重に。すると、目的とする音が聞こえてきた。

「・・・これが例のブツです。では、代金の方を・・・」

「いやぁ、ありがとう。矢張り、ヤクを仕入れるなら君達からだね・・・」

矢張り今日だったか。　予測どおりの声が聞こえてきたのに、笑みが止まらない。

まず、前提としてだが、この街は犯罪の温床だ。俺の屋敷近くの側道で凶器持ったブチ切れた男が可哀想でひ弱そうな男を脅迫していたのを発見した時からそう思った。なんたって、凶器がナイフや鉄パイプなんてものじゃなく、弓鋸を被害者の首に当て、今にも引きますよって瞬間だった。。初めて見た犯罪現場がそこまでショッキングな事だなんて思いたくなかった。その場は男を追い払うことで解決したが、事情を聞けば、少なくとも3，4個は法律に抵触してるような背景だった。その日から暗がりを歩けば、何回も俺を襲われた。何回でも追い払ったが、そいつ等は本気で殺すつもりだったと思う。

それが止んでも、俺の中では疑いは晴れなかった。この街が、治外法権の街なのではないかという疑い。それからは、こうやって出向くか出くわすかして、未然に防ぐのを生業としているのだ。今日はそれが、麻薬の取引だったという話。

話を目の前に戻す。声の方向に行ったら、案の定取引の現場があった。小太りの５０代であろう男がキャリーバッグを持った男を引き連れている。その向こうで、仰々しいケースを持った若い男が俺が近づいているのに気がついていた。双方引き連れている男は相応の武装をしているのが分かる。と言うより、最近そういう事が多い。

「・・・だから、下っ端を遣わせろと言ったのです。嗅ぎつけられたようですね、我々が」

そんな風にケースを持った男が言うと、小太りのがこちらに振り向き、ケースを持った男は引き下がる。おそらくあのケースの中には麻薬が入っているのだろう。そして、俺に出会った瞬間、取引や俺の迎撃より、逃走を優先する動きをしている。思えば、この路地裏は人目につかない上に逃げ道が多く、その全ての逃げ道の上には車が止めてあった。どうやら、俺が来ることを予測した上での対策だろう。中々慎重で、頭のまわる男だ。対して、小太りの中年男の方は・・・。

「チッ、見られたか。　おい、適当に追い払っておけ」

・・・若い男に同情するほどの阿呆だった。しかし、そんな事の自覚がない団体様なのか、取り巻きの一人がゆっくりと歩いて近づいてくる。男が持ってるのは・・・ナイフか。今まで見てきた中では可愛いもんだ。男は無防備にも、俺の首元にナイフを突きつける。

「おいテメェ、喉笛切り裂かれたくなかったら回れ右してさっさとお家に帰りな！　そうすりゃ、命だけは助けてやるぜ！」

世紀末なのかここは。　そんな陳腐な脅ししか出てこないとは、この小悪党の格も知れる。

だが、ここでそれを指摘するのは何処かずれてる気もする。だから、そのかわりにこう返してやった。

「・・・そのケースを俺によこせ。　それを止めるのが俺の役目だ。拒否すれば、ここに居る全員の無事は保証できない」

そう、フードを取って目を見せて告げてやる。そこに居る全員が驚いたようだが、ナイフを持った男だけは驚きの後にナイフを振り下ろしてくる。

「そっか、じゃ、消えな！」

ここまで頭が悪い男だと、かえって可愛そうだが、俺を倒そうとするなら仕方ない。いつものようにやろう。

俺は、魔術に依る身体強化を全身に施す。男の動きは、油断からとても緩慢で、少なくとも強化を施してから顎に蹴りを入れる時間は残されていた。だから、そのとおりに叩き込む。

魔術による肉体強化は、一種の技術だ。他の物体への干渉を想定していない代わりに、自身の肉体に限定して抜群の効率を誇る。それこそ強化にかかる時間は一瞬で、その効果は他に比類ないものになる。そんな肉体の攻撃を受けたら男は耐えきれるはずもない。その蹴りは、今まで感じたことない感触だっただろう。おそらくは、いきなり自分の足元から間欠泉が噴き上げたような、無作法な破壊力だったに違いない。それは、他人からは俺の前に居た男が瞬時にして消えたように見えたに違いない。一瞬で緊張が走り、小太りの男は恐怖からか小さく息を漏らす。

「警告はしたぞ？」

俺がそう告げる。　皆はこの言葉の正しい介錯を行えたようだ。

蹂躙する――――と。

若い男が逃走を始める。その取り巻きの男たちは、男を護るように立ち塞がり、拳銃を懐から引き抜いた。肉の壁として使われていることが解っているのだろうか・・・恐らく、そこまで重々承知した上でこんな動きができるのだ。改めて、若い男達の完成度に簡単せざるを得ない。

拳銃というものは、適当に構えて撃てば当たるなんてものじゃない。丁度、あの小太りの男がいい例だ。死角から撃っているというのに、焦りと恐怖で正しい照準を合わせられていない。無様に銃声を鳴り響かせるが、見当違いの場所に弾丸が飛んでいくばかりだ。それに引き換え、あの取り巻き達は非常に冷静だ。正確に狙いを定めてい

る。俺の心臓と脳部に確実に当てるつもりだろう。非常に訓練された尖兵だ、こんな男たちが使い捨て覚悟で動いているなんて、逆に意外だ。

しかし、強化を施された肉体の反則的な動きの前には拳銃であっても無力だ。脚に込める魔力をほんの少し高める、それだけで弾丸を視認してから避けることが出来るようになる。その瞬時にして俺は必殺の間合い、つまりは手が届く距離に近づき、取り巻き達の首元に手をやる。

歪む音がする。首を捻るなんて、簡単過ぎることだ。あれまで優秀な動きをしていた取り巻きたちも、首が背中側に回っては立っても居られず、未練がましくもゆっくり崩れ落ちる。そして、逃げ始めたケースを持った男にさえ、2メートルも動かないうちに攻撃圏内に入れる。そして、男の首を掴み、背中に手を当てる。

男はそこで止まる、振り向いた顔は俺より二、三才若いのだろうかと思わせるぐらい、童顔の男だった。

丁度このタイミングで、さっき蹴り上げた男が落ちてきた。何処かが潰れる音がしたが、気にしない。眼の前にいる、俺に掴まれた男はその様を見たのだろう。静かにこう呟いた。

「・・・噂通りの強さですね。　貴方なら、僕を殺すことも簡単でしょう。なぜ、すぐにやらないんですか？」

「いや、何となくだ。　あっちのと違って、随分肝が座ってそうだったからな。・・・ここまで若い男だったとは思わなかったが、事情があるのか？」

そう言って、俺は男の手からケースを抜き出す。中身を確認すれば、矢張りビニールに入れられた白い粉が入っていた。小麦粉と麻薬の見分けなんて出来ないが、ここまで暴れればこれが偽物かどうかなんて関係ないだろう。

男は多少考えると、口を開く。

「それを言えば、許してくれるのですか？」

「やっぱり頭のキレる男だ。　だから、お前は殺したくなかった。・・・お前が俺の前に立ちはだかる分には厄介な男だが、社会の歯車となる

分には良く働けただろうに」
「そう言って貰えると嬉しいですね。でも、一回目の時から覚悟しましたよ、いつか非業の死を遂げるってね」
　それだけ言うと、自虐的な言い方をした男は前を向く。
「一思いにお願いしますよ、苦しいのは嫌いなんですよ」
　俺はその男の言葉を受けて、一呼吸を深く置く。　そして、言葉とともに体を貫く。
「あぁ、そのつもりだ」
　背中から心臓へ。掴んだそれを無遠慮に握りつぶす。　爆弾と同じようにして、血液が俺の顔やら服やらにこびり付く。服は、数時間もすれば戻る（先生が着けてくれた魔術効果の内一つだ）が、顔は後で念入りに洗わなきゃならないな。
　振り向きざまに首も捩じ切っておく。　これで、この男は苦しまずに死ねただろう。
　その作業を終えると、俺は中年の男の方を向き直る。既にその小太りの中年の男は恐怖で倒れ込んでいる。今にも漏らしそうだが、そこを踏ん張れてる辺り多少のプライドはあるということか。
「ひっ・・・来るな、来るなぁ！　私は、指示されただけなんだ・・・！　私を殺しても何にもならんぞ！」
　男はまくし立てる。俺が近づくのを見て、死への恐怖が高まったのだろうか。逃げられるのも面倒なので、男の足を踏み潰す。嫌な音を立てて、男の足は千切れかけの無用の長物になる。
　まるで赤子か瀕死のトカゲだ。俺は、男のワイシャツの襟を引き、俺の顔を見させる。顔は涙でグシャグシャで、恐怖で歪んだ様は歪んだ飴細工だ。だが、逃げる足音が多い気がする。もしかして、さっきの取り巻きの銃声で勘付かれたか。
　気付かれるのも時間の問題だ。あの男に時間を取りすぎたか、俺は中年の腹を思いっきり蹴り飛ばす。サッカーボールのように飛んでいった男の胴部から、血が零れ落ちていた。
　俺はもう一度その男の顔を凝視し、短く告げた。
「俺のことは隠せ。　そうすれば、生きている限り殺さない」

男は首がちぎれるんじゃないかという勢いで頷いたので、手を離し、離脱に手を付ける。
そう思うと、俺はさっさと逃げねばならんと、ビルの外壁を伝って屋上に出る。そして、来る時と同じようにして帰り道をゆく。だが、今は行っておきたい場所があった。
この市で最も高いビルだ。名前は覚えていないが、１００ｍ超えの非常に高いビルで、ビルの外壁に付けられたパイプや溝を使って登るのも一苦労である。横方向と違って、垂直方向への移動は難易度が高いのだ。
苦労して屋上に辿り着くと、眠らぬ街の全貌が見える。直下に広がるは、ビルや街灯に照らされる街だ。だが、この街は暗い。多分、何処よりもだ。誰もが気づいていないのか、誰もが言わないのかは分からないが・・・。
そして、気まぐれにさっき居た場所を、視覚を強化して見つめる。そこに、一人の女が近づいてくるのが見えた。そして、その女はさっき俺が腹を蹴貫いた中年の男にしゃがみ込んで話しかけて・・・そして、首にナイフを当て、躊躇いもなく切り裂いた。
その事自体は驚かない。俺がやらなくても、アイツはそういう人間だった。いずれにせよどうしようもない奴だったのは間違いない。だが、トドメを刺した人間が問題だったのだ。
「・・・真流？」
そう呟かざるを得なかった。多分、大きな衝撃を前に理解が追いつかなかったんだろう。
あの顔、間違えるはずもない。でも、なぜアイツが・・・。　ダメだ、知識が少なすぎる。ここで全貌を理解できるはずもない。
だが、真流が居る場所を、目を離せずに見つめていたら。　真流が俺の方を見てきた。
まるで、俺の所在が解っているかのように。
「なんで・・・俺のことが・・・？」
その先は考えられなかった。　今からアイツと話そうにも、距離が離れすぎている。既に真流は俺と視線を合わせるのをやめ、帰ろうと

していたのだ。仮に真流が車でで変えるとする。車に追いつくのは簡単だが、ここからでは見失うのが先だ。
だから、アイツが帰るのをしっかり見送ってから、視覚の強化を切る。既に眼は限界で、これ以上やったら網膜が焼き切れるほどだったから、丁度良かったかも知れない。
コートの中に物の感触があるとおもったら、それはさっき奪い取った麻薬だった。
俺は、それを手に持ち、ケースごと握りつぶす。強化プラスチックがベースで作られていたのか、破片と麻薬が風に吹かれて、まるで輝きを失った水流のように流れていった。
そんな事を考えていたら、真流の顔がチラ付き、自分が如何に汚れているかを思い知った。
・・・だが、これしか方法は無いのだ。
一人、また一人と消えていった、家族。　写真立ての中に生きているが――既に会えない存在に成り下がっている。
もう、こんな方法しか取れないのだ、俺は。
俺は強くないからこそ、殺し続けるしか無い。全ては、たった一つ残った夢のため。
「俺は、どんな巨悪に成り下がっても、――――――」
一際風が強くなった。コートは靡かれ、布が互いを打ち付ける音が耳に入り込む。
「高い所だからな・・・風が身に沁みる。　早いところ帰るか」
俺はもう一度、来たときと同じ様に、夜を跳ねた。

朝焼け

「・・・また、ここか」

最近は夢見が悪い。昨日も見た筈だが、またあの蒼い炎の街だ。

だが、これは記憶の整理じゃない。　夢に出てくるのは、あそこで泣いてた俺のはずだ。だが、今は違う。今の俺だ。俺は高校生であって、世界が如何に辛いものか知っている。

この風景は、今から5年前・・・門架とは遠く離れた街で、引き起こされた悲劇だ。原因は全く不明、だがまたたく間に広がった青い炎は、一つの街を死都に変えたのだ。死亡・重傷者は併せて１０３８名、全焼した住宅は２００棟を超えるらしい。時間が経った今でも、時たまドキュメンタリー番組で原因を追究したり、生存者に話を聞いたりすることがある。当然、今のその街は綺麗なものだが、その傷跡は十分に残っている。それ以前に、この災害の始末に国が掛けた予算は数億じゃ下らないとも。

俺がこの未曾有の災害の実情をそれなりに知ってるのは訳がある。

俺は、あの街に居たからだ。

元々は更に別の町に住んでいたが、父親の鶴の一声で、その街に移住したのだ。そこで沢山の経験をした。俺が魔術を身に着けたのもここに居る時だし、その他にも多くの事を知り、鍛えられた。そうだ。あの日までは、曲がりなりにも普通の男子らしく、楽しんでいたはずなんだ。

多くの人が死んだ。近所付き合いのあった大人も、学校でそれなりに話してた子供も・・・俺の事を鍛えていた人だって、その多くはあれから見てない。・・・家族も含めて、俺の人間関係を構成していた人間は、全員居なくなってしまったのだ。その日から、俺は変わってしまったのだろう。多くの物を失い、人格が変わる。極々ありがちで陳腐な物語だ。

子供から大人になるまでの過程で、世界は広くなるか狭くなるか。俺個人の意見で言うなら、間違いなく狭くなっているのだろう。大人になるまでに多くの知識（げんかい）を学び、仕組（ふごうり）みを学ぶ。『何でも出来る』と夢

想した子供が、現実を由とする大人になるまでに、どうして『世界は広くなった』と曰(のたま)えるのだろう。そして、その過程を〝成長〟と呼ぶのなら、俺はあの日に急成長を遂げたわけだ。

この炎が憎い、俺を変えたこの炎が憎い、全てを消し去った・・・この青い炎が、何よりも憎い。

その炎に囲まれた街を、一人で歩いていた。何もかもがあの時のままだ。

だが、歩いていると一人の女性が立っていた。周りには炎に灼かれて呻く人々が転がっているのに、その女性は、全くそれを介せず俺と向き合っている。そして、俺はその女の事を知っている。小柄なれど、一度感じたこの魔力について覚えていられない人間は居ないだろう。若しくは、皇帝のように、尊ぶべき者に遭った様に。それが持つ魔力は、絶対的且つ不可侵的なもので、人間から超越しているのではないかとさえ思える。

しかし、その放つ気配とは真逆のように、その女の顔は苦痛・・・いや、悲痛に歪んでいた。

「・・・君には、非常に悪いことをしたね」

なんでそう思うのだろうか？　そう疑問を呈そうとした俺の口は、開けど声を上げることはない。どうやら、今回の悪夢は多少趣が違うらしい。

「この街に居た頃は楽しかったねぇ。　我(アタシ)もこの街を闊歩したけど、中々悪くない居心地だった。君の事だって、生きている頃には出会えなかった、貴重な体験だ」

眉を顰めたまま、こちらを指差す女。知っている顔が、他人行儀に語りを始めるのは少し違和感があるが、その事について糾弾できる状況ではない。結果、俺は何処か胸にわだかまりを感じながら、黙って聞いているしか無かった。

「それでも、この街は灼けてしまった。極めて残酷なことにね」

ああ、そうだ。　不運なことだった。

「そして、君も変わってしまった」

その言葉に、俺は心身ともに絶句した。思い当たる節はある。当た

り前だ、俺にだって変わってしまった自覚があるんだから。だが、それを誰かに指摘されるとは思わなかった。俺の事を知る人間なんて居ないという奢りだろうか。

「昔の君は、君の父さんの夢を受け継ごうと必死だったね。　あんな夢なんて、とても叶わぬ夢だろうに。君は愚直なまでにそれを追い求めて、そして手が届くところまでに来ていた」

　その言葉を聞いていた。その続きを聞きたくないと、心が叫んでいる。彼女と長らく過ごした経験からか、それとも無意識に自分でもそう思っているからか、俺はすでに続きの言葉が何であるかの予測がついたんだ。

　だが、その続きは確認をするかのように告げられた。

「その折にこの炎がやって来た。絶望の淵に追いやられた君は、既に狂ってしまっているんだよ。」

　ああ、判っている。そんな事、態々確認を取らなくても、自分自身が一番理解っている事だ。今更そんな言葉に、俺の心は揺さぶられはしない。

「・・・そうだろうね。　君はそういう男だ。だからこそ我は君を見初めた」

　心を見抜かれたのか、まるで分かったような口を聞かれる。いや、事実見抜かれたんだろう。誰かの目が苦手、という意識を得たのはこの女が初めてなのだから。

　その女は、憐憫を浮かべ・・・しかし意識を変えたのか笑みを絶やそうとせず、俺の頬に手を当てる。

「そうなった君は、どんな障害を置いたとしても、夢を叶えようとするんだろうね。そんな君に我から忠告を贈ろう」

「・・・プレ、ゼント？」

　発せられないはずの俺の声が、僅かだが出た。その事を受けて、彼女は少し目を見開いたように見えたが、すぐに戻す。

「おや、君の体は覚醒に向かってるみたいだね。丁度良かった」

　丁度良かった・・・？　一体何のことだろう・・・。

「もし、君が夢を追うというのなら、街外れの荒野に来ると良い。そこ

で君は、片道切符を手に入れる」
その意図は・・・もしも来たら、来る前の世界には戻れないということだ。だが、夢を追うというのなら・・・正義を貫くというのなら、そこに辿り着くほかない・・・んだろう。
「うん、良い目だ。　それじゃぁ、お別れだね」
最初に見た時の悲痛さは何処に消えたのか、まるでアリスがチェシャ猫を見たように、しかしそれとは違い心の底から笑っているだろう表情を見た。
まだ聞きたいことはたくさんある・・・。だが、俺の意識は、既に現実に引き戻されつつある。今日の俺は太陽より早起きなのだろうか・・・。そんな詰まらない事を考えていると、俺は目を覚ました。

目が覚めたら、日は昇っていた。あの青い炎の夢の後だというのに、目は冴え、体は全く軽い。ベッドから転がり落ちているなんてことも無かった。
「・・・まぁ、元気なら何も言うことはない」
今日は良い一日になりそうだ。俺は鼻歌を口遊みならが、登校の準備を始めた。
結局、この快調は崩れることなく、朝日が実に眩しい一日になってくれた。まるで俺の心境を映し出してくれたみたいに爽やかな始まりだ。
それで、学校に着くと、麻加部が学校前の通路を何やら道具を持ちながら歩いている。アレは筋トレの道具だろうか、昨日部活ごとに道具は運んでおいてやったはずだが・・・。
「おーい。　そんな道具を持ってどうしたんだ?」
今の俺は機嫌がいい。　なんなら今から歌って踊れと言われても全力を尽くして果たせるぐらいは。だから、困っている麻加部が居たから、助けてやろうとも思ったわけだ。
麻加部は、一瞬嫌そうな顔をするも、そっぽを向けて答える。
「・・・今朝確認したら道具の取り違えがあったから、運んでる所なんだよ。今、ボクシング部の部室にこれを持っていってるところなん

だ」
　それは、胸筋を鍛える金属管のような奴だったと思う。生徒会の誰かが間違えてしまったのか？
　一個一個は小さいが、アレは数個セットだ。小さいと言っても一個３～４キロはあって。一気に十個近く持ってる麻加部はつらそうだ。
　仕方がないから、俺も数個持ってやる。麻加部が持っていた半分で大体２０キロ程度だろうか。麻加部は俺より２０ｃｍ近く小さい体格でこの量を持っていたのだから、きっと相当量の筋肉を持っているんだろう。
「・・・手伝いは、要らなかったんだけど」
　本当に嫌そうだ。近くに立っているのも厭、って感じか。
　真流のそれと違って、麻加部が俺を憎むのは明確に理由がわかる。去年の文化祭での俺の行動だろう。謂わば、餌に使われたわけだから、憎まないわけはない。だが、俺はそれを無視して麻加部に同行する。
「お前が俺を憎んでるのは分かる。　だが、今日の俺は気分がいいんだ。こんな事滅多にないぞ。分かったら脚を動かせ」
　そう言うと、麻加部は観念したように歩き出す。麻加部は全く疲れる様子もなく歩き続け、ボクシング部への引き継ぎも無事に行われた。生徒会にこの話は行っているらしく、とても円滑に終わった。
　だが、無事運び終わった後、俺と麻加部は学校内の自販機スペースで一緒に休んでいた。特に話すこともなく、一緒に居るが・・・俺も麻加部も互いに話す様子は無く、空気が若干重い。
　その中で、最初に口を開いたのは麻加部だった。
「その手・・・」
「手？ああ、これのことか」
　すぐに思い当たる。俺の右手の甲にある、紅い十字架型のケガのことだろう。結局あの後全く消える気配は無かったから、諦めて消毒だけして寝たんだった。
「別に何とも無い。痛みもねぇしな。　多分擦っただけだと思うから気にすんなよ。明日には治るさ」

「そう、分かったよ」
それで、一旦話は終わる。会話を一旦挟んだから、多少空気が軽くなるかと思ったが、結局静寂はより重い方向に変化してしまい、口を開きづらくなる。
だが、それに流されるようではいけない。俺は自販機のボタンを弄びながら、麻加部に口を利いてみる。
「なぁ。　お前は、俺のことが嫌いなんだよな？」
非常に抽象的かつ、敵意を剥き出しにさせるような、所謂『嫌な質問』。
当然、俺もこんな事を聞きたくなかった。だが、不思議に思ったのだ。アイツなら、ここからさっさと離れることも出来るはずだと。俺が呼び止めたわけでもないから、俺のことが嫌なら部室にでも行ってしまえばいい。
でも、事実としてここに居る。なら、こんな強気な質問も答えてくれるはずだ。
「・・・僕は、君のことが羨ましいよ」
自販機が金属音に似た、飲み物を落とす音を響かせる。その音に消え入りそうなほど、まるで雫が落ちたように静かな声で麻加部は言った。
「そりゃぁ、君の事は憎いさ。あんな事してきたんだもの、嫌いになるなというのがどうかしてる」
そうなれば、堰は取り壊された。既に歯止めの効かなくなっている麻加部は、口が止まらない。
「だけど、あの時・・・君は、取り巻きに囲まれていても、何処と無く燦然としていた・・・。『勝つ方に尾く』なんて思考の取り巻きと、君が違うのは当然なんだけど。・・・それに、あの時、君は、僕と対等の勝負をしてきたんだ。僕が負けたのは、僕が力不足だったからだ。だから、そう考えれば、怨みは薄い」
その話を、俺は静かに聞く。俺から振った話だが、ここで俺が何か話すのは違う気がした。
それに、麻加部とは話す機会が少ない。ここで聞いておくのは、損

がない。
「・・・だから僕はいいんだ。君のことは、決して許せないものじゃない」
「そうか。　悪いな、変な質問しちまって。これは礼だ。受け取っとけ」
そう言って、俺はさっき買った缶珈琲を投げ渡す。話を聞いている間2つ目を買っておいていたのだ。
まぁ、流石にこんな質問するのは気が引けたしな。俺なりのけじめってやつだ。
それを見た麻加部は無邪気に笑って、俺は『こいつも無邪気に笑えたのだなぁ』と思っていた矢先、告白のセリフのように麻加部は言った。
「僕、コーヒーは無糖じゃないと受け付けないんだ」
「・・・俺のと交換してやるよ」
俺はそうとしか言えなかった。
「はぁ、俺もあんまり甘いの好きじゃねぇんだがなぁ」
プルタブを開け、ちびちびと甘い(カフェオレ)のを飲む。
甘いの自体は嫌いじゃないが、コーヒーが甘いのは苦手だ。コーヒーは苦いものだ、そうでないと俺の期待に対する裏切りだろう。
そんな風に眉を顰めていると、ふと廊下を歩く影が居た。時間的には、まだ十分早い。こんな時間に学校にいるのは、それこそ朝練をするような連中だ。しかし、運動部に居るような顔に、コイツのようなやつは居なかった。
青みがかった銀髪、西欧を思わせる可憐・華麗な顔立ち。　この学校に彼女と比べられる女子なんて一人しか居ないだろう。すなわち、真流だ。
ここまで考えてピンときた。アントニア・バルツァ、一年の美少女・・・か。その女子は、何かを探しているような顔だ。何かというか、誰か・・・だろうか。確か、コイツは柔道部のマネージャーだったような。なるほど、彼女がここに居る理由がわかった。彼女も困惑しているようだし、ここは助け舟を出してやろう。

「麻加部なら、自販機スペースだぞ。　彼を探してるなら、そこに行くといい」
「え？　あ、はい。ありがとうございます。あの、貴方の名前は？」
　口を利いて、その人間がどういう人間か初めて分かることもある。今回の場合はまさにそれだ。
　直感的な確信だが、この女子、間違いなく優秀だ。初めに俺の声を聞いたときこそ驚きを見せたが、俺が何を考えたのかも含めて話の大筋を一瞬で理解する。アントニアの眼には、先まであった困惑は既に消え失せ冷静さを取り戻している。感情の起伏は元より少ないタイプなのだろうが、頭の回転が早いことには間違いない。
　冷静沈着、頭脳明晰。斎木と同じで、敵には回したくないタイプだ。
「橙乃だ。　詳しい話は麻加部からでも聞け」
「・・・橙乃。　ですか。貴方は、橙乃匡基先輩ですね？　噂はかねがね」
　そう言って、一礼してくるアントニア。
　美少女からお辞儀をされると、少し戸惑ってしまう。雑誌の表紙よりも、顔のパーツが整っているだけになおさらだ。
「あー・・・いや、顔を上げてくれよ・・・」俺は即座に顔を上げさせる。　女子が寄って来ることはよくあるが、どうもコイツにお辞儀をさせられただけでも少し罪悪感を覚えてしまう。きっと、全く変えない表情にその答えがあるんだろう。無表情ってずっと続けられると、正直怖い。
「いえ、多少部長がお世話になったようですので。　どんな相手にも、この程度の礼儀は当然です」
　ここまで丁寧な物腰だったアントニアの言葉が、少し敵意を持って俺を射抜く。無表情を貫いていたのが、少し眉の角度を傾けているのでなおさらだ。
　少し怒られてる・・・？でも、アントニアに怒りを買うような真似をしたことは・・・した事は・・・ないとは、言い切れない。
「もしかして、文化祭のことを怒ってるのか？」
「怒る・・・？　いえいえ、私が怒ってるなんて滅相もない。私はただ、

貴方に尋ね事があるだけですよ」
嘘だ！　こういう輩が笑う時は怒る時だって相場が決まってる！
でも、正直ここで逃げるのは、道理に合ってない気がする。逃げるのは、コイツに負けたからと言うことになるし、そもそも相手が腹を割って話してきているのだ。俺が逃げるのは卑怯だし恥だ。
こういう相手は向き合ってこそ、だ。
「その令呪についても尋ねたいですが・・・。サーヴァントも連れて歩かぬ貴方に聞いても・・・」
小声で何やら思案するアントニア。俺の聞き慣れぬ言葉も聞こえてきたから、恐らくは自分の国の言葉で独りごちっているのだろう。噂に聞いた話だが、ギリシャの出であるらしいからな。
こちらから視線を外していたアントニアは、静かに向き直る頃には元の能面顔に戻っていて、透明な水に透き通るような声で問うてきた。
「貴方は、風太の事を憎んでいるのですか？」
その質問に、思わず背筋を正した。
当然だ。あんな事をしたんだから、彼と近しい人間ならそう思うのも当たり前の思考だ。
取り巻きを引き連れ、風太の言い分を全く以て聞かず、挙げ句クラスの出し物を占領。ああ憎いと思われて相違ないだろう。事実、アントニアからはそう思われているに違いない。
だが・・・
「本当のことを言って、幻滅してくれないなら言ってやる」
「・・・覚悟はしていることです。　何を言われても驚きませんよ」
許しも出たことだし、思いっきり本心を吐露してやる。
「・・・俺は、アイツのことを憎んじゃないさ。むしろ、好ましいとさえ思ってる。アイツの人懐こい性格と魅力は、俺にはないものだ。それでいて、努力家なら言うことなしだ。ま、全部殴り倒した後に知ったことなんだけどな。
最初からそれを見抜けていれば、俺はあんな事せずに最初っから迎合の道を選んだろうに」

・・・なんて、都合のいい話だろう。俺は、本心からそう付け加えた。
全く俺は未熟だった。アレ以外に勝利への道はあったはずだが、結局あの方法が最短だと思いこんで・・・ま、所謂やらかしたってやつだ。
起きたことについては仕方がないが、アイツとの友好的な関係を一回にして無かった事にしたんだ。それは悔やまれることなんだ。
後半の方は、情けない顔になっていただろう。俺は、その顔をしっかりとアントニアに見られていた。
壁に寄り掛かるようにして立っていたアントニアは、急に姿勢を正して背中を向ける。もう別れるという仕草だろう。
「・・・人の顔を見れば、私はその人の感情を少しは理解できるつもりです。貴方は、嘘をついてるようには見えなかった。だから、信用しましょう。私は、部長を迎えに行かなきゃならないので・・・これで。」
それだけ言い残して消えてしまうアントニア。
廊下には俺だけが取り残されたかと思ったが、意外と長い時間話し込んでたらしく、登校してくる生徒が窓から見える。
俺は、缶に残ったカフェオレを一気に飲み干す。
「・・・やっぱ、甘いよな」
でも、その甘さは俺の心労を癒やすようで、今だけは感謝している。

不運続き

「アイツが休むようなタマか畜生!!」
「机を叩くな。　今僕が作業中だったら、思いっきり君を叱っていたぞ」
昨日と同じく生徒会室。俺は昨日とは違う鬱憤をぶつけていた。
昨日聞けなかった分、今日こそは聞き出そうと思って、意気揚々とアイツの到着を待っていた。
だが、ホームルームが始まって担任が告げた言葉の中に、聞き流しそうになりそうなほど自然とこんな言葉があった。
『今日、真流さんはお休みです』
貧血が起こったかと思った。余りの衝撃に、脳に血液が行かなくなったのかも知れない。
詳しく担任にその訳を聞き出すと、体調不良だそうで。俺がどうかするような流れじゃなかった。仕方なく引き下がった。
だが、俺はまたも初動を見誤ったようで、周りが全員興奮気味にこちらを見ていた事に気づいたら、ああやっちまったんだな、なんて思ってしまった。
そこから待っていたのは昨日以上の地獄。なんで真流のことを気にかけていたんだなんていう誰かの質問が発端になり、鉄砲水の様に質問が流れてくる。三百六十度囲まれて、逃げ場なんてなく。一時間目が始まる時間になっても、教師は止めるどころか、流れに乗って質問を幾つか飛ばしてくるという職権濫用ぶり。一日限りの噂、幻想だと思っていた物が真実に近づくと言う喜びだったのだろうか。
その熱は数十分冷めることなく、冷めた後にも俺が歩くだけで噂の的になる。監視社会に一人だけ迷い込んだようで、一時も休まるときがなかった。好奇の目って言うのはこんなに辛いものだったのか。
昼休みになった瞬間、教室のドアが開いて他クラスからも生徒が流れ込んでくるなんてことが有ったが、それはもう全力疾走で生徒会室に逃げ込んた。そうして、幾分の時間が経って、斎木が生徒会室にやって来たことでこの騒動は一旦の終りを迎え、一時の安寧を迎えた

のだ。
　そんで、昼食も食い終わって、忘れかけていた怒りが湧き出した所で今に戻る。
「真流だって、体調を気遣う小間使いとか絶対居るだろイメージで言って！　体調を崩すとか有り得ねえだろ印象で言って！」
「印象で人を判断するとは君も変わったな。　他人の風評にあてられたか？」
「・・・わっかんねぇ」
　当てられてないか・・・と言われたら微妙になるな。俺は人一倍、他人の影響を受けないように生活してるように意識してるが、もしかしたら、がある。
　さては、知らんうちに・・・って。
「これ話の本題じゃねぇよ。　話題を掏り替えようとするな」
　俺は他人の影響を受けまくりだった。斎木に見事に話題転換させられそうになったのに気づいたのは幸運だったが、危なかった。
　当の斎木はと言えば、静かに笑っている。俺が困惑するのが少しツボに嵌ったらしい、巫山戯んな。
「そもそもアイツは昨日・・・」
　そこまで言って、俺はマズイことを言いそうになったと口を噤む。
「・・・昨日？」
「いや、なんでもねぇ」
　昨日、人を殺していた・・・なんて、口が裂けても言えないだろ。幾ら気分が昂ぶってるとは言え、言っていいことと悪いことがある。
　そもそもアイツはなんで・・・。一度出てきた思考を止められず、むしろ拍車が掛かる。
　あいつの昨日の殺し方・・・なんというか、慣れている、という印象を受けた。当然、あの男を殴り倒したのは俺だし、助けが来なかったらどう有っても死んでいた。だが、アイツがナイフを振るう瞬間、表情は見えなかったが、少なくとも動揺の色は感じられなかった。となれば、そういう状況に慣れているということに他ならない。
　真流は一体何をすれば、人を躊躇なく殺せるように成長するの

か・・・。それだけが気がかりだ。
「・・・なんなんだよ、一体・・・」
「それはこっちの台詞だ」
額を押さえて考え込んでいた俺は、斎木の言葉で我に返る。いつの間にか、俺は周りの状況が見えなくなっていたらしい。
「ああ、悪い」
自分でも気の抜けた返事だなと思う。抜かりない斎木は、俺を当然怪しみ、視線で俺を焼くんじゃないかって程に見つめてきた。
どうも俺は此奴の目が苦手だ。表情を見るのに長けすぎている面がある。味方なら心強いが、こうやって怪しまれていると、不気味で仕方がない。俺の思考が丸裸なんじゃないかという妄想さえ抱いてしまう。
そうして無意識に心の中で助けを求めていると、願いは通じて叩敲(ノック)の音が聞こえてくる。ドアが壊れるんじゃないかと思えるほど大きな音に斎木は心当たりがあったのか、不意に黙りこくって、斎木がドアを静かに開ける。話題が逸れたことに俺は心の中でガッツポーズを取るが、すぐにガッツポーズが驚きに変わる物が居た。
そこには、柔道部の顧問教師でもある体育教官、柴田信(しん)の顔があった。月輪熊のように大きな体格は、俺より二回りは大きいだろう。今の俺の例えはかなり的を射ていただろう。合成獣(キメラ)なんじゃないかと思えるほど、彼は毛深くて力強いからだ。噂の一つに、彼が小学生の頃に高校生に喧嘩を売り、簡単に勝ってみせたという。空恐ろしい。そんな見た目とは裏腹に、かなり快活な人間だというが・・・。
「おう小僧ども！　楽しんでるみてぇだな！」
そうらしい。一言目から分かった。というか、俺と柴田とは面識がないはずだが、そんな相手に小僧って呼べるか普通。俺は普段どおりに笑いは返せたと思うが、どうなっていたかは分からん。
「柴田先生。　今日は一体どんな用ですか？」
「お？　いやぁ、今朝ウチの小僧が用具を移動したみたいでよ。生徒会に話は言ってるかどうか確認しに来たんだ」
その話を聞いて、俺は思い当たるフシが有った。そして、斎木にも

有った。
　それは、さっき俺たちが昼飯を食べている間に、俺の方から通しておいた話だからだ。先程、俺が机を叩く直前に書類の整理は終わっており、既に不備は見つからないほどに作業は終了していたからだ。
　その旨を斎木が伝えると、柴田は心の底から嬉しいように笑い、斎木の背中を叩いた。
「いやぁ、さっすがお前だ！　有能すぎて笑えてくらぁ！　そんで、お前は誰だ！生徒会の奴じゃァねねぁ・・・。さては、テメェが噂の・・・」
　と、顎髭を撫ぜながら、柴田が怪訝そうにこちらを見つめる。生徒会室にもズケズケと入り込み、無礼という言葉は彼の辞書にはないと言わんばかりに俺の私的領域（テリトリー）に侵入してくる。正直、このままくっつきそうなほど近付かれたが、それよりも俺の名前を思い出すほうが先だったようだ。
「そうだ！　橙乃！お前が橙乃だろ！真流とコレだって噂の！」
「やめてくれ」
　小指を立てた柴田を、二つ返事で窘める。どうやら俺達が知らない間に随分と噂は飛躍したらしい。若しくは柴田がただ普通に勘違いしただけか。視界の端で斎木が吹き出して笑っていた。後で覚えてろよ。
「俺と真流の間には、そんな関係はない」
「ケッ、ツレねぇ小僧だ。そこはいっそ、認めちまうもんじゃねぇのか？　若しくは、勘違いを事実にしちまったりとか！　ハッハッハ！」
　そう大仰に笑う柴田。この男、無神経の国からやって来たんじゃないのか。柴田と初めて会話を重ねているが、コイツの言葉に恐ろしさを感じずにいられない。
　この男の豪胆さ・・・もとい、無神経さを更に実感する前に、早く帰って欲しいものだったが、矢張り上手くいかないらしく、俺についての話に花が咲いてしまう。いつの間にか生徒会室の椅子を一つ分捕り、学校生活について、私生活について、趣味や特技の話なんかに発展していった。それに対して、俺は多分取り留めもない回答ばかり積み重ねて言った。

その取り組みの中で、コイツはやっぱりデリカシーの無い男なのだと何度も認識し、ウンザリし始めていた時に、思い出したように柴田は俺の手の傷について触れた。
「そーいや、その手はどうしたんだ？」
「これか。　家でガラスの欠片で切った傷だ。こんな形になるなんて、どんな偶然なんだか」
そう俺は、多分表情に不自然さを出さないだろう嘘をのたまった。最初からコレを聞かれたらそう答えようと決めていたからだ。だって、割れるような頭痛の後にいつの間にかこれが有ったなんて言えないだろ。
柴田はもちろん、斎木もこの回答で納得してもらったようで一安心。斎木が納得してくれたんなら誤魔化しは完璧だったということなんだからな。
「完璧小僧も、案外抜けてるトコがあるんだな」
柴田が、心底驚いたようにこちらを見つめてくる。だが、笑いは崩さない当たり質が悪い。まるで、親か何か、自分より上の存在に慈愛の笑みを向けられてるようで嫌になる。
「完璧小僧なんて呼ばないでくれ。　俺は完璧ではないし、小僧でもねぇ」
それに対し、何処と無く思っていたことと違う否定をする。
その否定に対しても、かっかっかと言うような乾いた笑いをしながら、柴田は席を漸く立った。
「良いじゃねぇかよ。　兎に角、気ぃ付けろよ～？夜道を歩いてて、蹴躓いて腕を折っちまうなんて、そんなバカみてぇな事しねぇようにな！　ハッハッハ！」
そして、笑い声の残響を残し、柴田は廊下から出ていった。
その余韻に浸る間もなく、俺と斎木は電池が切れたように机に伏した。彼の扱いに困っていたのはどうやら斎木も同じだったらしい。疲労は共通し、腑抜けた梟のように魘された。
「なぁ、アイツ・・・なんでここに来たんだ？」
そう、心の底からの疑問をぶつけると、斎木は、分かるはずがな

い・・・と言うように首を振った。
「恐らくは、柔道部の用具の移動が本来の用件だったんだろう・・・。だけれど、君が居たことに対して、とてつもなく興味が湧いてしまった・・・って所だろうね」
そう言って、斎木は突っ伏していた体勢から立ち直る。そのまま俺の方に向き直った。その顔には冷や汗がふんだんに浮かんでいて、柴田に対する困惑が表層に現れていると言う印象を受けた。
そして、それは正しかったのだと俺は心の何処かで思いつつ、洞に声が響くように斎木の警告を物理的ではなく心理的に遠くから聞いていた。
「彼に見初められてしまったなら、お気の毒だがこの学校にいる内は彼からは逃げられない。柴田からの干渉は、それこそ彼が飽きるまで続くのだからね」
「それは・・・嫌だな」
俺は虚無的な笑いを浮かべたんだろう。その笑いの意味・・・詰まりは、日常的に良く見る感情である、不合理への絶望、その非常にライトバージョンを感じ取って、斎木も同じ笑いを浮かべる。コイツもそれの経験者なのだろう、俺がその詳細を問い質そうとするも、斎木の語りに先を越されてしまった。
「それに、あの柴田って男は、正直性に合わない」
「・・・お前に苦手な男が居るってのは驚きだな」
半分冗談、半分本気で俺は答えた。こいつのことを苦手な奴は多く居れど、まさかこの男に苦手なやつが居るとは夢にも思わなかった。だが、当の斎木は俺の感情なんて知る由もなく、日記帳に独白を記すように空中に言葉を零していく。
「柴田のあの快活さの根源は『余裕』なのだろう。・・・ああ見えて、裏表のない性格から、周囲からの人気は高い。だが、裏表のないという事は『表に出すほどの余裕に溢れてる』って事になる」
「・・・はは」
俺の笑みはきっと自分史上一番乾いていただろう。
あんなに筋骨隆々の男が、余裕に満ち満ちているとなったら、嫌な

予感はするだろう。フィクションだったら、間違いなく強キャラの言動だしな。苦手になる理由も何となく分かる。
「それとは別に、柴田はしつこいぞ？　まぁ、災難だったな」
「勘弁してくれよ・・・最近の俺は災難ばっかりか・・・」
そんな俺の苦悩は、誰かに理解される事もなく消えていった。

今日は、余り実入りのない日になった。
真流から、昨日の全ての真実を聞き出すつもりで居たんだが、結局肩透かしを食らった上にストレートでパンチを見舞われたような不運の繰り返し。
家からバイト先に行くまでの道で、何回ため息を付いたかわからない。
「と言うか、なんで俺がこんなに不運な目に遭うんだ。　悪いこと何もしてないんだがなぁ・・・」
実際にはしてるんだが、気分的な問題だ。天罰と言ってしまえばそれまでだが、そこを認めたら自分の中になる何かが壊れる、ような気がする。
そんな矛盾に、また一つ溜息をつくと、階上に居る先輩から怒号が飛んでくる。
「何溜息ついてるんだ！　早く運んでこい!!」
「はーい！」
これ以上先輩を怒らせる前に、俺は自分の荷物である箪笥を持つ。
俺は、金を稼ぐためにバイトを家でのモノも含めれば結構な数持っている。生活費を稼ぐため、と言わないのは親父が残した遺産でも十分食い繋げられるからだ。労働は半分趣味で、今日の引越のバイトもその一つだ。肉体労働を必要とするアルバイトは、一概にして収入が良く、鍛錬にもなる。即ち一石二鳥だ。特にこの引っ越しのバイトは、俺は大きな家具を一人で持てる逸材として、期待の星なんて扱われてるらしい。実際、今日の仕事もや最近出回ってる中で一番大きい冷蔵庫、洗濯機、箪笥などを持たされている。どうやら大家族がやってきたらしい。流石にそんな家具を１０階以上に階段使わされて運

ばされるなんて思わなかった。魔術の特性上鍛錬を欠かしたことはないが、ここ最近で一番の重労働だったかも知れない。因みに、先輩は三人がかりで家具を持ってる。

そして、一番の大荷物だった戸棚を運び終わったら、汗だくの体が悲鳴を上げて、肺が空気の循環を精一杯始める。

「がはぁぁぁ!! コレで終わりです!」

「おう、お疲れ様。 俺らの三倍働いたんだからマジで疲れたろ。今日は奢ってやる」

流石に憐れまれたらしい。 じゃぁ漬け込むとしよう。

「駅ビルの焼き肉で。 上焼肉コース頂きます」

「お前・・・容赦ねぇな・・・」

だが、否定されなかったのは了承という証拠だ。彼処は学生には手を出し辛い価格設定なので、偶にしか行かない店だ。最後に行ったのは、斎木を抜いて定期試験で学年一位を取った時だから・・・半年前か。まぁ、今日は筋肉が疲れ果たした事だし、これぐらいは許されるだろう。

その疲労困憊の俺達に、依頼主の女性が近づいてくる。

「お疲れ様でした。 こんなものしか出せませんが・・・」

そう申し訳なさげに出されたのは、湯呑に入れられた麦茶だった。湯気が立っていない所を見ると、冷たい方だろう。というか、熱い方であってたまるか。

俺は湯呑を掴み、掌の熱が奪われるのを感じて心の底から安堵して、中身を一気に呷る。疲れ果てた体に冷たい茶は良く沁みて、体の熱が一気に引いていく感じがある。自然と唇の端が釣り上がった。

「まさか、エレベーターが使えないなんて思わなくて・・ご免なさい。特に・・・貴方には、申し訳ないことをしました」

その言葉が、俺に対して向けられていると気づいたのは、数瞬経った後だった。俺は別に疲れ果てたことに対して鬱憤が溜まったわけでもないし、構わないんだがな。

「良いですよ。 体、鍛えられるんで」

そう言いながら、固まった関節を伸ばす。物を長い間持っている

と、自然と全身の関節が痛むものだ。バキバキと幻聴が聞こえてくるような気がする。
それで、伸ばしついでにこの部屋を見ておくと、マンションの一室とは思えないほど広々としているのが分かった。うっすらとそうではないかと思ってはいたが、改めて見ると、この市の中でも一二を争う程度の広さなのではなかろうか。
「そういえば、貴方はどうしてこんな半端な時期に引っ越しを？」
閉じた扉の向こうから先輩の声が聞こえる。言われてみりゃ、12月って半端だ。年末年始の方がそれっぽいのではなかろうか。質問に対する返答が聞こえてくる。
「主人が、この辺りに転勤になりまして・・・。主人は拒んでたんですけど、家族全員でお願いして、全員で引っ越すことにしたんです。それで、このマンション・・・いい条件だった割に、凄く安かったから」
「あぁ～・・・そりゃ、そうかもですね」
先輩が、こりゃぁマズイとばかりに言葉をつまらせる。　きっと扉の向こうでは、不思議そうに先輩を見ている女性の姿が見えてるんだろう。
ここは、俺が助け舟を出してやるか。俺は扉を開けると同時に口を開く。
「最近、物騒な事件が多いんですよ。この市は。この3日間だけでも、メッチャクチャな事件が結構有ったんです。多分ニュースでも触れられてると思いますけど・・・
1つは、粉砕事件。人体が、何か巨大な物に殴打されたように、粉砕骨折や内臓破裂したような姿で発見される事件です。まるで軽トラにはねられたみたいに」
この事件の真相は俺なんであるが、隠しておかねばならない。世間一般では、犯人不明ということになっているので、それを伝えておく。
「2つ目は、人斬り事件です。1つ目の事件と何が違うのかと問われれば、死因が違います。主要な血管を斬られたことに拠る出血性ショック死ですね。まるで日本刀に斬られたように、バッサリって奴ですよ」

当然、俺が引き起こした物じゃない。当然、これの犯人も速く見つけてやらねばならないだろうが、隠蔽が兎に角上手いのか、まだ尻尾を掴みきれないでいる。だが、女性の血の気が引いてるのを見て、ああやっちまったと思っても既に遅し。じゃぁ、ここまでにしておこうか。

「そんで、3つ目は・・・ああ、コレは別に事件って訳ではないんで安心してください。すんごい雷が降ったって奴ですよ。今年は特に酷かったんですよ。　まぁ、こんなのに象徴されるように、この街じゃ良く不気味・不可思議な事が起こりに起こる。だから、部屋が思いっきり安くなるんですよ。言わば、都市レベルでの事故物件ですよ」

「そうなんですか・・・」

と、一先ずは納得してくれたようで何よりである。

正直、これらの一端は裏道での犯罪の多さにあるんだろうが・・・俺が越してきた頃には既にこんなんだっただろうし、多分この市が無くなるまでは治らないものなんだろう。ならば受け入れて生きるしか無いのか?それは違うだろ。だから俺は、こうして・・・。

そこまで考えて、空気が重くなってることに気がづいた。女性の方なんて、この街に引っ越してきた罪悪感なり失敗からの無念なりで、泣き出しそうだ。ここは、何とかして空気を変えなければ。

「でも、この街は良い物も多いんですよ。漁港ではカニや鯛なんか良く上がりますし、冬には、車で15分も走らせればスキー場に行ける。あの荒野だって不気味だけど、慣れちゃえば良い休憩スペースになりますしね～」

そう言って、俺はカーテンを開けて荒野の方向に手を向ける。町外れには荒れ果てた野原がある。別に悪い土地ではないはずだが、なぜか背の低い草しか映えなくて、老人たちは祟りだなんだ言っているが、そんな事を覗いてしまえば特に悪い場所ではない。女性も事実、息を呑んで喜んでいた。

だけど、俺はそれどころじゃない。俺は別の理由で息を呑んで、不可解な事実に驚きを隠せずに居たからだ。

「・・・あんな建物、有ったか?」

驚きの余り、敬語が取れる。だが、そうなるのも無理はないだろう。
見慣れた荒野に・・・つい1月前も、そこで寝転んだ場所に。まさか、巨大な建造物が建っているとは、夢にも思っていなかったからだ。それは、王城と言ったほうが良いぐらいの威容を持っていた。この街には、多くの富豪たちの屋敷があるが、その全てを合わせて漸くあの巨大建造物一つと大きさで張り合える程度だろう。
昨日の夜ビルから見下ろした時、あんな建物は見つけられなかった。単純に俺が見落としていただけか・・・?それなら良い。だが、あれが一夜にして作られたものなのか、若しくは相当注意しないと見落としてしまうような不思議な力が宿っているのか。そのどっちかだとしたら、あの建物は相当危険な代物だ。
「・・・どうしたんだ、橙乃」
「先輩、あの野原に、あんなモノ有りましたっけ・・・?」
そう言って、俺は恐る恐るその建物を指差す。多少指が震えていたかも知れないが、そんな事関係ない程度の大きさの建物だ。当然分かるだろう。
だが、俺に返ってきたのは、より悪い方の答えだった。
「あんなモノ・・・? 何のことだ」
「え? いや! アレですよ! 貴方も、見えてるでしょう!?」
俺は、その答えのことを信じきれずに取り乱してしまう。
だが、女性は俺のリアクションを見て、さっきの話の余波も有ってか涙を浮かべてしまう。先輩は、矢張りあの建物の事が見えずに居るのか
「お前・・・疲れてんだよ。 さっさと焼肉食って休もうぜ」
なんて言って、俺の事をなだめる始末。
だが、なだめられて却って冷静になったからか、俺はある言葉を思い出していた。どうせ夢の中だしと忘れかけていた言葉だったが、こうなってしまえば、目を背けてはいられない。
〝君の夢を追うというのなら、街外れの荒野に来ると良い〟
その言葉が、脳内に響き渡るイメージのまま。 俺はとても遅れた返事を浮かべた。

ああ、望む所だ。　と。

開戦、そして参戦

夜の街に繰り出す。正確に言えば、焼き肉で時間を費やして、結果的に夜になったということであるが。

「しっかし、お前・・・」

横を歩く先輩が、俺に対して話しかけてくる。全身を舐め回すように見てから、不満げにつぶやいた。

「前から言ってるだろ。　その殺し屋みたいな格好なんとかしろって」

そう言って、コンビニ袋から割り箸を取り出して俺のことを指す。指し箸って言ってれっきとしたマナー違反であることをツッコみたくなるが、そこは話の本題ではないので黙っておこう。

殺し屋みたいな格好、と言うのは俺の全身黒のコーディネートの事を表しているんだろう。確かに、くたびれたコートに加えて、黒手袋・黒革靴を着用してるなら、闇に紛れる殺し屋と思われても仕方ない面はある。先生が言ってた、魔術師殺しという人間の姿はこんな感じなのだろうか。

しかし、これは仕方ない。俺の魔術礼装がこうなんだから、最早外しようのない服だ。なんなら、制服の上からでもコレを着たいぐらいだし、事実手袋と革靴は学校に行くときも着けている。

「いやぁ、これで落ち着いちゃったんで。　変えろって言われても」

だから、俺は屈託のない笑顔を浮かべて頭をかきながらこう言うしか無かった。

「はぁん。　まぁ良いや。似合ってねぇわけじゃないしな。　そんじゃ、またな」

それを別れの挨拶として、俺は先輩と別れた。この先輩は普段厳しいが、妙な所で空気を察してくれるところがあって助かっている。今は、多分俺から別れを切り出したい雰囲気を感じ取ったのだろうか。

俺は、あの場所に向かう。あの空から不可思議な体験を目の当たりにした野原に。

一夜にして突如として現れた神殿。豊臣秀吉が墨俣城を作ったと

か、そういう伝説をも優に超えた存在であるのは俺にでも分かる。何せ、アレは神殿だった。神がおわす場所がこの世界にあるならば、其処を置いて他に無しと確信がおけるほどに。そんな建造物(モノ)が短い間に建てられるなんて、俺の知らない力が働いてるとしか思えない。

そりゃ、放置してる方が遥かに楽だ。だが、アレを放置するのは俺の本意(ほい)ではない。

それは、アレが悪の巣窟である可能性が高いからだ。唯でさえ犯罪が多い街。魔術師がこの都市を牛耳ろうとする可能性は大いにある。それが内側から生えたものか、外からやって来たものかは分からないが。

例えアレが悪性の物でなかったとしても、強大な力を持つ人間の仕業であることまでは間違いないんだ。事前に力を削いでおくぐらいの事はして然るべきだろう。

要は総括すれば――――。

「近所迷惑だから注意しに行かなきゃ、って奴だな。　あの呼び声の真相も確かめなきゃならん」

成る程、こうして言葉にすれば、如何に理不尽な事実であろうと忽ち胸の奥にしまい込めてしまう。自己暗示ってのは便利な代物だ。

そうこうしている内に、野原の端にまで辿り着いた。そこは、言わば街と野原の境界線上であって、冥界の門とも言えた。その線を踏み越えようとすると、何処と無く悪寒が走るのは気のせいじゃないだろう。ちょっとの覚悟を決めて、一気にその線を超えると、眼前には街灯無き野の、宝石を鏤(ちりば)めたような星空が広がっている。それが神殿と合わさる姿は、幸福感を感じるほどの神秘的な印象を与えた。

感心している暇はないと、自分を喚起する。　どの道俺は進む他の選択肢を用意してない。

クラウチングスタートの姿勢を取る。　そして、足に火薬を詰めるように魔力を流し、一気に爆発させる。

加速度的に俺の速度は増して行き、代わり映えのしない野原の風景のなかで、少しずつ近づいてくる神殿が見える。この野原では、遮るものは何もない。このまま突っ込んでしまおうかとも思っていた。

だが、遮るものはあった。いや、生まれてきた。最初は俺の前の地面が、紫色に腐ったと思った。しかし、それは変化の前兆であって、腐食そのものが目的ではなかったらしい。腐食した地面から這い上がるようにしてそれは現れる。
それは、蛸のような触手を持った、巨大な生物だった。生物としか表現できないのは、俺が今までのどんな情報にも見ることが出来なかった生物に出くわしていたからだ。
「ハッ、学会にでも持っていけば解析でもしてくれるかな？」
半ば現実逃避気味な俺の台詞を解さない・・・若しくは、返答の必要がないと認識したのか、触手を伸ばして襲い掛かる。その生態は杳として知れず、俺を殺すのか食うのかさえ分からない。
だが、唯一つ分かったことがある。　此奴は友好的じゃない。ならば、交戦だ。
俺に向かって進む触手を、手刀で遮る。　魔力によって強化された腕力等は、タコの触腕ごとき目じゃない。衝撃が伝播して、触れた所から包丁で捌かれた様に真っ二つに触腕の内一本を切り裂かれる謎の生物。コレで少しは懲りたろうと思って少しの安堵を得たが、残念なことにその生物は触腕を一本切られた程度じゃ止まらないらしい。地面に接している、移動用の触手を器用に使ってにじり寄って来る姿は、恐怖の感情を抱かせた。
「こんなのに気取られてる場合でもねぇのにな・・・！」
しかし、俺は背後をひと目見る。さっき俺が走り抜けたはずの地面の上には、俺の目の前に居る化物がぞろぞろと横隊を組んでいた。その数を数えようとしたけれど、二十を超えていそうなのでやめる。
兎に角、やらねばならないことは決まっている。腕を切り裂くだけで倒れぬというのなら、胴か頭か・・・そこにダメージを与え、殺すのみ。
魔力で強化した拳で、生物の触手を掻い潜る。その過程で触手を数本吹き飛ぶが、お互いそれを気に留めもしない。
そして、本体と思しき箇所・・・触手の根本である胴体に腕が届く所に辿り着いたとなれば、俺は何も考えずに正拳でそこを突いた。

手袋(グローブ)に掛けられた硬化、肉体全体に渡る肉体強化の一撃には、人外の此奴でも耐えきれるものではなかったらしい。胴体による破壊で、向こう側の神殿が見える程の大穴が開いている。

「そんなに強くねぇようだな。　だが、数がなぁ・・・」

そこまで呟いてたが、背後から触手が接近してきているのを感じ取ったのでやめた。同族を殺された怒りでもあるのか、それとも何も感じないからこそ攻撃をやめないのか。

闘いは数だという格言を体現したいのか、生物と生物の隙間が新たに生まれる生物で埋まる。それを、突き、蹴り、体当たりで片っ端から崩していく。

常に生み出される触手生物を、それを上回るスピードで破壊していくのは、肉体の強化を以てしても骨が折れる作業だったのは言うまでもない。

そこから逃げ出そうとして移動しながら倒していったとしても、触手生物は見た目以上にスピードが早い上に、生産される場所に隔てはなく、何処までも追跡されるような錯覚に負われる。

それでも、やめることは即ち死に直結すると信じて抵抗をやめなかった。

その甲斐あってか、二十分ほど殺戮を繰り返した時、最後の一体を倒したのだ。

俺の体は、触手生物の紫色の体液で濡れて、触手の欠片が幾つもこびりついていた。生理的に嫌悪感を抱くタイプの欠片であって、即、手で叩(はた)いた。

「こんな気持ち悪い刺客を送って来んなよな・・・」

地面に転がっている触手の欠片は、砕いて五分が経ったぐらいでは蠢動をやめない。トカゲの尻尾でももう少し根性がないだろうに・・・未練がましいのか。

しかし、倒したのは事実だ。恐らくコレを生成してる魔術師のほうが息切れしてきたんだろう。ならば、今の内に突撃するしか無い。

もう一度進撃しようと、神殿の方を向き直ったときだった。　今度は、別の生物が立っていた。

さっきと違うのは、そいつは人の形をとっていたことだ。剛毅な女性・・・という第一印象だったが、それ以前に俺はその完成度に驚かされる。

そいつは、人間として・・・いや、生物として頂点に立ち得る者だと、直感で感じ取ってしまった。魔力でさえ、その女は破裂しそうなぐらい満ちていた。

何処かの企業のトップか？　いいや、皇族の誰か？　何処か違う国の王かも・・・。　だが、記憶を振り絞っても、その顔に合致する人間が居ない。

いや、それ以前に、そこにはさっきまで誰も居なかったはずだが・・・。

「〝闇〟のマスター。　サーヴァントも引き連れずに何用だ」

女は、静かに、だがよく通る声で言った。　声色から、二十代か三十代ぐらいだろうか・・・と推測できるが、それまでだ。感情だって、確認できるのは唯一つの静かに燃える感情だけ。

僅かな敵意。　それだけを感じ取れただけだった。

そして、それ以前に俺はその女が何を言っているのかが分からなかった。

「マスター？　サーヴァント？　一体何の話だ！　そもそもお前は何者だ！」

「ほざくな。　貴様もマスターであり、ここに立っている以上、既に開戦の前口上は成立している」

「開戦!?　待てよ！俺はただここに来いと――――」

女の手には、何処から生み出したのか剣が握られていた。刃渡りは１メートル、しかも横の大きさも１０ｃｍ以上は有ろうかという大剣（グレートソード）は、純金の飾りで包んだ彼女の手に、不思議ととても似合っていた。

そして、馴れた手付きでそれを振り回した後に、静かに構えて、剣の切っ先をこちらに向ける。その様は、それ以上余分な口を開くなと脅されているようだった。

「海魔をそれほどまでに打ち倒しておいて、今更及び腰は通じぬぞ。

構えろ。人間を相手にする以上、その程度の猶予は与えてやる」
「・・・嘘だろ」
それだけ言うのが精一杯だった。
だって、此奴には敵う気がしなかった。剣を持っているとか、予想外の客に俺が動揺しているとかそういうレベルの話ではない。
此奴は生物として完成されていた。
立ち向かえば死ぬ。
立ち止まれば死ぬ。
背を向ければ死ぬ。
そんな奇妙な確信。それだけが俺を支配した。何を言っているのかが解らない。だが、こここそ生死の天秤の上であることは理解できていて、その皿はどうしようもなく死の方向に傾いているのも判っていた。
俺は、恐怖とは裏腹に、構えを取る。徒手空拳で戦うことを前程した、俺の実力が最も発揮される構えであった。
「名前だけ、教えて貰おう」
自分を殺す相手の名前だけ知ろうというのか。俺の口から飛び出てきたのは、拒否の言葉でも命乞いでもなく、質問だった。
その言葉の意図を相手がどう取ったのかは知らないが、女は口を開く。
「真名は明かせん。　私の事は、ライダーと呼べ！」
ライダー、そう自称した女が言い終わると同時に、女は剣を振った。
振ったと言うのは、そうであったのだろう。と言う話だ。　実際に俺の目に映ったのは、振ったという認識より、知らない間に移動した。という認識のほうが先だった。
過たず俺の首を狙った大剣は、寸毫ほどの差で反応した俺が回避していた。が、それだけだ。
無理に背を後ろに曲げて回避したからか、俺は直ぐに移動出来る体勢ではない。だが、ライダーは華麗に体勢を変えて俺の体を真っ二つにしようと振り下ろされた。
それも、やっとの思いで手で受け止める。硬化の魔術が掛かった手

袋は、剣の刃も受け止められる。一瞬でも止めれば、剣を奪い取って形勢を逆転できる。
その思考は甘かったのだと思わされたのは、手袋で剣を止めた後だった。剣は止められた。だが、それは刃によって胴と脚を分けられなかっただけの話。
女の膂力は、俺の想定を遥かに超えていた。精々地面に叩きつけられる程度だろう。その想定の中で受け止められた剣の勢いは、俺の体を落ちるよりも速く吹き飛ばした
打ち付けられた勢いで地面に罅(ひび)が入る。ここが月面だったなら、俺が落ちた衝撃で新たなクレーターが完成していただろう。
「デタラメかよ・・・」
その言葉を置き去りに、ライダーの剣が迫る。一撃一撃が即死に至る場所を切り裂いてくるのは理解できた。今回はまるでギロチンのように俺の首を落とそうというのだろう。
さっきの衝撃で、全身にダメージが行き渡っている。指一本動かすのさえ至難の業だ。腕は最早魂が抜けたかのようにぐったりして動かない。
だが、負けるのは我慢ならん！　俺は、負けてなるものかと腕を精一杯動かし、迫る刃を手袋にぶつけさせる。
衝撃を与えられた剣は軌道を変え、俺の頭を掠って地面を穿つ。その衝撃で、数メートル先まで斬撃痕が走るが、お互いそれを意に介する事はない。
俺は骨に言うことを聞かせて立ち上がる。　ライダーは、一度動きを止めて俺を静観していた。　あんなに人間離れした動きをしていたにも関わらず、ライダーの肌には汗一つ浮かんでいない。
化物だ。　その言葉を出さぬべく呑み込んだ。弱音を吐いた所で状況は好転しない。
「驚いたな。　その手袋もそうだが、貴様の根性もだ。よくぞ私の剣を受け止めた」
「お気遣いどうも・・・」
こっちは全身を打ち付けた影響が残っている。　骨も数本折れて

いて、口の端から出てきた血を拭うだけでも我慢しきれぬ痛みが走る。
肉体強化を使いすぎた。歯車が噛み合わない機械のように、動きが不自然になる。網膜が出血しているのか、視界が赤い。
だが、ライダーは立っている。　だから俺も立つ。毅然と、何もなかったように。
「貴様を只の人間と思うのはやめよう。　その拳を当てられぬとも限らないからな」
ライダーが言った。　その言葉は嘘ではなかったようだ。
全身から溢れていた、カリスマとしか表現できなかったような威容が増す。雰囲気が物理的な力を持って襲い掛かるかのように、俺を捉えた。
恐らくは、さっきまでの動きを凌駕した物で俺を圧倒するんだろう。　泣き言を言いたい気分にもなるが、ぐっとこらえて構えを取り直す。
その様を見たライダーが、僅かに口の端を吊り上げた。今まで全く笑わずに居た分、その笑みは赤い視界の中でも印象的に映った。
アレは王の笑みだ。それも、単に腐敗した権力の中の王ではない。人の上に立つべくして立つ人種の中でも、後世において大王・賢王と呼ばれる人種の表情。
人の強さを見たり、と笑みが言っているようだった。
「・・・英雄、なのか」
俺は、誰にも聞こえない声で呟いた。その言葉を聞いたのかは知らないが、ライダーは遂に踏み込み、剣を振るう。
その剣を止める。止めた拍子で全身が軋んだが、最早軋む程度の痛みでは俺は止まらないらしい。俺はライダーの手を叩き、剣を叩き落とす。
その勢いを止めるべきではないと、俺はライダーの首を掴み、もう片方の手でライダーの胴体を貫手で貫かんと全力で振り抜いた。
だが、届かなかった。　ライダーは笑っていた。
次の瞬間、俺の体は独りでにライダーの体から離れていた。

体が揺れる。視界が揺れる。既に焦点の合わない視界の中心で、突き出されたライダーの足を見て、自分は腹を蹴られたのだと、ようやく察しがついた。
思考が回らない。蹴りと共に、俺は思考に必要な何かを消し去られてしまったのか。
「残念だ。貴様が此処に来なければ、間違いなく強者だったろうに」
その言葉が、何処か遠くから響くように聞こえる。谺(こだま)のようだ。
剣が振るわれる。その光景をスローモーション動画の様に眺めながら、俺は思考を繰り返していた。
嗚呼、俺は死ぬのか。　良いじゃないか。人を殺し続けた人生だ。理不尽な死が待ち受けていても不思議ではない。
この女は、人間じゃない。化物だ。ならば負けるのも仕方な――――。
いいや。仕方無くない。
俺は負けない。負けてはならない。死ぬのは我慢できるが、負けるのは我慢ならん!。
負けたなら、正義の味方にはなれないのだから!
「あああああああああああああ!!」
意味もなく言葉を叫ぶ。　自分の生の確認か?ならば、尚の事張り上げよう。死ぬ時、それはライダーの負けることに他ならない。
剣が迫る。俺も拳を構えるが、遅すぎる。このままではダメだ。俺の首が刎ねられるのがどうしようもなく先になる。
負けたくない、負けたくない、負けたくない!!
奇跡よ起これと、身勝手に願いを託す。俺の拳が届くまでいい、俺が勝てるように、どうか。
無情にも時間は簡単に流れ、剣は俺の首に届く。　空を切るのと同じ様に、次の一秒で俺の首が切れてる姿を幻視する。
幻視を振り払う。　悪い夢だと見なかったふりをする。
だが、簡単に〝次の一秒〟は訪れて――――。
俺の拳は、ライダーの顔面を捉えていた。　余りに弱々しく、殴っているというより触っているという言い方のほうが正しかったかも

知れないが。
俺の首が繋がっていることに安堵して、次にその理由を思案する。だが、その答えは後ろから帰ってきた。
金属と金属が擦れ合う音。　鍔迫り合いの音だと気づいて、振り返った。眼の前にライダーが居るのは判っていても、その確認のほうが重要だと、第六感が告げていたからだ。
そこには、聖女が立っていた。ライダーも魅力があるのは間違いない。だが、それは人を従えるのに必要な魅力だ。
この少女が持つのはその類ではない、人を惹きつける魅力。カリスマには違いないが、これは深窓の令嬢、聖なる巫女が持つに相応しきもの。それだけに、細剣（エストック）は不釣り合いかと思われたが、剣は彼女の掌こそ自分の棲家だと言えるように、見事に似合っていた。
絢爛な少女が口を開く。　その声は、自動琴（オルゴール）のように静かであったが、隠しきれない激情を感じ取れた。
「〝光〟のライダー。　サーヴァントでありながら、戦争に参加していない無辜の民に手を上げることは、看過できることではありません」
少女が細剣を振るう。目にも留まらぬ、なんて表現が良く似合う熟達さで、ライダーの大剣が簡単に押し戻される。
その気配に気圧されたのか、ライダーも眉を顰めて動こうとしない。
「・・・何者だ」
俺の代わりにライダーが口を開く。
「裁定者（ルーラー）のサーヴァント、と言えば十分でしょう。　聖杯大戦、という混沌の舞台において私が召喚されるのは当然の摂理です」
ルーラーと名乗った少女がそれだけ言うと、こちらに目を向けた。
「貴方には忘れ難い経験でしょうけれど、このまま立ち去って貰います。そして、今夜私達に出会ったことを二度と思い出さない事です」
「は？　いやいや、俺はこの先に用が有るんであって・・・正直マスターとかサーヴァントとかはサッパリだが、それでも行きたい場所なんだ。そのためには、このライダーとやらをどうにかしなきゃならんか

らな。お前が何者か知らないが、邪魔するなよ」
　そう言ってライダーと向き直る俺の腕を掴む少女(ルーラー)。不機嫌そうな目で見てきてる辺り、彼女の胸中が伺えるというものだ。
「無関係の人間は立ち去りなさい。　これは貴方の為を思って言っているのです」
　そう来ると思った。
「お断りだ。俺はそもそも無関係じゃねぇ。　分かったらお前こそ立ち去れ」
少女(ルーラー)の目を見て反論する。　お互い睨み合う形で数秒経った後、どちらがとは言わず、堰を切ったように互いに文句を垂れ流した。
「物分りの悪い人ですね！　先程死にかけていたのが分からないんですか!?私達は英霊(サーヴァント)なんですよ！人間が歯向かった所で結果は知れてます！」
「従者(サーヴァント)がなんだか知らんが、兎に角邪魔すんな！　お前に入り込まれると迷惑なんだよ！」
「私が介入しなければ貴方が死んでいたんです！」
「余計なお世話だ！　自分から勝手に入り込んできた癖に偉そうに小言を垂れるな！」
　やいのやいのとお互いに、子供っぽい文句をぶつけ合う。きっとさっきまで興奮状態だったから、自制が効かなくなっているんだろう。だけど、今更止まる気にもなれない。
　こんな事を数十秒続けただろうか。視界の端で、しびれを切らしたライダーが剣を構えているのが見えた。
「・・・他人の痴話喧嘩を聞いている趣味もないのでな。　貴様等が仕掛けぬと言うなら、こちらから行くぞ」
　ライダーが剣を振るう。
　だが、俺たち二人の思考回路はここに来て漸く共通の結論に至ったらしい。
　互いの敵意の矛先は、自分の目の前に居た相手から、俺たちの口論に水を差した不届きへと。
「邪魔をするな！」

「邪魔をしないでください！」
その言葉は全くもって同時であって、少女の剣はライダーの胴に一本の切れ込みを入れていて、俺の拳はライダーの顔面に当てられて重要な物をゆっくりと潰していく音を立てている。
俺の体は既に痛みを消し去っている。　身体強化も最大出力でぶっ放せる。失った魔力・体力までは戻らないが、その程度は些末な問題だ。
お互いの事を一瞥もせずに、互いに同じ言葉を呟く。
「俺の敵だ」
「私の敵です」
「・・・殺すのは？」
「殺せないでしょうが、殺さないでください」
「アイツを倒すのは俺の仕事だ。　俺を殺そうとしてきたんだからな。この先に用があるのも俺だ」
「彼女を倒すのは私の役目です。　裁定者（ルーラー）たる私に剣を向けた以上、彼女を追い払って威信を見せなければなりません」
ここでまた、お互いが敵同士だと再認識する。
「・・・なんなんだ。　貴様等は・・・」
ライダーが立ち上がるのがお互いの視界に映る。　我先にと走り出し、ライダーを倒さんと己の武器を競わせ合う。
少女（ルーラー）の剣技は見事なもので、確かに唯一無二のものだ。ライダーの剣技が力強さを前面に押し出したものならば、少女のはまさしく華麗さに置いて右に出るものはない。
しかし、俺でさえ負けてはいられない。身体強化による攻撃で必死に食らいつく。少女（ルーラー）の攻撃の隙間を突いて、ライダーにダメージを蓄積させていく。
体が少しずつ錆びていくのを感じる。身体強化の使い過ぎだ。このまま使い過ぎれば、二度と使い物にならなくなるかも知れない。
だが、この少女に負けるのは我慢ならなかった。　既にライダーの事なんて眼中にない。アレは俺達の敵ではない。防禦（ぼうぎょ）に精一杯で、俺達の波状とも言える攻撃に為す術がないらしい。

「邪魔をするな！　こいつは俺の敵だ！お前には関係ないだろう！」
俺は口を開く。　目下俺の敵は、横で剣を振るってる少女だけだ。
「いいえ！　この者は裁定者（ルーラー）たる私に手を上げたのです！必要最低限の応戦は必要不可欠、私の威信に関わります！」
少女が応える。　相手にとっても認識に相違はないらしい。
拳、剣、拳、剣。　その繰り返し。
思考回路は互いに同じらしく、俺が少女が次にどう動くのが分かっているように、少女も俺が次にどう動くか判っているようだ。
それは、自分が少しでもダメージを与えようという思考のもとに成り立っていたが、恐らくはこの動きは傍から見れば完全なコンビネーションを組んでいるようにも見えるだろう。それがまた我慢ならなかった。その鬱憤をライダーにぶつける。
「あのなぁ、支配者（ルーラー）だかなんだか知らないが、お前が手を出すな！」
「なっ！　貴方こそ何故私の戦いに手を出すのです！　これは人間には速すぎる舞台です！早急に撤退の選択をなさってください！」
「はっ！　人間には速すぎるだと!?事実、俺は手を出せてるだろう！お前の邪魔さえなければもっと力を出し切れるんだ！解ってるだろうからさっさと下がれ！」
「何を勘違いなさっているのですか!?　〝光〟のライダーは私の攻撃に対して防御していて、貴方への注意が薄れている間に攻撃しているに過ぎません！言うなれば私のおこぼれを拾っている形！しかし、私は人間に対して危害を加えないよう、最大限気を配ってやっているのですよ!?　貴方こそ下がった方が良いのでは!?」
互いの話は平行線。　決着が付く事はない。
次第に互いの判断材料は、思考から本能になっていく。
少女（ルーラー）がこう動く。だからそう動けば、少女（ルーラー）は・・・。　その、詰将棋のような思考を、絶え間なく動く戦場の中で引っ切り無しに。
既に視界に映るのは、押し込まれるライダーと、自分の拳と少女の剣のみ。　その状況を打ち破りたかったのか、ライダーが苦し紛れのように叫ぶ。
「なんなんだ・・・なんなんだ！　貴様等は！」

その言葉に引き寄せられるようにして、思考が舞い戻る。嗚呼そうだ。根本的な疑問を忘れていた。

ライダーの腕を掴む。そのまま投げの姿勢を取り、地面に叩きつけた。その過程の中で、少女（ルーラー）が剣を振り、ライダーの胸部に一際大きな傷を与える。

意趣返しのようにして、叩きつけられたライダーの衝撃で地面にひびが入る。だが、そんな事は意にも介せず、俺達は互いに向き直る。

少女は俺に剣を向ける。　俺は少女に指を指す。

同時に飛び出てきたのは同じ言葉。

「何なんだお前は！」

「何なんですか貴方は！」

お互いの名前も知らぬまま。　俺達はライダーとの戦いを終わらせていた。

レクチャー　―前―

「で、状況を説明してもらおうか」
　正座が実に様になっているが、真流が言う。笑っているのが却って怖かった。まるで彼女の目の周りだけ濃い影がさしたように、彼女の暗澹とした感情を感じられたからだ。
　俺の隣に座る少女も、無言で威圧してるのが感じられる。剣と少しの防具さえ取り除けば、まるでドレスを着た令嬢のようにも見えるだろうが、さっきの戦いぶりと、今飛ばしている剣呑な視線には優雅さとは無縁の恐ろしささえも宿っている。
　深夜の屋敷。真流の家なのかは知らないが、黒いスーツに身を覆った男たちが大勢いる、まさしく極道のテンプレートの此処が、彼女の家だと信じたくない気持ちが一抹残ってるが、否定されることになりそうだ。
　俺は二人の視線に押し潰されそうになりながら、こうつぶやくのが精一杯だった。
「どうしてこうなった・・・」
　その経緯は、一時間前にまで・・・つまりは、俺達が荒野に居たときに遡る。
　ライダーを地面に叩きつけ、俺らが『お前は誰だ』という疑問を同時にぶつけていた際、近くで息を呑む音が聞こえた。
　それに二人同時に注目すると、そこには俺にとって見慣れた顔と、見知らぬ男が立っていた。
　真流が従えているようにして立っていたのは、短槍を肩に担いだ色男と言うべき背の高い男。だが、ライダーと呼ばれた女性と同類の気配を感じて、俺はまた一つ身震いを重ねる。
「〝闇〟のランサー・・・ですね。そこに居るのはマスターと見受けられます」
少女(ルーラー)が告げた。　その発言に対して、二人は相好を崩した。
「そっちはセイバーだね？　いやぁ良かった。実は、闇のサーヴァントとマスター探しに精を出さなきゃならないかと困ってたところな

んだよ。幸先が良さそうで助かる」
「セイバー？　いいえ、私は裁定者（ルーラー）ですが・・・」
「え？」
「え？」
　二人が噛み合わない会話に首を傾げ合う。俺は置いてけぼりになったが、これ好都合とライダーの方を向く。
　すると、既にライダーは立ち上がっていて、傷だらけの体でも剣を力強く握っていた。
「一人増えたか・・・流石にこれ以上やられ放題と言う訳にも行かん・・・。　ここは宝具を解放して・・・」
　と、今にも襲いかかりそうな雰囲気を出していたが、急に表情を変えて、困惑を顕にしてライダーは虚空と会話を始めた。
「何だ・・・見逃せ？　貴様は我儘ばかりだ、今回ばかりは聞けん・・・あのな・・・」
　何やら誰かと会話しているようだ。携帯電話で会話しているような雰囲気だが、携帯を持っている風には見えない。魔術でも使ってるのだろうか。
　ライダーが臨戦態勢を解いたことで、俺達も自然と拳やら剣やらを降ろす。そして、ライダーの誰かとの会話が終わった時、不承不承と言った表情を全く隠さずに俺達に向かって言った。
「・・・決着は次回に預けろ、だそうだ。彼奴（あやつ）は要求が多くて困る・・・尤も、私の帰還を邪魔するのは自由だが、そうなった場合は相応の報復をしていいとも言われた。・・・反論は無いな？」
　俺は、あの神殿に近づく障壁が無くなれば達成が容易になる。だからその判断自体に反論はない。当然疑問は山積されているが、それを氷解させるのには朝日が登る時間まで必要なのは判っていたから、黙りこくっていた方が得だと思って、行動に移した。俺は黙ってうなずく。しかし、煮えきらぬといった表情をしていた少女（ルーラー）は口を開く。
「反論は有りませんが、質問があります。　貴方がた・・・〝光〟の国は、一般人を襲うことを良しとするのですか？」
　その一般人、の範疇には俺も入ってるのだろう。　非常に不本意だ

が、それをいちいち取り上げることは双方行わぬようだ。
「私個人の見解で悪いがな。　必要に駆られれば、だ。こちらから襲うことはないし、襲う理由もない。此奴は、我らの神殿に押し入ろうとしたから斃したまでに過ぎない」
「そのために、人死にが出てもいいと？」
少女（ルーラー）は、冷めた怒りのようなものを含めながら言った。しかし、それを解しておきながらライダーは答える。
「出すなという命令が出ていなかったからな。　貴様からの嘆願ではないぞ？」
「・・・ありがとうございます。　理解できました」
それだけで十分と判断したからか、少女は一歩退く。　俺達が口を開かなくなったのを、頷きながら理解したライダーは、不用意にも背中を向けて歩いて帰っていく。
そこで、ふと思い出した事があって、俺はライダーに呼びかけた。
「俺は、今から神殿に行っちゃダメなのか？」
「敵を招き入れるほど間が抜けちゃいないさ」
「敵？俺が？」
ライダーは振り返ること無く答えるが、俺はその台詞にピンときていない。しかし、それを説明するほどの器量を持っているわけではないみたいで、ライダーは短くこう告げただけで歩くことを再開した。
「ああ、敵だよ。貴様はな」
その真意を深く確認することもできず、誰もが見送るしかなかった。
神殿に行こうとしたいが、ライダーが敵だと判断した以上、俺が走り始めた瞬間本気で俺を排除しようとするだろう。それは面倒だ。
だが、此処で引き返すわけにも行かない。夢の言葉が未だに俺を縛り付けている。だからこそ、俺は決めあぐねていたわけだが、ライダーが見えなくなった頃に、肩を叩かれたので思考を止めた。
いや、叩かれたと言うには少し乱暴だったか。掴まれていた。痛い。　この状況で俺の肩をつかむ人間なんて一人しか居ないからな。
「で、話があるんだけどさ？　付いてきてくれる？　無論、そっちの

サーヴァントさんも」
　真流は笑っていた。　だが、何故だろう、拒否した瞬間大事な何かを簡単に奪い取られる気がした。拒否することに対する恐怖が浮かんでしまう。
「〝闇〟のランサーと、そのマスター。　私は何処の陣営にも属しません、ですから、私を懐柔しようとしても無駄ですが・・・」
「はいはい、ま、話を聞くだけ聞いてくれや。　心配すんな、少なくともオレ達は危害は加えやしねぇよ」
　と、色男が俺と少女の方を叩いて話しかける。その笑顔は、人たらしのそれであって、これがもし食事の誘いであったなら笑顔で頷き返してやっただろう。
　だが、真流の笑みが怖い。　頷くことには変わりはないが、その事に嫌悪感が蛆のように湧く。少女（ルーラー）も、まるで苦虫を噛み潰したような顔をしてうなずいていた。
「話を・・・聞くだけですよ」
「うん、良かった。　じゃ、こんな所で長話なんてできないし、落ち着ける所に行こうか」
　それで、連れてこられたのが極道の屋敷みたいな此処だったんだ。
　何人もの黒スーツに包まれた男に睨まれながら入っていった事は、既にトラウマに認定されそうなところだ。
　それで、誰かしらの私室・・・と見るべき部屋に通されたらこの状況だ。畳が隙間なく敷かれた和室・・・そこで、机を俺と少女（ルーラー）、そして真流で向かい合うように座っている。
　なんにせよ、真流の方に聞きたいことは数え切れないほどある。だから、この状況は僥倖と取っていいのだろうが・・・。
「もう少し、歓迎ムードを取ってくれよ・・・。息が詰まる・・・」
　俺は、机に肘をついてため息を吐いて絶望するしかやっていないのであった。
「理不尽なこと言わないでよ。　ちゃんと場所は用意してあげたでしょ？」
「アレがお前の手下なら、お前から一言言ってやりゃあの視線から解

放させられたんだろ？」
「それは・・・ほら、お返し？」
いつのお返しだってんだ・・・。さては、昨日の事を言ってるのか？
昨日のお返しだと言われたんなら何も言い返せはしないが、そのためには状況の整理が必要だ。相手は、状況を話せ、と言っていた。
俺の方から聞き出したい気分ではあるが、仕方がない。俺は自らの来歴を端的に説明した。
自分が幻視に苛まれていたこと、真流の手の傷について悩んでいたこと。自分にも似たような傷が生まれたこと、神殿に来いと夢の中で言われたこと。
話を続けるごとに、二人の反応は驚きに満ちたものになっていっていた。
「それで、ライダーと闘っていたら、いつの間にかこいつが後ろに居たんだ・・・っと、これ以上の説明は居るか？」
「ううん、大丈夫」
空の湯呑を差し出す、そうすると真流は急須を手で示す。自分で入れろということか、とことん歓迎されてない。真流は溜息をついて、沈むような声で重くつぶやく。
「まさか、橙乃が魔術師だったなんてね・・・」
「そんなに意外か・・・？」
「意外って言うよりは、失念かなぁ。　気づかなかった私の責任だし、これ以上何も言わないけどさ」
手をひらひらと振る真流。　その動作の意味は不明だが、諦めと言った感情はなんとなく読み取れた。
「っつーか、それを言うならお前の家こそなんだ。　完全に極道だろ、それに魔術師なんて盛り沢山だな、お前・・・」
「うん、そうだよ？」
悪びれもせずに言われると、逆に気圧されてしまう。　なぜだろう、社会的な立場で言えば俺のほうが上なはずなんだが・・・。
「勿論、橙乃君はそんな事言わないって信じてるよ？」

「当たり前だろ」
俺の答えに、心底意外そうな表情で無言の返事をする真流。だが、俺しか知らない真流の秘密、って形でこの形を暴露してみろ。
俺が狂ったと取られる方がまだ良い、最悪『なんで橙乃だけそれ知ってるの？　もしかして家行ったの？』みたいに、下世話のオンパレードだ。
もう懲り懲りなんだから、こいつの事についてはもう一切語らん。
「しかし、そういう経緯かぁ・・・随分変わってるねぇ」
「そうですね」
今まで無言を貫いていた少女（ルーラー）にいきなり同意されるとは思ってなかった。
「まず、自分が知らない間にサーヴァントを召喚してるなんて、普通じゃないね」
いや、まず、の話題から全くわからん。
「さっきから聞いてるが、そのサーヴァント・・・とかマスター、ってのは何なんだ。一から説明してくれ」
「あ、そっか。　そこから理解できてないのかぁ・・・じゃ、セイバーには悪いけど、そういう基本知識の確認から始めていこうか」
「はい。　では、私は補足で口を出すのみにさせてもらいます」
助かるよ、そういう真流の顔は、いつも学校で見せるそれとは少し違っているような気がした。気ままに笑いながらも、哀愁が漂っている、といった表現が正しいのだろうか。
だがそれでも、いつもの饒舌さを崩すことはなく、真流は口を開いた。
「まず、今私達は聖杯大戦、ていう戦いを繰り広げてる。
ものすごく簡単に言うなら、あらゆる願いを叶えられる『聖杯』を奪い合うって事」
龍の珠の漫画みたいな話だな・・・。俺は一人で勝手に要約している。
「で、七人対七人の魔術師が争い合うんだけど、その時に私達の戦いの助力・・・と言うより、主に戦いの舞台に立つのが、サーヴァント。

一言で言っちゃえば使い魔なんだけど、これは私達魔術師の力を遥かに上回ってる。まぁ、その力はさっき体験したばかりだと思うけど・・・」
歯切れが悪いのは、俺が少女（ルーラー）と一緒にライダーを相手してるところを見たからだろう。
心配しなくても、その力は十分に理解できている。事実、少女（ルーラー）が居なければあそこで死んでいたのだからな。俺は静かにうなずいた。理解しているぞ、という意思表示だ。
「それなら良かった。基本的に一人の魔術師に対して一人のサーヴァントがついて戦う。で、さっき貴方が会敵してたのは、ライダーってサーヴァントなんだけどさ・・・。ここでついでにサーヴァントの種類について説明しちゃおっか」
そういうと、真流は徐に棚から一本の瓶を取り出し、それの中身を机の上に垂らす。
赤黒くて、鉄が錆びたような匂いから、それの中身はなんとなく察したが、問うのは怖いので聞かないことにしよう。
「その中身は・・・まさか・・・」
だが、少女（ルーラー）が青ざめながら言っているのが聞こえてしまった。俺の苦悩を返せ・・・ホントに。
しかし、言外に含まれた意味を完全に理解していても尚、真流は笑いながら答えてきた。
「うん、私の血だよ？　大丈夫だって、この部屋を汚しはしないよ」
真流の言う通りに、血は物理法則を無視して立体的な物体を形どっていく。
それは、チェスの駒のようで居て、全く違う代物だった。歩兵（ポーン）や塔（ルーク）のような見慣れた駒は何一つ無い。
チェスのそれより一回り大きいそれは、それぞれが全く違う意匠で作られている。それぞれが鎧の溝や、衣服の皺にまでしっかりと拘られて作られているのが分かるが、それ以上のことが解らない。それぞれが何を指しているのか、俺は並べられた八個の駒を眺めるしかなかった。

「聖杯大戦に置いて、七人のサーヴァントが用意されるのは話したよね？　サーヴァントは、その全員が歴史・神話・伝説に置いて大きな功績を残し、信仰や敬愛の対象になった英雄であった訳だけど、当然そういう輩には弱点がある場合がある。

例えば、アキレウスならば、パリスに踵を射抜かれることで命を落とした。アーサー王ならば、カムランの丘で燦然（クラレント）と輝く王剣で致命傷を負った。

有名人であるがゆえの苦悩ってやつだね。　それを隠すために、普通はクラス、つまりはそれぞれのサーヴァントの役割・得意分野に応じた名前で呼びあうことがほとんど。その七種類のクラスっていうのが、」

そう言って、真流は駒を一つずつ指さしていく。甲冑姿の剣を掲げた駒を指差して

「剣術に長け、ステータスも高いことから〝最優〟と目されることも多い『剣士（セイバー）』」

次に、軽装の槍を掲げた駒を指差して

「槍術の使い手である、最速の戦士『槍兵（ランサー）』」

次に、弓弦を引き絞る乙女の駒を指差して

「弓術、飛び道具による攻撃を主とする『弓兵（アーチャー）』」

次に、王笏を抱える鎧の騎士の駒を指差して

「戦車を乗り回すなど、機動力が高い『騎兵（ライダー）』」

次に、ローブを被って杖を持つ老人駒を指差して

「魔術のスペシャリスト『魔術師（キャスター）』」

次に、獣の面で覆われた筋骨隆々の男の駒を指差して

「理性を失いながら、戦場を暴れまわる『狂戦士（バーサーカー）』」

最後に、髑髏の面を被る、短剣を両手に持つ駒を指して

「その名の通り、戦闘を避け、奇襲暗殺で翻弄する『暗殺者（アサシン）』。この七つのクラスが一人ずつ召喚されるって訳。　分かった？」

「ああ、解り易かった・・・が、なら、なんでさっきのライダーは、戦車を曳いてなかったんだ？」

さっき俺と闘っていた時、ライダーは終始己の剣のみを武器として

闘っていた。当然、それだけでも脅威であることには変わりないんだが。
　それでも、騎兵（ライダー）というからには、戦車を曳いていなければ看板に偽りありって物だろう。
「それは多分、あのライダーが戦車なんて無くてもいいって考えてたから・・・か、戦車（それ）が宝具であるかだね」
「宝具？　名前の響きからして、大事なものってことか？」
「当たらずとも遠からずって所だね。７０点。宝具っていうのは、その英雄のことを名指すのに最も効果的な象徴（シンボル）の事だよ。別名、貴き幻想（ノウブル・ファンタズム）。
　アーサー王ならば約束（エクスカリバー）された勝利の剣、クー・フーリンならば刺し穿（イ）つ死棘（ボルク）の槍（ゲイ）。
　それらの多くは、宝具の名前を高らかに宣言することで真価を発揮するけど、それは同時に自分の正体を晒す危険も孕む。というか、それ自体が英霊個人を示す信号になりうる。
　だから、ライダーは自分の乗騎（のりもの）を見せなかった。って考えられるんだよ」
「はぁ、なるほど」
　今後のことを考えて、力をセーブしたと考えられるわけか。自分の正体を明かされれば、次に弱点を徹底的に突かれて倒される危険性がある。
　当然、ライダーはその宝具とやらを用いて俺達を蹂躙することも考えただろう。念話によって会話している時に、逡巡が見られたからだ。
　それらを天秤にかける事も、駆け引きの内・・・か。
「で、話を戻していいか？」
　俺は、先程真流が示さなかった駒を指差す。それは、天秤を持った女性の駒だ。
　すると、真流は首肯し、他のコマを全てどけ、その駒だけを見せるようにして置いた。
「これは『裁定者（ルーラー）』。言わば、使役している魔術師（マスター）の居ない、聖杯大戦

全体に置ける審判(レフェリー)だよ。
ま、本来は召喚されない非正規(イレギュラー)な英霊・・・のはず、なんだけどね」
真流は、俺の隣に座って茶を飲んでいる少女を一瞥した。当然だ。彼女は、自らのことをルーラーと名乗っている。
そして、真流の説明を照らし合わせ、彼女の言動に漸く合点が行った。それならば、彼女が誰にも属さないと言った発言にも納得できる。
しかし、真流はその俺の思考を引き剥がす一言を発した。
「私から見たら、彼女のマスターは橙乃君のハズなんだけどなぁ・・・」
「はぁ?」「はい!?」「はい!?」
俺と少女(ルーラー)は同時に机を叩く。湯呑が一瞬だけ浮き、キレイに着地する。
使役している魔術師の居ないはずの彼女。しかもその主が俺のことだった。
二人同時に驚きが来て、湯呑が浮くほど机を強く叩いてしまうのも仕方ないだろう。真流は一瞬肩を震わせるが、冷静を取り戻しながら答える。
「私だって、裁定者(ルーラー)の事は良く分からないんだって。そもそも、裁定者(ルーラー)というクラスに属されるサーヴァントが居ることが分かったことだってごく最近のことなんだから
でも、私から見たら、その子は剣士(セイバー)のサーヴァントで、そのマスターは橙乃君。それが読み取れちゃうの」
彼女の説明はたどたどしくも、嘘偽りがないという事は伝わってくる。その事は少女(ルーラー)も分かったのか、俺と向き合いながら座り直すしかなかった。
しかし、座り直した所で少女は反論混じりに言葉を発する。
「・・・ランサーのマスターが言っていることは、概ね間違いはありません。裁定者(ルーラー)の役割は、完全中立の審判役。
聖杯戦争によって、世界や衆生への影響を極力少なくすることが、私に与えられた役割です。
そして、私に剣士(セイバー)としての適性・・・というより、裁定者(ルーラー)以外の適

性は存在しません。だから、私が剣士(セイバー)であることは有り得ざる事です」
　彼女が言葉を発する度に、俺の脳内と周囲の空気に懐疑が生まれていく。しかし、少女もそんな事は判っていてこの告白をしたのだろう。
　ですが、と彼女は続けた。
「体に違和感があるのは確かです。　不自然な召喚でしたし、私の霊格・・・つまりは、ステータスに影響が及んでいるのかも知れません。
　そこで、貴方がマスターだというのなら、貴方が私のステータスを見れば全てが明かされることです」
「ステータス？」
　俺が分からないことを察してくれていたのか、少女(ルーラー)は言葉をほぼ切れ間なく伝えてくれた。
「私も感覚的なことしか言えないのですが、私の事を見抜こうと凝視するような事をしてください」
「ふぅん・・・」
　俺は言われるがまま、少女(ルーラー)の事を見つめる。見抜く、と言うことが肝要らしいので、そう意識してみると変化は案外簡単に訪れた。
　何やら、英文の様なものが見える。ひたすらの文字の羅列。煩雑極まりない中でも、本能的な感性で拾うべき文字を見つけていく。
「クラス・・・ルー・・・いや、書き直されてるな。　セイバーだ」
「書き直されている？」
「あぁ、ええっとなぁ・・・紙はないか？」
　言葉で説明するのは難しいから、書いて説明しようと思った。真流は、その意図を介してくれたのか、部屋から一旦出て戻った時には小振りな紙とボールペンを握っていた。
　俺はそれを受け取ると、見た景色をそのまんま書き写す。
　単なる英単語の集合体に二人は辟易しているが、記した文字の所々で興味を引かれたように視線を移動させる。
　しかし、その景色の中で最も違和感のある箇所を、俺達三人は最重要であると共通理解に至っていた。

『Ｒｕｌｅｒ　Ｓａｂｏｒ』
確かにそう書かれていた場所は、彼女がもともと裁定者（ルーラー）で有ったことを示しているのだろう。そして、今は剣士（セイバー）であることも。
「なるほどね。　私には取り消された部分は見えてなかった・・・きっとマスターにしか見えない情報なんだね」
真流は、一人合点が行ったように頷いている。少女（ルーラー）・・・改め、少女（セイバー）は、それが覚悟していた出来事で有ったかのように表情を固めていた。
そして、俺はその風景の中で感じ取った印象を一つずつ言葉にしていく。
「この部分は、能力値だ。　筋力だとか、魔力だとか言う単語が見られたからな。　これは、スキル・・・か？　専門用語が多くて詳細は分からない」
「うん、そうだね。　私が見た情報とほとんど合ってる・・・と思うよ。お世辞にも高いとは言えないステータスだね。剣士（セイバー）とは思えないぐらい」
「そうですね・・・。裁定者（ルーラー）のステータスを基準に作られてるからでしょうか」
どうやら、これは十分低いらしい。基準が分からん・・・。そういえば。
「真流の・・・ランサー？　アイツのステータスはどうなんだ？」
他者のステータスを参考程度までに把握しておけば基準を把握できるかも知れない。そう思って、俺は真流に対して問うた。
「ランサーの聞いてもあんまり参考になんないよ？　この中で負けてるのは一個もないし、ほとんどが2ランク以上上の値だし」
「そうでしょうね。　彼の名はメレアグロス。　大抵の英雄と比べては、その行為そのものが不遜です」
あの男、あんなにレベルが高いのか・・・？　だが、アイツがあの男がカリュドーンの英雄メレアグロスならば、確かに生半可な戦士など歯牙にもかけない実力者なのだろう。
と、そこで俺は一つの疑問に思い当たった。

「ルー・・・セイ・・・」
「今はセイバーですから、そう呼んでください」
「すまん。　お前、メレアグロスと知り合いなのか？　名前言えてるじゃないか」
荒野で真流と遭遇した時、セイバーは一瞥しただけで名前を言い当てていた。
こいつが初対面の相手に狂言を吹っかけるような女には見えない。つまり、彼と何処か出会ったことがあるというのだろうか。
「私はメレアグロスとは、生きた場所も時代も違う・・・と思います」
「でも、言い当てられた」
真流もこっちの類推に参加してきた。さっきの説明の中で、英雄の名前についての重要性を語っていた以上見逃すことは出来ないんだろう。ただでさえ、メレアグロスは弱点が目立つ英雄だ。そのマスターたる真流からすれば、溜まったものではないだろう。
しかし、セイバーはさも当然であるかのように返答をしてきた。
「元・裁定者（ルーラー）だからかは分かりません。きっと擬似的な二重召喚（ダブルサモン）状態なのでしょう。
神明裁決のスキルとルーラーとしての知覚は消されてますが、真名看破は残っていましたから」
「真名看破？　そういえば、そんな言葉有った気が・・・」
「名前通りですよ。対象を見ることで、サーヴァントの真名を知覚するスキルです」
その説明で、俺だけでなく真流も驚きが隠せなかったようだ。そりゃそうだ。あまりにも強力過ぎる。
飽くまでもこれは裁定者（ルーラー）として、審判としての抑止機構の為に存在している機能なのだろう。しかし、対戦の当事者として持っていいスキルではない。
二人して息を呑む。　そして、ほんの少しの沈黙の後、真流が耐えきれなくなったように口を開いた。
「え？　それじゃぁ、もしかしてさっきのライダーの真名も判ってるって事・・・？」

「いいえ」
　セイバーは眉一つ動かさずに言った。その返答に対して、真流はズッコケた。恐らくコメディ的な反応をしたかったのだろうが、寧ろその反応にセイバーは驚いていた。
「だ、大丈夫ですか・・・？」
「い、いいよ・・・続けて続けて」
　本気で心配していたのか、セイバーはまだ彼女のことは心残りらしい。でも、話を止めるのも彼女の中では芳しく思えないだろうから、咳払いして続けた。
「やはり大きく弱体化されているようで、私が感じ取れるのはほんの少し・・・それも、雰囲気や所作といった軽いものだけです。私が彼の名前を当てられたのは、ランサーというクラスと、使ってる武器・服装から予測しただけ。自分で言うのもなんですが、ちょっと勘がいい、というだけです」
「なぁんだ・・・。　まぁ、仕方ないかなぁ」
　真流はうなだれる。　だけど、それを脇に置き、俺はセイバーに質問を投げかけた。
「真名看破の情報は分かった。　だが、お前の情報がまだ分からない物がある。お前は結局何者だ？それに・・・」
　さっきステータス画面を見たときでさえ、名前に関する情報は分からずに居た。きっと、彼女自身が隠そうとしていたのだろう。
　宝具・・・とやらの情報を見ればそれも明かせるかと思ったが、正体に関わる情報は徹底的に隠していたのか、それさえも俺には分からない。
　申し訳ありませんが、と断りつつセイバーは眉をハの字に曲げる。きっと心の奥からそう思っているだろう声色で告げた。
「一部記憶の混濁が見られます。不自然な召喚の影響でしょうが・・・、自分の名前、そして宝具がです。さっきから思い出そうと思っているのですが・・・」
　言外に『叶わなかった』と暗示している。さっきからの落ち着かない表情、そして真名看破の存在を訊いた時の『と思います』の台詞。全

ての筋が通る。
「・・・そうか」
俺の声はきっと沈んでいたんだろう。自分の共闘相手の情報は、連携を取る上で必要不可欠。それを得られない状況になったというのなら、落胆は隠しきれない。
それを見かねた真流が声を掛けてくる。
「令呪を一画使って思い出させる？」
「令呪？」また聞き慣れない単語だ。
「その右手のことだよ」
それは、俺の右手そのもののことではないのだろう。そう思ったのは真流の手の甲にも同じような赤い刻印が浮き出ているのは俺も理解しているし、なんなら俺の十字架型の刻印とルーツを同じくする所までは感覚的に把握してるからだ。
俺は自分の右手に炯々と光る刻印を眺める。まるで悪魔が付けたようだな、と軽い感想が湧き出てすぐに消えた。
「それは、サーヴァントをこの世界に繋ぎ止める楔であって、君がセイバーの主たる所以でも有って、三回限りの絶対命令権でもある。
二回までなら、サーヴァントに無条件に命令に従わせることが出来るからね。無条件に」
その言葉を強調した理由。俺はそれを一瞬で理解した。
本来不可能であることも、これを用いれば可能になるということなのだろう。物理的に？　それともそれとは関係なく能力（スペック）的にか。
例えばここで『お前の正体に関し全てを思い出せ』と命じればそれは叶うのだろう。きっと、必ず。
だが――――。
「三回目を使ったなら、どうなる？」
真流は苦笑した。
「それは令呪の消失。つまりはサーヴァントをこの世に留まれさせなくなるって事。君がセイバーを従えられる事は出来なくなり、セイバーは好き勝手に行動できるようになって」
一呼吸置く。そのお蔭で、続きは実に俺の心に響いた。

「セイバーは程なくしてこの世界から消滅するだろうね」
「なるほどな・・・」
　それは当然か。これがあるから、彼女はこの世界に存在していられると考えるのならば。これが消えたときはそうなるのは当然の帰結。
　そのリスクを天秤にかける。
「サーヴァントの消滅は即ち何を意味する？」
「その時点で勝ってなければ、敗北ってとこかな」
「そうか・・・なぁ、セイバー」
　セイバーが肩を跳ねさせる。遂に令呪を使われると思ったのだろう。
　だが、俺の台詞は別の文言を用意していた。
「お前は全力で戦うな？」
　セイバーは一瞬戸惑いの色を見せるが、すぐに先程までの強い表情を取り戻す。
「当然です」
「そうだろうな。　ならそれで良い。ゆっくり思い出していけばいいさ。令呪（これ）の使い道は、何もそれに限らない」
　俺の周りに居る二人は意外そうな顔をした。きっと迷いなく使うと踏んでいたのだろう。
　事実、真流はその質問をしてきた。君なら使うと思ってた、と。その返答も、俺は既に決めている。
「ここが使い時じゃない、と思っただけだ。確かに勝利のために重要な情報ではあるが、この序盤に二回しかない命令をこう使うのは余りにもリスキーだ。セイバーが思い出せない分は、俺が努めればいい」
「はぁん。　橙乃がそう思ったなら良いけどね、私は」
「それで、まだ聞きたいことがある。真流。今夜は寝かさんぞ」
　納得した表情をしていた真流は、その鼻につくような笑いを崩さずに問うてきた。
「どんな？」
「この戦争が始まった理由だとか、他のサーヴァントや参加者の事だったりな。　システムは理解したが、それだけだ」

「やっぱり。　なら、移動するよ」
そう言って、真流は正座をやおら崩し立ち上がる。一時間近く正座していたが、脚は無事なのだろうかと要らない心配をかけつつも、その理由が未だに理解できない。
「どうしてだ？」
真流は、立ち上がったと同様に、表情をいきなり顰める。と言うよりは、呆れに近いだろうか？　肩をすくめる仕草が妙に板についていた。
「教会。今回の聖杯戦争の監督者がそこに居るし、私もアイツに呼び出されてるから。　ホントに行きたくないんだけどね、ものはついでって奴」
「監督者？　セイバー・・・というより、ルーラーじゃなくてか？」
「じゃなくて。　違いが気になるなら、そいつに聞けばいい。ほら、置いてくよ？」
不機嫌な顔は結局最後まで解けることはなく、真流は歩き出してしまう。俺も急いで追いつこうとするが、ずっと同じ姿勢で居たから脚がうまく動かなかった。
俺は真流の言葉の真意が分からないまま、ただひらすら追いすがるしかなかった。

お前の願いは

教会の場所を今まで意識したことはなかったが、真流に場所を聞けば、ああそうだったかなんて思えた。

それは、死都とは丁度反対側に位置する高台の頂上であって、俺が途中で通りすがるはずもない場所だったからだ。高校生が好んで話題にするような場所でもないから余計に俺は知らずに居たわけであり、初めて見たこの場所は驚きの種で満ちていた。

高台の多くの場所は、芝生の絨毯が敷かれた公園や、身寄りや蓄えの無い人のために作られた石畳の墓地であって、その多くはしっかりと整備されていた。

「この奥に、監督者が居るのですか？　何やら、広大な土地の所有者の様ですが・・・」

いつの間にか剣を何処かに消したセイバーが俺の後をついてくる。俺の十数歩先を歩く真流が、振り向きもせずに答えた。

「うん。　ま、この土地そのものは監督役って言うよりは教会の所有物なんだけどね？でも、今は監督役が教会の責任者だし、大して変わらないか」

「綺麗なモンだな。　何ヘクタールあるんだ？。この広さの土地を掃除するの大変だろ」

自分の家も広いから、それなりに苦労が伺える。使わない場所ほど埃が溜まるが、使ったならばゴミが落ちる。結局大掃除の時に家全部を舐めるように掃除しなければならないわけだが、屋敷の全てを掃いて拭くのには中々手間がかかる。

休日の起きている間全てを返上しても終わらないことなんてザラだ。

「まぁ、あの人完璧主義者だと思うし、きっと掃除をするのも苦にならないだろうなぁ。むしろ、汚れてる場所を見られる方がムカつくって表情してるし」

「そんな相手と会うのか・・・っつーか、監督役と知り合いなのか？」

ならば、色々と融通が聞くんじゃないのか？　言葉の響きからし

て、権力を持っていることには変わりないんだろう。
しかし、予想外に返事は溜息と一緒に聞こえていた。
「会えばきっと、知り合わないほうが良かったって思えるよ・・・」
「・・・そうか」
想像以上に声色が深刻だったので、それ以上深く聴き込むことが出来なかった。何やら、相当根深い所まで負の感情を刻みつけられたらしい。
「それに、知り合いって言っても、今回の聖杯大戦が無けりゃ知り合うこともなかったような、淡白でライトな関係だよ。
彼女は流れ者だしね。　確か、この教会に配属されたのが２年前だったっけ？」
それならば、俺よりこの街に住んだ年月が短いことになる。俺は５年前にここに来たのだから。
この街に居た年月で会ったこともないやつと競っても仕方がないのだが。
「・・・着いちゃったかぁ」
と、話している間に、高台の頂に辿り着いた。そこには、高い月を背景に厳かな教会が建っていた。
今までの道のり同様、広くとも全く穢れてなど居ない庭が目の前に横たわっている風景は、さらなる空間的な広さを認識させる。
鉄柵のようなゲートをくぐったなら、教会までは５０メートル足らずの庭であるというのに、無駄な物質がない此処は寂寞を強調させていた。
「私は此処で待っています」
真流が教会のドアに手を掛けた時、セイバーが立ち止まり呟いた。
その目には迷いは宿っておらず、冷静な思考によって獲得した結論なのだろうと思えた。
「理由だけ聞こう」
「敵襲がないとも限らないからです。　それならば、スズカが連れたランサーが中で二人を守り、私が外で監視している方が良いかと」
俺の問いにも、決して焦らずに答える。むしろ、俺がこう聞くのを

判っていたようだ。
「ランサー、今居るのか？」
「居るよ？　話す？」
「いや、良い」
　真流の返答で、確かにセイバーをここに置いていく理由は間違っていはいないということが分かった。
　それに、セイバーは元来裁定者（ルーラー）・・・聖杯戦争の審判だというのなら、俺が聞こうとしている、聖杯戦争の成り立ちに関しても与り知る所なのかも知れない。
　ならば、確かに俺のそばで話を聞いていても意味がない。　俺は頷いた。彼女は頷きを返した後、俺に背を向ける。もう見張りは開始しているらしい。
「じゃぁ、行くぞ」
　俺は扉に手を掛けた。　木製の扉だと言うのに、それは鉄製のそれのように重厚な音を立てて開いていく。
　教会は、今までと同じ様に広くて寂しい空間だった。今までと違うところをあげるならば、人間が一人立っていたことだ。
　十字架に向けて立つその影は、ステンドグラスの極彩色の光に当てられて、神々しささえ纏っている。
　扉の開閉する音に気づいてか振り向いた顔は、美しく、同時に凛々しかった。
「遅い」
　顔と同様の凛々しさを持った声が教会の壁で反響する。よく通る声だった。
　忙しく近寄ってくる歩み方で、カーペットの床のはずだが、カツカツという音が反響するのは彼女が余りにも近寄りがたい雰囲気を出しているからだろうか。
　話ができるぐらいに近づいてからわかったことだが、彼女は背が高く、肉体が肥大しない範囲で鍛錬を繰り返しているらしい。
　そのへんの男になら殴り合いで勝てそうだ・・・そんな見立てをよそに、二人は会話を開始する。

「サーヴァントはどうした？」
「居るけど・・・見せなきゃダメ？　なんだか、出し抜かれそうなんだけど」
「否定はしない。　だが、お前なら見せるメリットも判っているだろう」
　冗談を言うタイプではないな、真流との会話を聞いている限り、そういう印象を受けた。
　彼女の威圧に気圧されたのか、それとも一旦否定しておく予定だったのかは分からない。真流は虚空に頷く。
　すると、荒野で見た色男が虚空（そこ）から現れた。その男を見た彼女は驚きもせず、少しだけ相好を崩した。
　〝笑った〟なんて表現を出来ないほどに、ほんの少しだけだが。
「ステータスは全体的に高め。神格、戦闘続行など強力なスキルを持っているな。真名に関する情報を見せないのは？」
「否定はしないって言われてるのになんで見せる気になってくれると思ってるの？」
「相（あい）わかった。　これだけ判れば十分だ、本題に移る、前に。お前は誰だ？」
　彼女は漸く俺に気づいた、といった反応で俺の方を見る。その割には随分剣呑な表情であるが。
　ただ、名乗らない事には始まらないのだろうな。口を開く。
「俺は橙乃匡生。　お前が監督役だって聞いたんでな。巻き込まれたついでに、色々詳しそうな人間にこの戦争についでに聞きに来たわけだ」
「ほう、巻き込まれたとはどういう事だ？」
　表情が変わらないがゆえに、怒りを内包しているのかと疑ってしまう。さては、雑談さえもこの表情で行っているのだろうか？
　だが、ここで威圧されていては何も実りがなかったことになる。多少は強気で行かねばならない。
「文字通りだ。　いつの間にやら、セイバーとやらが隣にいてな。そこを見咎められた真流が、聖杯戦争の事を教えてくれた。

ルールは分かった。やることも大体分かった。だが、肝心の成り立ちが分からん。　だから聞きに来た」
俺の願いとも言えない願いを聞いた彼女は、少し目を見開き、それから顎を撫でて考える。
そんな静寂が一分は続いたと思ったら、彼女はその時間を知覚しなかったのかと疑うほどに口調を崩さずに告げた。
「その辺りに掛けろ。　長くなるだろう」
それだけ残して、彼女は奥の扉から消えてしまった。中になにかを取りに行ったのか？
その疑いを晴らせずに居るが、俺は彼女との会話に疲れを隠せなかったのか、近くの長椅子に腰を掛けた。
冬も深まった、草木も眠る深夜だというのに冷や汗が一筋垂れる。真流がここに入る前に話していた言葉の真意が分かった。
彼女と余り長い間話していられる気にはならない。　不思議な威圧感を持った女だ。
彼女が〝カラスは白い〟と言ったなら、数割の人間は賛同してしまうような威圧。或いは迫力だ。
「何者だ？　アイツ・・・」
振り向いて俺の後ろに居る真流に尋ねる。ランサーも同じ意見だったのか、彼女に同じ視線を向けている。
俺達の目を理解した真流は、観念したように、ぽつぽつと零す。
「フロウって呼ばれてる・・・誰も本名は知らない。　聖堂教会の代行者、つまりは異端の排除に特化した『悪魔狩り』。
彼女が監督役でいられるのは、彼女が聖杯戦争を執り行う立場であるから」
「聖杯戦争を、執り行う？・・・それがなにかおかしいのか？」
ルールがあるのなら、それを守るのが監督と呼ばれる人間の仕事だろう。
監督役、という役職名からして、そういう立場の人間。きっと裁定者（ルーラー）と言うクラスと変わらない役割なのだろう。
だが、真流の表情は未だ曇ったままだ。

「彼女は、参加者（プレイヤー）でもあるんだよ。そうでありながら、聖杯の管理者であるから、監督役って呼ばれてる」
「・・・は？」
ランサーと声が重なった。
二人して呆然として、互いの顔を見合わせ・・・恐る恐ると言った口調で、俺は口を開くしか無かった。
「なんで、そんな横暴が・・・」
「もう良い、真流。　そこから先は私から説明しよう」
いつの間に横に立っていたのか、フロウは二つのグラスを持っていた。それを手渡ししてくる。
中身は温められた牛乳だろうか。　渡されてから気づいたが、冬の夜の空気に当てられて体は十二分に冷えている。暖房の類は機能していないみたいだし、助かった。
「〝闇〟のセイバーの召喚を受理した。　これにて、全サーヴァントが召喚されたことになるが・・・そんな事より、って顔をしているな。
良いだろう。そこから話すとしよう」
俺は二つ返事的に頷いた。　それを見たフロウは、立ったまま語り始める。
「そもそもとして、聖杯戦争は冬木にて始められた魔術儀式だ。遠坂、マキリ、アインツベルン・・・と言った、始まりの御三家はこの聖杯戦争に関係してこないがな。
魔術という学理の常識に疎そうなお前でも、冬木の大災害は知っているだろう？」
「当然だ」
大災害というが、それは大火災だ。原因は不明で、人災とも天災とも。仕組まれたとも完全な偶然とも。
真相はまさしく燃え尽きてしまっているのだろう。残ったのは、焼け落ちた跡の荒野と生き残った人間の無念だけだったと聞く。
正直他人事という感じがせずに、実際に足を運んでみたこともある。何処と無く自分の過去と共通点を見出したんだろうか。
しかし、その不思議な郷愁を知る由もないフロウは無慈悲に言葉を

連ねる。
「それは、聖杯戦争の失敗の歴史だ。復讐者（アヴェンジャー）というサーヴァントが、聖杯を汚染し、殺戮という方法以外での願いの実現を否定した結果、あの災害は起こった」
鼓動がひときわ強くなった気がした。　内側から爆破されたとさえ錯覚した。
どこか遠くから心配するような声が聞こえる。いつの間にか顔色が悪くなっていたんだろうか、背中が丸まっていたことにさえ気づいてなかった。
大丈夫だ、なんて。恐怖を押し留めながら続きを促した。フロウは変わらぬ表情で頷いたら口を開いた。
「その結果として、私達が聖杯戦争のシステムを奪取できた訳だ。しかし、それをよく思わない輩も大勢居る。
そこで、聖杯（システム）を護ろうとするチームと、それを阻止しようとするチームに別れて聖杯戦争を執り行う。それがこの戦争の本質だ。
私が属するのは聖杯（システム）を護ろうとするチーム。便宜上〝闇〟と呼ぶがな。聖杯《システム》を有する側から監督役が派遣されるのは当然の流れだ。それが、如何なる人間だろうとな」
「そういう絡繰（からくり）か・・・。理解したよ」
「ならば良い。　さて、成り立ちについても説明しておこうか。欲しがっているようだからな？　橙乃よ」
俺の名前を呼んだ時、彼女の口角が上がった・・・気がした。
笑うような人間でもない・・・というか、笑うという行為と彼女が上手く結びつかなかったからこそ意外だったが。
その様はまるで、待ち人を漸く見つけた、と言ったような静かな笑いだった。真意までは測れないまま、彼女は顔を戻して語る。
「元来冬木の街で由緒正しく執り行われるべき聖杯戦争。それがこの街にやってきたのは、我々が大聖杯・・・詰まりは、この聖杯戦争の心臓を奪取した事から始まる。
あらゆる街を転々とし、聖杯戦争に相応しい都市を見つければその街の管理者に打診し、許可が出れば聖杯戦争を行う。そんなシステム

を思案・確立したのは第四次聖杯戦争の十年前。今から数えれば二十年前の事だ。
　机上の空論とさえ嗤われたこの試みは、成功したからこそ怒りを買った。魔術協会といった、魔術世界の秩序を形成する組織からのが主だな。
　私達は言わば簒奪者、必要以上に警戒したくなる気持ちもわかるがな。しかしながら、止めるつもりもない。
　だからこそ、通常7人でのバトルロワイヤルで行われる聖杯戦争ではなく、7騎対7騎の〝聖杯大戦〟と呼ばれる、予備（スペア）のシステムが必要だったわけだ。　ここまでは良いな？」
「ああ、大丈夫だ。　これだけでも十分だが・・・続きはあるんだな？」
　フロウは無言でうなずく。いつの間にか、この教会は彼女の劇場になりつつあった。俺だけでなく、真流でさえも聞き入っていたのは、フロウが持つ迫力ゆえだったのだろう。
「〝闇〟と〝光〟の区分は、言わば聖杯を〝護る〟か〝奪い返す〟かの違いだ。だが、その違いは大きいぞ。
　なんせ、生き残った陣営しか願いを叶えられないようにシステムを改変したのは私達だ。寝返ることは可能だが、その代償は大きい。勝利したとして、それは自分が願いを叶える権利を放棄することに等しい。
　つまり、余程の事がない限り私達は仲間と言う訳だ。歓迎しよう、橙乃。ようこそ、〝闇〟の国へ」
　彼女は、歓迎という言葉が仮面にすらなっておらず、まさしく鷹のように鋭い目で俺を見下ろしていた。俺は彼女の舞台に強制的に上げられてしまったようだ。
　俺は緩やかに立ち上がる。彼女と同じ目線で話さないと、彼女に負けたような気がしたからだ。そして、立ち上がるのと同じようなスピードで口を開いた。
「お前に歓迎される筋合いは無い。　俺は俺の願いのために戦う。どうせ、片方の陣営だけ残った後でも、個人を決めるための戦いは残っているんだろう？」

「ほう、中々頭の回る男だな。その通りだ。　何だ？出し抜かれることを警戒しているのか？」
　真流の言い回しからして、そういう戦いがあることは判っていた。
　この女は、危険だ。裏切ることは無さそうだが、腹に一物どころか十個は抱えていそうな気がする。それに、さっきの笑みの真意も図りきれない。未だにそれ以上の笑顔は浮かべないのも。こういう冗談にさえ笑顔を浮かべないのは却って異常なのではなかろうか。
　少しでも情報を漏らすのは危険だ。　セイバーが外で見張りをしてくれているのは助かった、彼女に見せたら何をされるか知れたものじゃない。
「するに越したことはないからな。　話題を変えよう。他の参加者についての情報をお前は持っているか？」
「ああ。　〝闇〟のサーヴァントは剣士（セイバー）と魔術師（キャスター）以外のスキル・真名・宝具を除くステータスが。〝光〟に関しても剣士（セイバー）と騎兵（ライダー）のモノが用意できている」
　矢張り、彼女は誰にでも警戒されているのか・・・。と思いつつ、フロウは修道服の内側から紙の束を取り出す。
　それを俺達二人に手渡してきた。中を見ると整頓された表でサーヴァントのステータスが記されている。流石に真名、宝具に関しては誰も明かさなかったらしいが、スキルに関しては隠しきれるものではなかったらしく、一体のサーヴァントにつき平均して2個程度記されていた。
「もしかして、さっき引っ込んだ時にランサーのも書いたの？」
「あぁ。　お前達を待たせていたから急いだよ」
　中々仕事が速い女だ。だが、魔術師（キャスター）のはいざ知らず、セイバーは俺のサーヴァントらしい。少し扱いに悩んだが、俺で答えは出し切れずフロウに訊いた。
「もしかして、セイバーのステータスも見せたほうが良いか？　ここに呼ぼうか？」
　あの様子だったら、ここからそう離れた場所には居ないだろう。もしかしたら、一歩も動かずに見張りを続けているかも知れない。

呼ぼうと思ったら、すぐにでも呼びに行ける。そう確信して質問した。
「いいや、結構だ。　そっちにも興味はあるが、それよりも君に興味がある」
そう指差され、俺は固唾をのむ。こいつの言う興味とは一体何なのか・・・。
一瞬の沈黙が永遠のように感じられた。それは、沈黙が彼女の迫力同様この場を支配していたからだろう。
やがて、重々しく、しかし歌うようにフロウの口が開いた。
「興味があるのはお前の願いだ。お前は聡明だ。きっと、これが命を落として当然の戦いであることは判っているのだろう。
巻き込まれた、と言う割には既に肝が据わり過ぎだ。セイバーを召喚してから数時間も経っていないのだから尚更な。
そこまでして、お前を突き動かす使命が気になるな」
「俺の願い・・・か」
ここで俺は首を傾げる。そうしたのは、願いが定まっていないと少しでも相手に偽装できたらと思ったからだ。
もしくは、自分が願いを偽るのに相応しい理由を探していた。
余り熟考していると怪しまれる。何秒も掛けられないのだから、思考を加速させて最適な答えを求め続けた。
その過程でふとフロウの顔が目に映った。
彼女は笑いながら俺の答えを待っていた。その真意はまたも読めない。
しかし、その様は静かな喜びに満ちているように感じられた。数時間立ち尽くした後に待ち人に会えた、そんな所か。
俺は少し迷い、そして・・・。
「・・・いいや、人に言えるような高尚なものじゃないんでね」
「そうか。　なら良い」
俺にしか分からなかっただろうが、彼女の口は少し突き出ていた。どうやら不満らしい。
「私から話せることはこれだけだ。　とっとと帰れ」

そして同時に彼女を少し怒らせてしまったようだ。どうせチームメイトなんだから明かしてしまっても良かったはずだったが、今になって言っても彼女の怒りを助長するだけだ。
仕方無く俺達は立ち上がり、踵を返そうとすると。
「おっと、忘れるところだった。　これを受け取れ、真流」
「うん？　一体うおっと!!・・・なにこれ？」
真流が不意を突かれる形で投げ渡される。それは、月光を受けてほのかに輝く赤い宝玉だった。
その用途を察せられない俺らは、小首をかしげて聞き返す。
「これがなにか、それを判断するのはお前だ」
要は、〝それぐらい判らないようでは望みがない〟って事にほかならない。矢張り彼女の本質は冷徹なのか？
「ふーん・・・？　ま、高そうな宝石だし貰っておくけどね」
そう言って、真流はさっさと歩き出してしまった。フロウの含意に気づいているのかどうかは見せないまま。
俺も遅れて歩き出そうとした時に、後ろから低く小さな声で、まるで俺にしか聞かれたくないという意志を持ったようにフロウが呼びかけてきた。
「お前の理想は、他者には理解されないものだろうか」
それは質問ではない。俺は振り返らず、その場で立ち止まって静かに彼女の声を聞いていた。真流は気づいていない。
フロウも気付かれたらマズイと判っているのだろう。
手短にまとまった言葉で、俺が次にやるべきことは固まった。
「だが、お前と行動を共にする者がいる。ならば、そいつにだけは打ち明けるべきだ。
そいつも、自分の願いを持って、お前に引き寄せられたのだから」
なるほど当然だ。　俺は無言で頷いて、彼女の後をついていった。丁度真流が振り返るタイミングだったので、靴紐を結んでいたと適当な言い訳をしておいた。
もう後ろから声は聞こえなかった。
高台から静かに降りる。同じ道を歩いているのに図りあったかの

ように、俺とセイバー、ランサーと真流に分かれて歩いているからお互い会話も生まれない。
背後を二人の足音が響かせる。その音を背中に受けても、俺達二人は同じ歩幅とテンポで歩き続けていた。
無言のまま歩き続けるには、周りは静かすぎた。耐えきれなくなった俺から口を開く。
「なんで、お前は戦うんだ？」
その問は、奇しくも俺が先程投げかけられた問とシンクロしていた。
セイバーは不思議そうな顔をしてこちらを見る。月に当てられて、冷たく光っていたのは彼女の瞳だった。
「考えてみれば、当然の事だ。お前が見返りもなく俺に従う筈がない。俺より強い力を持っているというのなら尚更だ」
彼女の返答を待たず、俺は言葉を重ねる。
セイバーは、辛いような悲しいような顔でひたすらに前を見続けていた。俺に目を合わせられない、と言った具合に。
「俺が願いを叶える為に戦う、じゃないんだろう？重要なのは、お前の行動原理だ。
お前が戦うために足る理由を、願いを聞かせてくれ」
二人歩きながら。足並みを揃えて歩いていたのが、ふとセイバーのがテンポが僅かに遅くなる。
俺は無言で彼女の変化に付き合った。やがて、歩幅と同じように僅かに小さな声で告白した。
「・・・私は、元々裁定者です。本来とは違うクラスに、捻じ曲げられて召喚されたのですから、皺寄せが無いはずがありませんよね。
一つは、通常より弱まったステータス。そして、もう一つが思い出せない私自身についての情報。
名前や、生前の知り合いや環境。宝具の真名・・・そして・・・願い、さえも」
衝撃は思っていたよりも少なかった。少し考えれば分かるはずのことだった。今まで俺自身が認めたくなかっただけだ。

俺も幼い頃の時分は思い出せない。俺は言わば拾われ子。自分の親には会ったことがない、故郷を見たことがない、そんな事実が俺の上に積み重なった所で、決して俺の心に虚無的(ニヒル)な気持ちはやってこなかった。

しかし、彼女の表情を見ればどんな感情が去来しているか分からない。俺とは余りにも境遇が違いすぎる。彼女は達磨落としのように自分の基盤が奪われたのだ。

悲しみ、不安感、虚無感・・・。本来確固たる自己が形成されていないというのは、精神的に来るものがあるのだろう。

「しかし、裁定者(ルーラー)というクラスは、願いを持ってはならないのです。聖杯戦争の審判を務めるべき人間が、我欲を持っていては他陣営への介入に繋がるのですから。

ですから、願いを思い出せないというのは矛盾があります。私は願いが有ったなんて戯言さえ言ってはならないのですから」

庭園に立つ木が彼女の顔を曇らせる。月光が届かずに影が差した彼女の顔は、一体どんな顔をしていたんだろう。

しかし、その暗がりも一瞬のことで、木陰を通り過ぎた時には彼女の顔には元のように得体の知れない使命感が宿っていた。

「私には願いがあります。思い出せずとも、確かにこの胸を燃え上がらせる願いが。きっとそれは、星の光のように絶えぬ思い。

たった一人だけ、救いたいと願った人が居ました。その人の顔も思い出せない。男か女かも。そう思ってから、幾らの年月が過ぎたのかも。何もかも消え失せて。

それでも、私はその人を救うべきなんだと、自分を突き動かす感情だけがあるのです。それは、きっと私の願いなのでしょう」

それは、どれだけ強い思いだったのだろう。

〝自分〟という存在がなくなった後にさえ残る感情が、他人を助けようとする善意だなんて。

本当に、自分には勿体無いぐらいによく出来た相棒(サーヴァント)だ。

「正しいんだな・・・」

小さく漏れ出たのは俺の声だった。それを耳ざとく感じ取ったセ

イバーは、一瞬こちらに視線を向けた。
しかし、それに続く言葉は無かったのだと分かったら、すぐにセイバーは正面に向き直る。
言えるはず無いじゃないか。
自分がこんなに汚れた人間だなんて。　蝿がたかるように、性根が腐った人間だなんて、彼女の願いを聞いた後に言えるはずがない。
「俺の願いは、誰よりも強くなることだ。この世界の何にも負けないように、兎に角強くなることだ。
・・・そのためなら、お前の事を蔑ろにするかも知れない。そんなマスターが嫌なら、さっさと縁切りするが良いさ」
「そんな事はしませんよ」
即答されて、戸惑うのは俺の方だった。
セイバーは立ち止まり、俺の目を見つめる。その瞳には、星の光が映っていた。
「貴方が如何な願いを持っていようと、大切なのは貴方がどのような心根であるかだと思ってます。
貴方が本当に害を為そうというのなら、私を取り入ろうとするでしょう。少なくとも、自らの卑屈さを告白したりはしないでしょうね。
私のことなんて良いですよ。どの道、二度目の生を生きてる死者(わたし)が、生者(あなたたち)の意志を阻む事は望まないのですから。ですので」
セイバーは右手を差し出す。白く美しい手は開かれていて、俺に握手を求めていると気づいたのは彼女が言葉を続けた後だった。
「共にこの戦いを生き残れば良いのです。貴方は私の、相棒(マスター)なのですから」
俺はその手を、苦笑しながら取った。伝わってきたのは、彼女の確かな体温であって、これが生きていないと確信するほうが難しいと思えるほどに、実感を持って返ってきた。
「・・・ったく、苦労することになるぞ。お前は貧乏籤を引いたんだ」
「今更ですよ。初めて会ったときから判ってます」
二人お互いに笑い合い、少し打ち解けたのではと確信した。

そこに帰ってきたのは、後ろからの声ではなく、前からの声だった。
「そんな汚い手を取っちゃダメだよ～？　〝闇〟のセイバーちゃん？」
俺達は手を離し、同時に前へ注目を向ける。
そこには一人の少女が立っていた。夜闇に溶けて消えてしまうのだろうというほどに、黒い礼服を身にまとった少女だ。
笑顔を浮かべては居るが、心底笑えないぐらいの感情を渦巻かせているのは、初対面でも分かった。
「こんばんは。匡生お兄ちゃん。　それじゃぁ、死んでね」
声だけは可愛く。しかし、背後に現れた《それ》は全く可愛いを連想させることは許されなかった。
なんせ、それは海怪（クラーケン）が持つような、巨大な触腕だったからだ。うねうねと動くそれは、先程見た深紫の生物の挙動と似ているようで、全く違うものだ。
それは、俺も叩き潰そうという確固たる意志を持って一瞬で振り下ろされたのだから。

嗤う少女

お兄ちゃん。その呼び声に対する俺の情動は、単なる疑問符を超えていた。

なぜその呼び方をしている？　お前は一体誰なんだ？

だが、それらの疑問は一旦横に置くしか無い。臭い物に蓋するように。

俺はこの一瞬で、生と死の淵に立たされたと気づいたのだから。

俺を狙って振り下ろされた触腕は、その巨大さ相応の膂力を伴って叩きつけられた。

辛うじて受け止めることは出来たものの、勢いはあまりに強く、両腕は受け止めた拍子に悲鳴を上げていた。

「マサキ！」

隣で心配そうな声を掛けてくるセイバーが居る。

それが何となく癇に障り、半ば怒声となって返答をした。

「心配、いらねぇよ！」

だが、触腕の膂力に、俺の全身は限界を迎えようとしていた。

それとは他に、受け止めている手のひらに痛みが走る。温めすぎた食器に触ったような、鋭い痛みが。

そんな事に、ふと寒気がして、我慢できずに横の地面に叩きつけるようにして受け流した。その拍子に土の破片が飛び散る。

「あっはは！　惜しい惜しい！でも、まだまだ終わらないよ！」

少女は笑いながら、触腕を動かす。滑らかに、艶やかに動く蛸のような触腕は、墨で染めたように真っ黒だった。

地面から俺の顎を砕き割ろうと振り上げられる触腕を、今度は避ける。しかし、十数メートル離れいても尚触腕の先端は俺の遥か後方にある。

太さ、長さ共に十二分に常識の範囲を超えている。さながらそれは、ゴルゴンの体のようだ。

空を切る音を聞きながら、背後から触腕の先を鏃（やじり）のようにして突き刺す動きを、体を捻らせて辛うじて躱す。

触腕は一本だが、それは一個の生命体と言うより、複数の生命の集合体のようにさえ感じた。それほどまでに、触腕の動きは自由度が高く、避け続けるのには想像以上の疲労を伴う。

その触腕は触れ続けることが出来ないなら尚更だ。

饐えた臭が鼻を突く。先程地面を叩きつけた触手が、触れた所を腐らせているからだ。

あれは相当の呪詛を込めて造られているらしい。　命を持った劇薬があるならこうなるだろうか。先程受け止めた手だって、ほんの少し離すのが遅れていれば今頃腐食作用の絞りカスだ。

触れるのには細心の注意が必要で、そんな触腕が相応の速度と威力で何遍も迫る。

おかげで俺が自由に動かせるのは首から上だけだった。だから、口を開いてセイバーに指示しようかと思ったところだが、その頃セイバーはすでに動き始めていた。

俺を攻撃の目標と定めているだろう触腕を華麗に避けつつ、避ける手間を考慮してもただの人間には反応し得ない速度での接近。

そして攻撃。まさしくその剣閃は、彼女の胴部を貫き通し、戦闘続行は不能な一撃を与えていただろう。

そこに居るのが彼女だけならば。

虚空から揺れるように現れた青年が居た。その男は初めからそこに立ち尽くしていたかのような安定感を伴っていた。

騎士のような見た目の男が、重みを思わせる長剣を握りしめていた。

それだけでも異様なのに、その彼は人間でないように見えたのだ。

異常に肥大し、黒光って節くれ立つ腕。　さながら、魔導書に登場する悪魔のようだ。こんな魔術を使っている少女に付き従っているのは、お似合いな雰囲気も有りげだが、今はそんな呑気なことを言っている場合ではなかったのだ。

剣を持って立っていた青年が動く。人外の見た目をしていたのは伊達ではないらしく、少女の前に立ち塞がりながらセイバーの剣を簡単に受け止める。

「聖杯戦争の戦場において、常道というのは確かに存在する。魔術師はサーヴァントには敵い得ない。ならば、サーヴァントは魔術師を攻撃するのが常道だろう」
騎士の声が響く。その声は、鍔迫り合いと触手が乱舞する音の中でもよく響いた。冷静な青年の声。
しかし、静かな熱意をも孕み、青年の声は更に続けた。
「しかし、常道というのは悉く打破されるものだろう！　〝闇〟のセイバーよ！」
青年が騎士剣を振りかぶり、力強く振り下ろされる。その剣気は阿修羅の剛毅さを持ち、二、三度剣がぶつかり合っただけでセイバーは抵抗する間さえ無い。のけぞらないように耐え忍ぶので精一杯なのだろう。
俺が助けに行くべきなのかも知れない。　だが――――
「いいねお兄ちゃん！　良いダンスだよ！大会に出たらいいんじゃない？」
礼服の少女の攻撃もなかなか苛烈だ。　セイバーを助けに出ようと体勢を変えれば、そこを叩き潰される。
そして、それは即ち死を意味するのだ。迂闊にそんな事できない。
「生憎だが、ダンスに専念できるほど暇じゃねぇんでな・・・！」
その場で体を捻り、捩り、絞る。
確かに、出来損ないの社交ダンスでも踊っているようだ。
しかし踊ってるばかりでは、戦いを長引きこそすれ終わらせることは出来ない。石でも投げればいいかもと思ったが、それは違うのだ。
何かを投げた所で。俺が居る位置から、少女までは少々距離が開いている。　何かを投げても、届くのに《一瞬》という訳にはいかない。
だったら、触腕で防ぐのも簡単だろう。　銃でも有れば話は別だったかも知れないが、無い物ねだりはさもしいだけだ。
結局は何が言いたいか。
二つの戦局は、お世辞にも芳しいとは言えない。不意打ちされた以上、俺等の不利は決定的だったのだろう。
ここから見える限り、相手方二人はどちらも汗一つかいていない。

余力の引き出しはまだ尽きていないのだ。
ここまで限られた状況で、俺達の考えは共通していた。
徹底した時間稼ぎ。　攻めず、攻めさせない動き方を突き詰める。
真流達が来ることを信じてるからこそ出来るこの戦い。
正直な所、それだけでもキツイ。
激流の中に足を突っ込んで、その中で立ち尽くすような感じ。　一度決壊すれば、俺達の命はない。
足がもつれそうな動きの連続の中で、精一杯生を繋ぐ。　それしかない。
「そっちのセイバーも、結構食い繋ぐじゃない！　二人共お似合いだよ！」
触腕が、横から薙ぐように振るわれる。
遠心力を伴って放たれる一撃。　〝速度〟は即ち〝重さ〟となって、俺の腕にのしかかる。
瞬間、うずく触覚。　これ以上触れるのは危ないと感じ、いなして触腕を体からずらす。
その間は、数秒となかっただろう。だが、俺の外套（コート）は摩耗したかのようにささくれて、白く特異臭のする煙をくゆらせた。
「・・・もう、腕は使えねぇな・・・」
俺はぼやいた。いや、ぼやくしかなかったのか。
そうしている間にも次の攻撃が差し迫る。休憩の暇なんて、息を吐（つ）く余裕さえ無い。
ふとセイバーの方を見やると、彼女も似たような物だった。
少女が引き連れていたのは、見た目に違わない剛剣の持ち主だ。技術も速度も、セイバーを上回るが、何より違うのは力（パワー）だ。
腕力や脚力と呼ばれるような、全身の筋力をふんだんに用いた、力強い剣。用いている刀剣も、クレイモアと呼ばれる類の、大きさと重さに優れたものだ。
彼の戦い方は戦車に似て、多少の小細工は力で捩じ伏せると言わんばかり。
事実、細剣（エストック）での華麗な剣技で攻め立てるのが主な戦い方のセイ

バーは、彼相手に剣を突き出せずに居る。
まるで暴風にあおられるしか無い枯れ枝だ。　あれでは彼女に勝ち筋はない。
「セイバーは、最優の二つ名を与えられるサーヴァントでもある。だが、お前の戦い様はどうだ？　俺に傷の一つでも、付けてみせろ。でなければ、私と同じセイバーとして、拭い得ぬ恥になろう！」
あの男もセイバーなのか・・・。　という事は、剣使(セイバー)い同士の対決という事になる。
だが、彼女は本来、剣で戦うべき英霊ではないらしい。　どんな由来であろうとも、剣という土俵の上で、本物に勝る道理はない。
青年が吠えたが、その憂いとも言えるような挑発と同様に、切り傷一つつけられずに負ける可能性は大いにある。
対する俺の方も、正直限界がやってきそうだ。　疲れが体に蓄積して、足はいつもつれたっておかしくない。
腕で受け止めれば、今度はこの地面と同じように腐り落ちるのは目に見えている。
剣戟、風切る音。　それら全てが一つ鳴るたび、俺等は背筋を仰け反らせる。
圧倒的な力で押され、そうするのが精一杯だったからだ。　だが、それも既に終わりの時が訪れる。
セイバー同士の衝突は、佳境を迎えつつ有った。
幾度となく交わされる剣。　その中に、〝闇〟のセイバーが優ったものは一つとしてなかった。
次第に、次第に。　力が抜けていくように膝が屈し始め、背筋は曲がり始める。いくらサーヴァントであろうと、圧倒的な実力の差を前にしてまともに立っていられるほど、心は強くなかったか。
「ぐっ・・・は、はぁ・・・」
吐く息が苦しさを帯びる。　隠しきれない程の息苦しさを感じても戦いを止めないのはなんとも彼女らしかったが、埋まらない力の差に苦悩しているようにも見えた。
「初陣がこのような戦いだとは・・・。　ライダーはこんな小娘相手に

してやられていたらしいが、ここまでして抗えぬようなひ弱な女ではないか」
〝光〟のセイバーは、剣を振る手を一度止め、彼女に語りかける。
「これでは、戦いとは言えぬ。　戦えないサーヴァントは、私には必要ない。早々にこの世界から去ったほうが、互いのためではないのか？」
〝光〟のセイバーは、かなり癇に障る台詞を吐いた。
毒のある言葉だが、この様子を見ている限り、彼の顔には悪意の類は浮かんでいないように見える。つまり、これは彼の単なる感想。
侮蔑でも挑発でもなく、この台詞は自分の胸中を忌憚なく吐露したものであり、同時に相手・・・つまり俺等への慈しみさえ含めた言葉だった。
それを感じ取ったからか、〝闇〟のセイバーは一際大きく息を吐き、笑いながら言った。
「どうでしょうか？　確かに私は、他のサーヴァントより大きく劣るかも知れません。ですが、それは即ち、私の価値の全てを決められるものではありませんよ？　なんせ、私はまだ諦めてませんから」
圧倒的劣勢に立ち。死の淵に立ち。服の間から覗く絹のような肌には、微かなれど切り傷が痛々しく存在する。
それでも尚笑って、〝光〟のセイバーに啖呵を切ってみせる。
彼女の見目は確かに弱々しいものだったが、この時、〝光〟のセイバーは言えも知れぬ風格を感じ取ったらしい。
彼の先程のような哀れみの目はもう沈め、一転して期待さえ覚えさせた。
単なる負け犬の遠吠えかも知れない。　追い込まれたが故の、捨て台詞的な側面も有ったかも知れない。
だが、もう一度、目を掛ける価値はあると。そう思えた。
「その言葉、嘘ではないな？　ならば仕切り直そう。次こそ、私を楽しませてみせろ！」
今までよりも、大きく、力強く剣を振る〝光〟のセイバー。
「っ、うぁぁぁ!!」

一度は受け止めてみせた。　だが、二度三度と同じことを繰り返されればその限りではない。元々女の細い腕と剣で、まさしく悪魔的な膂力を受け止めようというのが無理があるのだ。
その剣気に圧倒され、今までの風格も虚しく、構えた細剣と共に力無く〝闇〟のセイバーは吹き飛ばされる。
どこまでも、吹き飛ばされた勢いそのままに良く転がり、同じように力強くぶつかった。
「きゃぁ！」
高い声が聞こえた。　セイバーの凛とした声とは違う、少女の声。
絡まりあった二本の毛糸のように、ある種芸術的に彼女達は転がっていた。
もう一人の少女は、セイバーとは違い現代風の服を纏っている。
早い話が、後から追いついた真流だ。
追いつき、ようやく戦いに交じることが出来る。そんな矢先にセイバーに躓き、転ぶだけならまだしも数メートル転がったのである。多少混乱するのも仕方ない。
なんとも間の抜けた話だが、今が命を賭けた戦闘中であることを誰もが思い出したのは一瞬の間を置いてからだった。
「ねぇ、ちょっと！　セイバー！　どうしたの！」
地面に背中を付けながら、〝闇〟のセイバーの頭を揺らす真流。
無気力に頭をふらされるセイバーは、何やら力の抜けたように言った。
「す、すみません。　彼、中々力が強くて・・・私の力では受け止めきれませんでした・・・」
「彼？」
そこで、真流は初めて〝光〟のセイバーの姿を確認したらしい。驚きを隠さずに、彼をよく観察している。
「う、うわぁ・・・。　なんともあの子らしいサーヴァントだね・・・」
それだけではなく、マスターである少女のことも知っていたらしい。
セイバーの事は初めて知っただろうが、あの禍々しい少女の事が既

知だったのなら事前に教えてほしかった・・・というのが本音なのだが。ここはぐっと抑えよう。
　何はともあれ戦闘に視線を戻すと、剣を小手先で振り回しながら〝光〟のセイバーが歩み寄っているところだった。
「なるほどな。　そっちの望みはランサーだった・・・と言う訳か。確かに有効かもな・・私は、お前がランサーを従えていることは知っていても、それ以上の情報は持っていないからな。間違いなく、私はより不利になったと言える」
「はぁ。こうなること判ってたから、出来るだけ早く決着付けたかったんだけどねぇ」
　あの少女さえも、今だけは攻撃の手・・・もとい触手を休めて、セイバーと話し込んでいた。
「えぇっと、杏里ちゃん？　まさかこんなに早く再会の時が来るなんて思ってなかったんだけどなぁ」
　真流は立ち上がりながら、ゆっくりと少女に語りかけた。
「それがねぇ、真流お姉ちゃん。　私にも、それなりの事情があるんだ～。　ただ、お兄ちゃんを殺したいだけ～。だから、下がっててくれる？」
　まるで、幼気な子供が我儘を言ったかのように。　言葉の残酷さとは掛け離れた可憐さが杏里・・・と、呼ばれた少女から出る。
　先程まで使っていた腐食の魔術も、今だけは鳴りを潜めて、真流と杏里との花が咲くような黄色い声の会話に発展した。
「お兄ちゃんって、橙乃君の事？　困るなぁ、彼はウチのチームの貴重な仲間だよ？　早々に殺されちゃったりでもしたら、私が大変なことになっちゃうよ？」
「イイじゃんイイじゃん。　これ以上迷惑かけないからさぁ？　私の目的はお兄ちゃんだけ！　お兄ちゃんだけ殺せたら、後の人はどうでもいいんだもん！」
「そもそも、なんで彼のことをお兄ちゃんって呼んでるの？　私も初対面でお姉ちゃんって呼んでたけど」
「教えなーい！」

二人共、笑顔を崩さない所が恐ろしい。　談笑しているように見せかけて、双方心の中にドス黒いものを溜めているのが丸わかりだ。
そして、俺も正直そこは思うところだった。　俺が聞きたいことを聞いてくれた真流には感謝だが、そう簡単には行かないらしい。
「とにかく、お兄ちゃんを殺したいだけなのに・・・。邪魔するんなら、お姉ちゃんだって容赦しないよ？」
これ以上の会話は無駄だ。　杏里の笑顔の仮面が剥がれ・・・いや、笑顔は保ったままだが、質が変わったように見える。
俺を殺意の対象にしているのだが、彼女はそれだけじゃない。　俺を殺すためなら、何を犠牲にしたっていいという狂信者にも似た性根を抱えている。
アイツは危険だ、戦闘力、人格共に常軌を逸している。　この女の目標が、戦闘にある程度心得のある俺だったのはある種救いだったのかも知れない。
そうだ、救いだったのだ。
俺の胸中を知りもしない真流は、静かに懐の内に手を入れる。
手を取り出せば、そこにあったのは一丁の拳銃。　真流が・・・というより、誰の手にとっても多少巨大に見えるそれを、真流は簡単に持ってみせた。
だが、この場面での武装は、杏里への返答を言外に意味している。
彼女だったら、言葉にするならこう言いそうだ――『やりたいなら、私も一緒にやってみなよ』。　俺はそう言い放つ彼女の姿を想像して、少し笑みがこぼれてしまった。
「そっか、そういう事ね・・・。　じゃ、二人一緒に殺しちゃおう！　セイバー！それでいいよね!?」
「だそうだ。　私としては、二対一は避けたかったところだが――」
〝光〟のセイバーが漏らした言葉を、無理矢理に中断させる存在が有った。
真流が居た場所、その更に後方から、まさしく風のように現れたそれは、〝光〟のセイバーの胴に鑓を突き立てんと突撃、いや激突したのだ。

「嘘をつけよ」
ニヤリと音がするように笑い、ランサーはセイバーに向かって言った。
「テメェ、笑ってるぞ？　ホントはこうなるのを期待してただろ？」
槍を難なく剣で受け止めているセイバーは、指摘された表情を更に強めた。
図星を突かれても表情を直そうとしないという事は、彼自身その感情の出処を理解していたのだろう。
「本当は、正々堂々と、正面に向かい合ってから武器を構えたかったのだがな・・・。　元より此処は戦場、どうやって攻撃されようと文句はない！」
セイバーとランサー。　数度打ち合う。その様子は、今までのセイバー同士の打ち合いが猫か何かの喧嘩のように思えてしまう。
二人の動きの速さが違う。ぶつかりあう金属の音の重さが違う。躍動感が違う。――すべてが違う。
その様子は、事情を知らない人間が見れば、魅了さえされてしまうような戦いだった。
「嘘・・・セイバーと、同等だなんて・・・」
杏里、と呼ばれた少女はその戦いを見て冷や汗を一筋垂らしていた。
相当にそのサーヴァントに対して自信を持っていたのだろう。だが、あのランサーは神話に謳われる英雄だ。古今東西、彼に適う戦士はそう居ないだろう。そういう意味で言えば、むしろセイバーの方が健闘していよう。その証拠に、真流も誇らしげな顔をしていながら、少しばかりの驚きが見て取れる。
「むぅ。　こうなったら、先にマスターから！」
戦いを急いた杏里が、触腕を振り下ろす。
その速度を初めて目にした真流は反応しきれなかったらしい。触腕が迫るのを見ても立ち尽くすばかりだ。
「チッ！」
舌打ちと共に、俺は触腕を蹴飛ばす。

真流が驚き顔でこちらを見つめていた。　庇われたのがそんなに衝撃だったのか？
「つたく、真流！　戦えねぇなら離れてろ！」
「いや、戦えないはずないじゃん！　今のは反応が遅れちゃっただけ！　それよりも・・・」
真流は俺の体を見て、つぶやいた。
「言っとくけどね、橙乃君。　魔力を通さずに勝てる相手じゃないからね？」
「・・・すまねぇな。　ちょっと考え事してたんだ、すぐにやる」
俺の誤魔化しは果たして通じたのだろうか。なんにせよ、俺が魔術を使っていないことが見ただけでバレるなんて思っても居なかった。
「え？　まさか、今までずっと・・・？」
杏里がさらなる驚愕を露す。　それも無理はない。お前は今まで人を殺す魔術を使っていた。その相手が魔術を使わないで戦っていたなんて、俄には信じられないのだろう。
急速に魔力を通す。　身体強化の魔術は俺の十八番だ。いくら焦っていたとしても、この魔術の手順を踏み間違えるなんてことはない。今までは魔術を使わずに勝とうと思っていた。
が、状況が変わった。　確かに彼女の言い分通り、杏里は魔術を使わないで勝てる相手ではないらしい。
だから、此処からは本気だ。
「うっ・・・。　それが、なんだって言うの！お兄ちゃん！」
杏里の顔が変わる。俺の雰囲気の変化に圧倒されたか？　微妙な焦りの感情が、俺には感じられた。
先程俺に蹴飛ばされた触腕が、横から俺等を打ち倒そうと迫る。
速度は十分。　だが、それだけだ。触手の攻撃そのものに重さはない。それを速度で補っているから、パワーがあるように感じられるだけだ。
ゆっくりと振りかぶり、触手に拳をぶつける。それだけで、触腕ははるか天上に突き上げられた。
「はっ・・・？」

真流が驚いている暇はない。
今は触手が俺の攻撃に当てられて、はるか上にある。なら、今ほど攻撃しやすい状況はない。
俺がすぐ近くに居るのに気づいたのは、彼女が顎(おとがい)を上げてから少し経ってからだった。
その直後、俺は両手を突き出す。　掌をぶつけるようにして放つこの攻撃は、まともに喰らえば内臓からズタボロになるような危険な技だ。
だが、彼女は俺の掌が体に触れる直前、触手を間に挟み、直撃を防いだのだ。かなり力を込めて突き上げたはずだが、真逆俺の攻撃に間に合うとは思いもしなかった。彼女は後方に吹き飛ばされ、平原の端から鬱蒼と広がる森まで行ったはずだが、少なくともまだ戦える状況であるはずだ。
「俺の本当の実力を知った以上、今のように不意打ちをすることは難しいはずだ。　あの触手の力を図り損ねてたな・・・」
「まぁまぁ、橙乃君が実力を出してくれたようで助かったよ」
真流が俺の横に立った。
戦力が二倍になるだけで、此処まで心強くなるものか。今まで一人で戦ってきたから、分からないこともあるというものだ。俺は心を奮い立たせ、誰もに聞こえるように号令を上げた。
「セイバー、ランサー！　お前らはそのサーヴァントを押さえていろ！俺等は杏梨を倒す！」
「了解！」「承知しました！」
二人は快く受け入れてくれた。俺の言葉を、疑う余地なく正しいと思ってのことだろう。
マスターはマスターで。　サーヴァントはサーヴァントの戦いを。この戦場の理(ことわり)を漸く理解してきた。
ならば、俺等も反撃の狼煙を上げるとしよう。

剣二本、槍一本《前》

ふと、静寂が訪れる。
先程まで、目にも留まらぬ戦闘劇を繰り広げていた二騎のサーヴァントは、互いと向かい合った。
〝光〟のセイバーは油断無く相手の所作を見つめ、〝闇〟のランサーはそれと対称的に笑いながら相手を見据えている。二人共、マスターが遠くへと離れた途端、動きを止めて静観の姿勢に転じているのだ。
マスターという柵（しがらみ）無くして、互いの最後の歓談の機会を活かそうとしている・・・訳ではなさそうだ。
二人は思案しているのだ、この場にもう一人居るサーヴァントの処遇を。
〝闇〟のセイバー。
ランサーの傍らに立ちながらも、毅然ながら嫋やかな彼女は、先程まで〝光〟のセイバーに為す術無く斬り伏せられる直前の状況に居たような弱小サーヴァントである。
だが、彼女は離れようとしない。　それどころか――。
「まぁまぁ、やってみろよ。　案外弱いかもだぜ？」
「止めてください！　なんで私を押すんですか！　ちょっと！」
ランサーに、前面に押し出されていた。
〝光〟のセイバーはこの様子を黙って見ているわけだが・・・そろそろなんで黙っていたのか自分でもわからなくなってきていた。
本来は不意打ち上等というのが戦場の常であるのだが、目の前で揉められたら、乱すにしろ宥めるにしろ、それに介入できなくなるのは人の性（サガ）である。だが、我慢の限界というものがあるのは事実だ。現在の〝光〟のセイバーがそれに当たる。
〝闇〟のランサーとの闘争。それは、彼が待ち望んでいたとも言えるものだった。
彼自身は冷静な人間だ。戦闘時に余計な感情を持ち込むことは、油断や死に直結することは理解していて、それを実行するだけの理性が

ある。だが、感情と願望は切り捨てて考えれば、彼の願いは確かに戦いだった。少なからず喜びを感じていたのは否定できない。
何やら、恍惚の時間を中断させられた挙げ句、自分に歯の立たなかった女がもう一度矢面に立とうとしている。
気に食わない。　苛立ちが彼の心に募った。
だが、あの時彼女から感じた闘気が。　一度は跳ね除けてしまったとは言え。
間違いではないというのなら――――。
「私は、相手はどちらでも良い。　だから、そちらの先鋒を早急に決めてくれ」
この膠着した状態を速く脱するためなのか、〝光〟のセイバーは言い放った。
頭を掻きつつ、ということなので、少々この状況に困惑していた部分はあるようだが。結果としてこの言葉は、彼の望む展開を作り上げることになる。
「ほらほら、言われてるぜ？　さっさと腹括っちまえって！」
「はぁ・・・分かりました！　最初だけですよ！」
嫌々ながら、〝闇〟のセイバーが前面に立つ。
自らが望む状況でないとは言え、流石にこの世界に召喚されたサーヴァントである。戦うとなれば、構えを取らざるを得ないのが現状。だが、それは弱々しい。女であるということを除いたとしても、他の二人とは何処と無く違う、華奢さが見て取れる。
だが、いくら未熟だろうと、ここは戦場。
サーヴァントである以上、互いの価値は等価であり、弱々しいからと手加減することは許されず、首を刎ねる好機を見逃さない。
「これも騎士の使命、か・・・」
彼がひとりごちた事には誰も気づかなかった。
「女だろうと、手抜きはしないことは判っているな？」
「先程の手合わせで理解してますよ。　どうぞ遠慮無く」
先程の手合わせ――――紛れもなく、彼女は叩き伏せられた側だというのに、どうして自分に対してそこまで上から目線で物を言えるのだ

ろうか。　どうぞ遠慮なく、なんて、明らかに上に立つものの台詞だと言うのに・・・。
　余程恥知らずなのか、それとも隠し刀を持っているのか？　どちらにしろ。
「(思い切りぶつかる理由が一つ増えた・・・か)」
　彼の気質上、手加減しようと思っていても出来ない可能性があったので、思い切りぶつかれるのはこれ以上無く嬉しい事実である。
　剣を携え、構え直す。　その様を相手に見せつければ、今度は突撃だ。
　一息の間に、相手との間を詰める。　そして、剣を振りかぶる。
　重き剣に、比類なき剛力を併せて振るう。　この剣の前には、いかなる防禦さえも巻き込まれて吹き飛ばされてしまう。
　剣、腕、心。　どれが最も先に折れるか、という最悪の剣。まさしく悪魔的な剣撃だ。
　〝闇〟のセイバーは、それを剣で受け止めた。　だが、それは無意味だ。もう一度彼女を吹き飛ばしてしまうだけの話。ぶつかった剣を今一度押し込めば、女体ごとき紙のように吹き飛ばしてしまう。
　そのはずだった。
　〝闇〟のセイバーは、騎士剣を受けた細剣をひらりと翻らせ、同じように自らの身体も回転させた。
　自分を押し込む力を、〝闇〟のセイバーに受け止められる形で支えていた〝光〟のセイバーは、たったそれだけのことで前に倒れ込みそうになってしまう。
　素早く攻撃の姿勢に移行する彼女と違い、〝光〟のセイバーはすぐには防御の体勢に体を直せない。
　首に対して振り下ろされる細剣は、自分の命を刈り取るのに十分だと気づくのに数秒と要らず――――漸く、横に無様に転がり込むことで、なんとか剣を避けた。
「ヒュー、やるなぁ」
　この様子を傍目に見ていたランサーは、陽気に口笛と共に感嘆している。

対して〝光〟のセイバーは――――先程とは違う、打ち合いの結果に自分の感覚を疑ってしまう。
だが、待っている暇などないと。　休ませる時間など与えないとばかりに、転がり込んだセイバーに剣が降り注がれる。
急いで立ち上がり、〝光〟のセイバーは水平に迫る細剣を受け止める。
体格や、剣そのものの重さが違いすぎる。　ほんの少しの力で労せず剣を受け切る。
だが、彼女の剣は、防御の隙間から第二撃を迫るのだ。
剣を少々傾かせたのか、或いは体の角度を変えたのか。　いかなる方法を取ったかは、対峙している〝光〟のセイバーにも解らない。
彼に判ることと言えば、先程とは全く別物の苛烈さで、避け難い攻撃の連続で自らの首級を狙われているということだ。
防御と同時に攻撃を。　攻撃と同時に次の攻撃を。
単なる速度の差ではない。　現に、速度そのものはランサーよりは大きく劣る。しかし、それを技術で埋め、尚余りある厄介さを生み出していた。
「やっぱりオレの思い通りだったな。　お前はわざと手を抜いて、オレが来るのを待ってたわけだ」
一転変わって互角となったセイバー同士の戦いを眺めながら、ランサーが笑った。
「お前は実際見抜いてたんだろ？　〝光〟のセイバーとは互角の戦いが出来るってな。でも、絶対に負けたくなかったのか、それとも実力をあの小僧（匡生）から隠すためかは知らんが、一計を案じたんだろ。俺等（サーヴァント）と彼奴等（マスター）を分断して、思いっ切り戦おうってな」
ランサーの見立ては概ね外れてはいなかった。
自らの力量を測り、相手の力量を見定めた結果。〝闇〟のセイバーは、〝光〟と戦ったら五分の戦いになるという結論に至った。
五分の戦い。　それは、勝つ確率と負ける確率が半々であるという事。実際はそう簡単には行かないだろうが、おおまかにはそういう解釈ができる。

この事実に対しての受け止め方は人それぞれだ。　他人がどうあれ、〝闇〟のセイバーはこう感じた。
足りないと。
自分と相手の力量が同じだろうと、自分は普通じゃない。生前の自分が思い出せず、故に万全ではなく、更に宝具も展開できない。
宝具の力は良くも悪くも偉大だ。　その切り札（ジョーカー）が相手の手のみにあるという状況は、多少の有利を捻じ曲げられる。それは避けたかった。
下手に追い込み、宝具を展開されれば、負けるのは必定。なら、少しでも勝つ努力を怠るべきではない。だから、手加減をしたのだ。一瞬でも勝つべきではなく、それでいてマスターである匡生を狙われないように多少の魅力を感じさせつつ。
結果的に、その目論見は成功し、自分の戦力にランサーの力が上乗せされることになる。
「主従併せて、生死を賭けた戦いで手加減してたって訳だ。　相当な悪人だな、二人共よ？」
ランサーが軽口を叩く。
それに彼女は、眉を顰めた。剣を振る手を止め、ランサーに対して向き直る。
「その言葉、あまり良くは感じませんね。　私は確（しっか）りとした理由が有ったのです。必要な手順を踏んだだけなのにそう言われるのは心外ですよ！」
侃侃、という言葉がよく似合うように彼女はまくし立てる。まるで、今はランサーを糾弾することが何よりも優先されるかのように。
それこそ、背後から迫られる凶刃よりも。
戦場に一度（ひとたび）立てば、不意討ちはされるほうに責任がある。背後を向いたのが好機と捉えたか、〝光〟のセイバーはなりふり構わずに、頭を砕くかのように剣を振り抜いた。
だが、矢張りと言うべきか、その剣はランサーの槍に阻まれることになる。小気味いい音を立てて、金属同士がぶつかりあう音が反響した。

その音を背中に受けてから、〝闇〟のセイバーとランサーは二人共、綺麗に笑った。
「約束、覚えていてくれたみたいですね。　てっきり観るのに夢中で忘れているものかと」
心にもない台詞を言って、セイバーはランサーの背後に回った。
「ほざけ。　俺は実直な事で有名な男だぜ？」
二人して、意図が噛み合った事を確かめ合う。
この状況、《光》にとってはかなり拙（マズ）い状況であることには間違いなかった。
力、速度に優れたランサーが前面に立ち。　技術において無二だが、些か羸弱（るいじゃく）さが目立つセイバーは後援に徹する。
《闇》が取れ得る最強の布陣だ。これに対峙している〝光〟のセイバーは、剣を構えながらも、一粒滴る冷や汗に遅まきながら気づいた。
「なるほどな。　私はそれを打ち破らなければならない・・・と」
正直、出来る気はしなかった。自分で口にしておきながら、その可能性は遥かに低い。雨粒を避けて歩くが如き難行。
戦いそのものに快感を見出す気質ではないがゆえに、本来ここで立ち向かう所以はない。
だが、彼の脳裏に浮かぶのは、うら若き自らのマスターの後ろ姿。
「・・・そうだな、やってやれない事はないのだろう」
剣を構え直す。　ここで自らが折れてはならないと、奮い立たせ。
今一度、セイバーとランサーの視線がぶつかりあった。　それを合図に、もう一度金属がぶつかりあう。

剣二本、槍一本《後》

野鳥は羽を広げた。　鼬は野を駆けた。
その思考の所以は一つ、この場から逃げるために。
剣が舞い、槍が走る。その度に爆発にも似た音と衝撃を奏でて轟く。
その音を聞いた動物は、根源的な本能が生命の危機を告げる。この場所では植物でさえ身を竦ませた。
そうなるまでに、この場所は戦場としても超一級なのだ。死線があるとすれば、それはここだった。
〝光〟のセイバー、〝闇〟のランサー。ステータスはサーヴァントとしても最大級を誇る彼ら二人がぶつかり合い、戦いはこれ以上無い程に激化していた。
しかし、時間と共に、戦況は少しずつ色を帯びてきた。
セイバーの体に、また一つ傷が刻まれる。剣で軌道を逸らしたといえど、肩に槍を受けては、無傷と笑い飛ばすことは難しい。既にセイバーの体は、出来損ないの甜瓜（メロン）の様に傷を負っていた。
対する相手、ランサーはピンピンしたものだ。セイバーが疑わしく思うのも仕方ないこと。
セイバーの剣は、いずれも苛烈なものだ。大地を抉り、風をも斬る。そんな剣に幾度となく掠っているのは間違いない。セイバーも確かに手応えを感じているのだ。証拠としてランサーの衣服には切れ込みが幾つも入っている。しかし、ランサーの体には一つとして傷が残っていない。笑いながら突撃してくるランサーに、違和感を覚えるのはどんなに愚鈍でも当たり前のことだ。
その理由には、セイバーでも心当たりが有った。詳細には行き当たっておらずとも、その原理には見当はついている。それはほぼ確実に正解だ。
マスターは近くには居ない、即ち治癒術式を使われているなんてことは有り得ない。ならば、残された物が真実だ。
「神からの寵愛か？　それとも、因果崩壊か？　なんにせよ、随分頑丈

な体を持っているようだな？」
「はっ、敵に褒められるなんてな。　こんな体に生まれた甲斐があったってもんだ！」
　そのランサーははぐらかしながらも、言外に、それは正解だ、と告げていた。
　言えないのは理由がある。この頑丈さだからこそ、ランサーは自らのマスターの支援を受けないというリスクと天秤で測るまでもなく、〝闇〟のセイバーの分断作戦に付き合ったのだから。
『無燃無双の薪（ドクサ・サタナース）』。〝闇〟のランサー、メレアグロスがそうたる所以こそ、この宝具である。彼と同時に召喚された薪が、薪としての形を保っていられるならば。壊されたり、燃やされたりすることがなければ、彼は死ぬことはない。
　神を殺す一撃であろうと、世界を滅ぼす炎であろうと、彼には無意味。Ａランク以上の神性、或いは神性特効という極度に達成が難しい条件を満たしたとしても、彼に通るダメージはその五割にまで減衰される。アキレウスの祝福にも並ぶ、ギリシャ神話に名高い英雄の不死性の極致こそがこの宝具だ。
　ただし、逆も然り。伝承の通り、薪を燃やされてしまえば彼は二度目の死を遂げる。だからこそ、彼は分断作戦を選んだのだ。真流を護るために居残るという選択肢もあったろうが、真流があの触手に倒されるようならばランサーは彼女を信用した自分の判断を恨むだけだろう。セイバーのマスターと二人がかりになって尚あの程度の試練に打ち勝てぬようなら、どの道我らに勝利の目はない。だとしたら、苦難を伴いそうな、より勝利に困難がつきまとうこちらを選択するべきだ。これはランサーの狩人としての勘であり、彼がこの世で一番信頼しているものの内一つだった。
　事実、こちらのセイバーでは、あの悪魔の腕に善戦することは出来ようと、完膚無きまでの勝利は無理だった。筋力・耐久性に長けたランサーが前線で戦い、小手先の技量で翻弄するセイバーが支援に回る判断は、この場において最善手であった。
　誤算があるとすれば、それは〝光〟のセイバーの能力が想定より高

かったことだろうか。彼もまた何者かの寵愛を受けている可能性がある、そう思えるほどの実力の拮抗。しかし、〝闇〟のセイバーとの共闘。そして、宝具の存在があるために、〝光〟のセイバーの敗北は時間の問題だった。

ここから勝敗が逆転する要素があるならば、それは――。

この中で唯一、戦闘力においては大きく劣るものがある〝闇〟のセイバーだけだろう。

対する〝光〟のセイバーは死力を尽かせ、限界はとうに超えていた。

〝闇〟のランサーでさえそうだが、セイバーのは度が越えている。おそらく霊格からして違うのだろう。相手が神話に踊る英雄だとするならば、こちらは卑賤なことこの上ない。知名度・基礎の力でさえ、自分とは段違いだ。

宝具の効果があるから力量そのものは追いついているとはいえ、生前積み上げた技術や、生まれの差までは今更埋められるものではない。いいや、最初から埋められる歴史(もの)では無かったのだろうか。

きっと、目の前にいる二人は人類史に刻まれた、名立たる英雄の内二人なのだろう。

ならば、自分に敵う道理などあるはずがない。元来ならば、英霊として抑止の環に登録されるまでもないこの賤しき身では、矢張り届くはずもない世界なのか。

――いいや、そのはずはない。

既に千回剣を振るい、万回槍を受けたではないか。これこそ、名もなき自分が英雄と戦いを繰り広げることが出来た証左ではないか。

一回だけで良い。　この体を動かすに足る好機を、私に授けてくれ。

もしも、この戦いを見ていてくださっているのなら。　主よ――

時間が経つごとに、次第に〝光〟のセイバーは劣勢を強いられていた。

だが、それでさえも。ある一点さえ過ぎ去ってしまえば、奇跡的なまでに持ちこたえるセイバーの姿があった。

ランサーの猛攻、セイバーの追撃にさえ、背筋を曲げずに受け切るセイバーの耐久力に、互いに二人はしびれを切らしていたのは確かだった。

爆風は吹き荒れ、火花はさながら太陽のようにこの戦場を照らす。異常なこの場にあっても、三人は半ば食傷気味になっていた。

こんな世界において、先に均衡を崩そうとしたのはランサーだった。

螺旋のように繰り出される斬撃の嵐、その中に一糸の隙を見つけたのはランサーに特有の狩猟者の眼に拠るものであって、両セイバーに割り込む事が出来るようなものではなかった。

毫釐（ごうり）な意識の空白。

その程度の時間を利用して、ランサーは自分の手槍を繰り、セイバーの剣を一際強く弾いた。

ランサーが全力を以て、身の丈以上の岩壁さえも打ち砕くような一撃だ。〝闇〟のセイバーであっても俄に耐えきれるものではないのか、剣は拍子に宙を舞った。

その剣が落ち始めるよりも速く、風よりも疾く、〝闇〟のセイバーは地を駆けた。

そして、文字通り一閃。首を駆るように、細剣は振り下ろされる。この場において〝力〟や〝速さ〟では勝るものは何一つなくとも、〝技〟においては彼らに勝らないとも劣らぬ力量を持っていた。

故に、必然的に、過たず首を切り落とし、詩の余韻のように頭と体が分かれるのを待つのみだ。

――少なくとも、それが〝闇〟の二人の理想の結果だった。理想は覆されるものだと判っていても、薄紙がやったように、もう一度容易に覆し返せるものだと思っていた。

〝光〟のセイバーの鋼鉄の意志を、真に測りそこねたのは、彼女たちの最も大きな失態だったのだ。

剣は受け止められた。　その意志のごとく硬い彼の手に握りしめられて。

「負けるわけには、いかぬのだ・・・。　私の、この腕に掛けて！」

〝光〟のセイバーの、それは魂の叫びと形容してもいいほどに、激昂にも近い咆哮だった。
そして、その叫びと同時。〝闇〟のセイバーの手が握っていた剣を無造作に奪い取る。女の細腕ではその怪力に適うはずもなく、寧ろ剣と一緒に吹き飛ばされないようにすることに注力しなければならなかったぐらいだ。
しかし、それでさえも却って仇になる。　続いて繰り出される手に反応しきれず、〝闇〟のセイバーは糸のように細い首を乱暴に掴まれる。そのまま、子供をそうするように、〝光〟のセイバーは簡単に片手で彼女を持ち上げた。
今、彼女は首のみを掴まれた状態で宙吊りになっている状態。苦痛が伴わないはずもない。
しかし、彼女が幾ら尽力しても〝光〟のセイバーが手を離す素振りを見せることはない。叩けど、抓れど、表情を一切変えずに持ち上げたままだ。
「セイバー!」
ランサーの叫びが轟く。それはどちらに向かっての叫びか、その疑問を置き去りにランサーは駆けた。
そして、槍がセイバーの腕に届くその寸前。　持っていた剣を地面に突き立て、〝光〟のセイバーは持ち上げた腕とは反対の拳を握りしめ、そのままランサーの顔面に向かって振り抜いた。
その攻撃にランサーは止まらずを得ない。そのままセイバーはランサーの頭を掴み、地面に叩きつける。
ランサーはその運動に逆らうことが出来ず、ただ俯せにに地に伏すのみだった。そして、ランサーの肢体を踏みつけ、彼の動きを封じる。
ランサーも、その体をもう一度、文字通り立て直そうと力を込める。だが、彼が全身の力を結集させたとしても、〝光〟のセイバーの脚力を押し返すことは出来なかった。
「今はこうなってしまったが。もしもの話だ」
ランサーの頭上から声が響く。　その声は、奇妙なことに哀愁にも似た熱が籠もっていた。

「もしも、君の槍が、〝闇〟のセイバーを助けるためでなく、〝光〟のセイバーを倒すために突き出されたのならば。今頃転がっていたのは私の方だったのかも知れない。」
英雄に力で劣る自分、英霊に技で劣る自分。　もしも、英雄に正面から挑まれたなら、健闘はすれど勝利はない。
自分は、相手が英雄故に苦戦を強いられた。だが、
「君にそれが判っていたとしても、君は彼女を助けるために槍を構えただろう。それが、英雄の素質。それが私と君の差だ。
魂の奥底に刻まれた、英雄としての心構えは。　君自身にさえ、覆せるものではないのだから」
ランサーは何処までも英雄だ。　それは不可侵の理。　〝光〟のセイバーは、そこを突いたに過ぎない。
〝闇〟は、英雄であるが故に有利であったが、英雄であるが故に敗北を喫したのだ。
「それでは、この勝負を終わらせるとしよう。　私に君を倒すことは出来ないから、こうするしかない」
そういって、〝光〟のセイバーは傍らに突き立てた、〝闇〟のセイバーが持っていた細剣を、彼の心臓に刺し直した。
ランサーの肺から空気が漏れる。　心臓を貫かれた程度の攻撃では、彼に痛みは産まれることはない。だが、体勢からして、彼は自分の心臓に突き刺さった剣に手を着けることが出来ない。セイバーの怪力も合わさり、ランサーでさえ身じろぎ出来ない状況となった。
「これで、死ななかったとしても動くことは出来まい。　生きていたとしたら、君には伝書鳩となってもらおう。
聖杯大戦の開戦、そして、〝光〟の軍勢の強大さを語るための礎となって頂く。そのために、彼女の首は頂いていこう」
〝光〟のセイバーの手に力が加わる。　このままでは、剣を奪い取るのと同じ様に、彼女の首も簡単に手折られるだろう。
その光景を見て、ランサーは歯噛みすることしか出来なかった。
自分に手出しすることは出来ず、ただ見ているだけ。
逆転の一糸は、この場には無かった。ただ約束された結末、開戦直

ぐに〝闇〟のセイバーが落命で緒戦を飾るのみ。
この場で、〝闇〟のセイバーの敗北を防げるものが有ったとしたらそれは、この世の人間全ての想像力を上回る奇跡か或いは、
この場の登場人物全員を出し抜く機転か伏線だけだ。
――――〝光〟のセイバーの腕がだらしなく下がる。肩口に小さく空いた穴から鮮やかな赤い血が滴り落ちる。　この場の誰もが起こった事象に説明をつけられなかった。魔術？　或いは宝具か？　幾つもの仮説が〝光〟のセイバーを駆け巡る。
一瞬遅れて、彼女が手に一つの塊を持っている事に気がつく。黒く、手のひらに丁度収まらないような大きさの、金属の塊。　だが、それが何を引き起こしたかなんて見当もつかない
だが、〝闇〟のランサーには、彼女が持っていた塊に見覚えが有った。　だが、なぜここに有るのかが分からない。
・・・あれは確か、スズカが持っていた物じゃなかったのか。
「私のスキルの影響なのでしょうか、それとも、これを生前私は持っていたのでしょうか？　自分でも判りません。私は、これの使い方を知っていました」
手の中で、静かに回される銃は、その言葉の証明であるかのように滑らかだった。
「勘違いなさらないように言いましょう。　銃(これ)そのものは私の宝具ではありません。私は、これを持って現界した訳ではなく、拝借だけのこと」
「おかしいだろう・・・では、なぜ、私にダメージを与えることが出来る・・・？それが君の武器でないというのなら、他のサーヴァントから借り受けたものだというのか？」
〝光〟のセイバーの疑問は尤もだ。　サーヴァントは、霊体(サーヴァント)であるからこそ干渉できる。仮に核兵器のように強大な破壊力で立ち向かったとしても、単に物理的な干渉ではサーヴァントに対して意味をなさない。
だが、彼女はその問いに対する答えを持っていないからこそ、首を横に振りながらランサーに歩み寄る。

「さぁ。　私に有ったのは、こういう事が出来るという確信だけでしたよ」

〝闇〟のセイバーは、ランサーに突き刺さっていた剣を抜き取る。そして、彼女は構え直した。

剣と銃。　歪な組み合わせであるというのに、彼女の構えには一切の迷いがなく、出処が分からない威圧感さえ感じさせた。

〝闇〟のセイバーは、紫石（アメジスト）の様に鋭い目つきで見つめる。　〝光〟のセイバーは剣を拾い直し、構えを取る。

最優のサーヴァントとされる剣士（セイバー）。　二人が真の意味で向かい合うところを倒れながら見つめていたランサーは、彼女がこの場で毅然と立てる理由を理解した。

彼女は、この場に立つべき力量を持っていない。　それはこの場にいる誰もが全会一致で賛同する意見であろう。彼女自身であってもそれは変わらない。

かと言って、この場で畏れなく立ち向かうには、圧倒的に足りない力量を埋め合わせるものが必要だ。ランサーや、〝光〟のセイバーは、それは彼女の剣技だと思っていたのだ。

だがそれは違った。　剣技という基準（バロメータ）でさえ些細な違い。決して越えられない壁ではないという事。

ならば、彼女を直立させる所以とは？　それは体技（フィジカル）で敵わないであるが故の、冴え渡る作戦、身を捨つる覚悟。そういった類の物は、辛くも彼らが不要と切り捨ててきたものだった。

拳銃が火を噴く、剣が残光と共に空を裂く。　それらを同時に、勝手知ったる自らの身体であるかのように振り回す〝闇〟のセイバーの姿は、この場の誰よりも美しく、この場の誰よりも異常だった。

数回の剣戟、ランサーのそれと比べれば、遥かに弱々しいそれが、響くと言うよりは単に発せられた。

しかし、長い時間を経たせる事なく、戦場の最後の光景は、〝闇〟が〝光〟をこれ以上無い程に追い詰めた姿。

細剣は首筋に当てられて、銃口は眉間に突きつけられて、哀れにもただ跪くことしか出来ない〝光〟のセイバーの姿が、この戦いの終焉

を物語っていた。
「どうした？　私は命乞いをするような、殊勝なサーヴァントでは無いんでね。殺すなら今に限るぞ。マスターが気づいて令呪を使わない内にな」
〝光〟のセイバーは、心の底からそう思って台詞を出す。だが、〝闇〟のセイバーはそうは行かないと首を振った。
「いいえ。貴方には質問に答えていただきます。　それまで、貴方のことは殺しません」
「質問？」
「はい」
そのやり取りの後、彼女は顔を思いっきり近づけて、脅すというよりは囁くようにして問いかけた。
「貴方は、私の事を知っているのですか？」
暫く、沈黙がこの場を支配した。　如何に百戦錬磨のサーヴァントと言えど、このシチュエーションになるとは思えなかったのだろう。
「・・・いえ、言い方を変えましょう。　貴方は生前私に会ったことが有るのですか？」
戦闘中と同じく、ごく真面目な顔つきでそう問いかける彼女は、ともすれば滑稽に見えなくもなかった。
風が野原を撫でる音がさざめいた後に、ランサーが吹き出す音がこの場に聞こえた次の音だった。
「くはっ！　なんだそりゃ！　それを訊くにしても、もっと良い時と場所があっただろうに！」
「えっと・・・あの、いけなかったでしょうか？」
ふとすれば泣いてしまいそうな表情だ。　致し方ない、彼女が真面目に質問していたからこそランサーも我慢が効かなかったのだ。
「いや、良いんじゃねぇの？　敗者を支配できんのは、勝者の特権ってやつだ。セイバーさんよ、オレからも頼まぁ。敵に会うたびこんな事やられたんじゃ、オレの腹筋が持たねぇからな」
「それってどういう事ですか・・・」
戦闘直後とは思えない、穏やかな雰囲気が徐々に場を整えつつ有っ

た。次第に〝光〟のセイバーも毒気を抜かれた上に、ランサーの言葉にも一理あるだろうと、返答するために自分の生前の記憶を洗い出してみる。
そして、導き出した回答は。
「すまんな。　私では君の力になれそうにない」
該当する人間が居なかった。
それを聞いた彼女は、顔に影を落とした。　どうやら本気でショックだったようである。
「そうですか・・・残念です」
「気を落とすなって。　世の中そんな事ばかりだ。　答えてくれただけ良しとしようぜ？」
静かにうなずく〝闇〟のセイバー。　それに対して、ランサーは気軽に返した。
彼女はもう一度頷いて、力を少しずつ込めていく。〝光〟のセイバーの首に、段々と深く赤い線が彫られていく。
後数秒もすれば、彼女の勝利は決定したのだろう。
そこに、この場を支配するほどの閃光がきらめいた。青くも力強い光は、燃え盛る恒星の中に放り込まれたような錯覚を彼らに与えた。
〝闇〟の二人はそれに対して目を腕で覆うぐらいの抵抗しかできず、対して〝光〟のセイバーは冷静に彼女を蹴り飛ばし、瞬時に距離をとった。
閃光が終わった時、そこには戦いの始まりと同じ様に、お互いの距離感を図るようにして立ち尽くす三人の姿があった。
「仕切り直し、とさせて頂こう。どうやら私一人では君たちの相手には力不足なようだ」
〝光〟のセイバーが半ば一方的に告げた。
二人は返事をしようとするが、それを待たずにセイバーは霊体となる。こうなってしまえば、お互いに干渉することは不可能となり、彼の思惑通りに仕切り直しとするしかなくなる。
「一体何が・・・」
どちらが言ったか、だがそれは残された二人に共通した遺憾の思い

だった。
何が起こったか分からないまま取り残された二人は、互いに互いを見合わせた。
一瞬、と言うには長すぎた光輝。それの原因を探りたい気持ちが湧き上がる。
だが、二人は心を立て直す。ここで何が起こっていたとしても、戦いが一旦収まったのだ、マスターの所に戻ったほうが良いのだろう。
その思いは一致し、二人は夜の野原を駆け抜けた。

黒い激突

夜の森で、艶やかに触手が翻った。
叩きつける、薙ぐ、突き立てる。その動きを素早く行い、次第に人の体では反応しきれなくなる。腐食は次第に同心円状に広がっていき、自分が立っている地面さえも黒々と変色していく。
蹂躙、その言葉が最も似合う。人間二人の手には余る舞台だ。
俺でも、自分の肉体を極限まで高めて、ようやく触手の一撃を避け続けることが出来るのだ。
彼女――――杏梨と呼ばれていた少女の戦闘力は、先程会ったライダーを除いてしまえば、俺が今まで会った中で余裕で頂点に立っているのは間違いないんだ。
「あっははは！　楽しいね！楽しいね！　お兄ちゃんとこんな事が出来るのが夢みたい！いつまででも続けられればいいのに！」
「俺には、お前みたいな妹は居ねぇって何回言えば良いんだ!!」
目を爛々と輝かせ。口角を切れそうなほど上げ。心底楽しそうな声を口遊み。
まだまだ杏里には余裕があるらしい。こちらには、攻める手段が少なく困っているんだ。
ただでさえ、相手取るのが厳しい相手だというのに。
「嗚呼、楽しいなぁ・・・！　ほら、踊ってよ！」
そう喚くように言いながら、また触手を閃めかせる。
このフィールド自体は、俺に有利だ。森は視界を狭めるのに効果的で、身が軽やかな俺がスピーディーに動くことで杏梨の触手に対応する算段だった。だが、触手のパワーと腐食作用が強く、思ったように動くことが出来ない。
結果として俺はさっきと同じように、身体強化を限界まで引き上げ、トラックが人間をそうするように触手を弾き飛ばす。そうするしか無いのだ。
触れるのは一瞬だが、数回蓄積されたダメージが手袋に響いている。着け心地が悪くなり、内側がささくれ立ってきた。

体も魔術を行使し過ぎた反動がやってくる。全身を螺子(ネジ)で固定されるような感覚、きっと後数分もこの状態を。或いは限界を数度迎えたならば。俺の体は壊死してしまうだろう。

「ふふっ、お兄ちゃん。踊り疲れちゃった？　休ませてあげよっか？」

むかっ腹の立つ声だ。網膜に張り付くように印象的な笑顔も一緒になって、自然と腹が立つ。

俺はそれを見て、挑発には乗ってやろうと力をもう一度脚に込める。

「ほざけ！」

さっき触手を弾き飛ばしたのと変わらない速度で、杏里に直線的な攻撃を仕掛ける。

今まではそれで問題なかったのだ、考えなしの突撃であろうと、魔術を知ること無い人間には、いや知っていたとしても、来ることが判っても反応できる速度ではないからだ。

だが、目の前の相手は違う。戦い慣れでもしているのか、俺の突撃でどう動くかをある程度予測が出来るらしい。

予測さえできれば、後は彼女は触腕を壁に見立てて防ぐだけで良い。

何度目かになる激突。触手はパワーに優れない。だから、簡単に突き飛ばすことが出来る。

だがスピードはそうでもない。俺と拮抗しうる程度には素早い・・・俺には敵わないが、この場合においてはそれで十分なんだ。

なぜなら、長い体。蛇が鎌首をもたげるようにして、もう一度触腕の腹を叩きつける。

「そーれっ！」

子供のような声を上げるが、その実態は相手を腐らせて殺すことだ。

俺は身体強化の限界を保ちながら、とっさに出た手で、もう一度弾き飛ばした。

また一段と、手袋が崩壊の度合いを増す。

俺の体も悲鳴を上げていた。螺子は錆び、骨は灼け始めている。

「はぁ・・・はぁ・・・」
息が切れ始めてきたが、その声でさえ遠くから響くようだ。視界も霞み始めている。
もしかして、同じようにして俺の思考も鈍化しているのだろうか。骨を前に出された犬のように、真っ直ぐ突き進むしか出来なくなっているのだろうか？　もうそんな事さえ分からない。
「私は判ってるよ？　お兄ちゃん」
杏梨の声が嫌に脳に反響する。
「この森に私を追い込んだ理由は、自分に有利な場所に戦場を移す他に、私の伺い知れぬ所で真流お姉ちゃんにトドメを刺してもらおうとしてるんでしょ？　大方、どこかで静かに狙撃の準備でもしてるんじゃないかな？」
「・・・どうだかな」
返事から表情をさとられないように、必死に脳をクールダウンする。　だが、火照った体は考えるより前に声を口に出してしまうほどに、思考を放棄させていく。
「あの原っぱだと、真流お姉ちゃんを守って戦えるか微妙だったもんねぇ。　懸命な判断かも知れない。でも、それならさっさと逃げちゃえばよかった。　少なくとも、こんな所で消耗するよりかは、戦いをサーヴァントに任せればよかったんだよ。判ってたでしょ？」
過剰に熱せられた体を、投げかけられた言葉で冷やす。ほんの少し取り戻された思考を必死に掻き回し、返答を編む。
「いいや、真流は守る。お前も倒す・・・。　それで俺の勝ちだ・・・」
「・・・そう」
ほんの少し、飽きたような顔を杏里は浮かべた。
不思議に思う暇もなく、触腕が動く。俺の後ろで真流が立っていることを確認し、避けられないことを確信する。
もう一度弾き飛ばす。　また一段と崩壊が進む。
『早く逃げろ』と、言葉に出されなくても判っていた。アイツの背中は、言葉以上に態度でその心情を示していたからだ。

黒々と光る触腕、魔術によって強化された肉体。どちらも芸術にまで昇華されたような、超一流の代物だった。
私がここに居るのが場違いなのかという錯覚さえ思わせる、これはまさしくサーヴァント同士の衝突にも似た、災害の極致なのだろう。
本来なら、私は背を向けて逃げるべきだ。本能がそう囁きかける。時間が経つごとに、それは囁きから問いかけに、叫びに変わっていくのかな。
私は、ほんの少し彼が止まった時間を見つけ、口を開く。
「私の事は気にしなくていいよ。　武器もあるし、体を使うのも叩き込まれたから」
震える手をもう一方で押さえ込み、精一杯不敵に笑ったつもりで言葉を編み出した。
ほんの少し、時間が止まったように感じた。今まで止まること無く、ミシンのように動いていた彼は、私の宣告によって電源を落とされたのだ。
「信頼して、良いんだな？」
訝しむような声が頭上から降ってくる。当然だ、私はさっきまで足がすくんで動くことすら敵わなかったんだ。
でも、もう止まってなんていられない。
黒戴は強い、戦いを見てて判った。きっと橙乃でさえ、彼女には手も足も出せないのかも知れない。
それはきっと、私が足手まといだったからだ。私が何も出来なかったから、出来ていなかったからだ。
だったら、私が変わらなきゃいけない。足手まといから、しっかりとした彼の相棒に。
静かに私はうなずく。　それを見た橙乃は顔を目の前の敵に戻した。
そこから、戦いは激化した。橙乃の立ち回りは、明らかに別の人間の様になっていたからだ。
今まで直線の動きでしか戦いをしていなかった橙乃は、周囲の木々や素早く動く触腕さえ巧みに利用した頭脳的、三次元的な挙動を見せ

ていた。
それはまるで時空さえ自由自在に操っているようだった。
さっきまで余裕の笑みを崩さずに居た杏里ちゃんでさえ、時々苦悶の声が混じっているのが見える。
なんで、そんな事が出来ることを封印して、直線的な動きをしていたのか。　私は何となく分かる気がした。
私が、足手まといだったから、だ。　橙乃は私を守るために、守るためだけに、私をすぐに守りに行ける、黒戴と私の直線上だけで戦っていた。
だったら、今の素晴らしい動きをしている本意は、『次に攻撃されても、守れない』って事なのかも知れない。
私はそれを心の奥底で考えながら、懐に手を忍ばせる。
拳銃を探り、片方無くなっていることに気づいた。ああ、そういえば、さっき彼女がぶつかってきた時に言ってたっけ。
〝すみませんが、借りますよ〟
正直、あの瞬間には彼女が何を思っていたのか分からなかった。今になってようやく盗まれたことに気づくなんて、彼女が相当な悪者だったのか、それとも私が間抜けていたのか。多分両方なんだろう。本当に私は莫迦だった。
そっと安全装置（セーフティ）を外す。　これが私の初陣だ、せめてアイツの笑い種にならないようにしないと。
「何笑ってるの？」
声に顔を上げる、すると黒戴がこちらを見て攻撃態勢を取っていた・・・というか、既に触手をこちらに飛ばしてきている。
だけど、橙乃の牽制と、距離が離れてることもあって、見てから十分避けることが出来る。
当然追撃しようともう一度迫る黒い腕。だけど、こっちだって丸腰というわけでもない。
避けた間に、拳銃を構え、一度二度と引き金を引く。只事ではない反動が腕を襲うけれど、正直慣れてしまい、取り沙汰する程でもない。
杏梨ちゃんは、銃撃は流石に無事では済まないと判断したのか、触

手を曲げて盾に見立てて弾を防ぐ。見た目以上に硬く作ってあるのか、拳銃の弾は何処へともなく弾かれていった。
だけど、今彼女と敵対してるのは私だけじゃない。杏里ちゃんの背後から、橙乃が拳を振るっているのが私からは丸見えだ。
「っ・・・・!」
短く杏梨ちゃんが息を漏らすのが見えた。流石に大振りで振るわれたパンチは防ぐことが出来たらしいけど、その陽動に誘われた形だった。
二撃目として密かに放たれた左手での一撃は、完全に防ぎ切ることが出来なかったみたい。小さく、頬が切れて血が数滴滴り落ちる。
「おや？　・・・なるほどね、さっきとは違うって訳かぁ」
自分で触れて漸く気づいたみたいな声を出した後に、ハイエナのように笑みを浮かべる。どうやら、自分が傷つけられたという事実に対しては全く恐怖は無いらしく、ただ淡々と『自分の見当が甘かった』という風な本音と一緒に、でも辛辣な程の優越感を覚えているらしい。
対する橙乃も、声を出さずに、構えを取り直す。その東洋拳術にもボクシングにも似たような佇まいの裏側には、鷲のように鋭く、或いは撮影機（カメラ）のように予断無く、じっと黒戴の動きを見極めんとする眼が見える。
二人が向かい合う姿は、まるでピンと張られたバイオリンの弦だった。二人の闘気に当てられて、彼らが風を巻き起こしている感覚さえ感じ取ってしまう。もしくは、私も知らない内に弦の一部に縫い込まれたのかも知れない。闘気の威圧の中に、私は踏み込まなければならないんだから。
私が駈けたのが先か、二人がぶつかったのが先か。相対してる私でも分からないぐらい同時に、私達全員が動き出した。弦が切られて跳ねるように。
触手という腕と、本物の俺の腕。　形こそ全く違うが、その本質は似通っていた。
一度本格的な一撃を入れてしまえば、そこでお終（しま）い。入れられても

お終い。詰まる所、この勝負はどちらが攻撃を当てるか、そこに集約していた。
そのために必要なことは、相手を翻弄すること。俺が空を跳ね、そこを触手が捲り上げる。
共に相手を陥れることを考え抜く中で、次第に杏里の顔が焦燥にゆがみ始める。その訳は、杏里の背後に有った。
森の中から、思いの外静かに銃弾が飛ぶ。消音器でも着けているのか、銃声はかなり小さかった。注意していなければ聞き逃してしまうレベルだ。
しかし、杏里は気づいていた、或いは気づいていなくても触手が自動でそうやって動くのか、とぐろを巻くようにして触手は杏里を守った。だが、そうやって守れば、リーチは短くなり、触手の可動範囲は短くなる。
俺はそれを明確な攻め時だと判断して、攻撃を仕掛ける。そりゃ、何度か守られるし、急所に当てられるはずもない。だが、触手は奇襲には強いが猛襲には弱いらしい。一度の交錯、その瞬間に杏里の脚を攻撃することが出来た。
たまらず杏里は手を地面につく。俺はここで追撃を仕掛けることも考えたが、杏里は触手を生きている植物のように動かし、迎撃の手段を取っている。ここで攻めるのは危険だ。
それに、どこか脳裏に嫌な予感がチラつく。　気のせいだと振り切りたいのは確かなんだが・・・。
俺は立ち尽くして、杏里が立ち上がるのを待った。　地面に手を付けていた杏里は、もうすぐ立ち上がるという所まで来た時に、背後の森から銃弾が杏梨目掛けて飛んだ。
銃弾は弾かれる、小手先で、まるで全身を生きているように動かして。だが、真流は触手の操作に集中しなければならないのかもしれない。立ち上がるモーションは止まり、ただ拳銃が飛んできた方向を見つめている。
好機だ。　俺はそう思い、彼女の横に移動する。戦い慣れしているために俺の挙動を捉えることは出来るのかも知れないが、元来人間に

反応できる速度で動いているとは思っていない。俺は杏梨の横腹を蹴り上げるようにして脚を振るった。
触手は動き、彼女の盾となる。　杏梨自身も、胴部を壊されるよりはというようにして、腕で腹をかばう。　だが、俺はそんな事も関係なく、躊躇なく振り上げた。
流石に衝撃を殺しきれなかったのか、今までに見せなかった苦悶の表情を浮かべ、杏梨は地面を無様に転がっていった。　俺は確かな手応えを感じたが、直後脚に激痛が走り、俺は立っていられなくなり膝をつく。
一瞬その脚が目に入ったが、酷いものだった。　外套（コート）はついに耐えかねて、俺の脛は外気にさらされていた。　その脛は一瞬なりとも触手に直に触れていたのだ。腐食効果の餌食となって、赤黒く変色している。激痛ばかりが俺の脚から帰ってきて、動けと指令を飛ばしても応えてくれない。
「あっはは、無様だね。　無理するからだよ」
杏梨が立ち上がる。　その顔は笑いながらも影が差していた。
どうやら、勝利そのものは確信したらしい。だが、痛みには彼女自身思うところがあるようだ。
なんて言ったって、彼女の腕も俺の蹴りによって歪んでる。強烈な衝撃で骨にまで異常を来したらしい、治療しなければ動かすことは無理だ。
「お互い様のようだがな・・・」
俺は強がりを吐くかのように思いながら言葉を返す。
嫌な予感はどんどんと強くなっていく、動きを止めて尚、心音はどんどんと大きくなっていく。
「そうでもないよ。　お兄ちゃんと違って、私は動く必要はないからね。　まだ戦いは終わってない」
どうやら、本体のダメージは触手には伝播しないらしい。黒々と悍ましい動きをする触手は、彼女が初めてそれを見せたときのように、高速な動きを保っていた。
俺と杏梨のダメージは、同等では有っても等価ではない。　俺は脚

を潰されて動きを阻害されているが、杏梨は腕を壊されても攻撃性能を落としていないんだ。
「まぁ、これから終わるけどねぇ」
彼女は触手を俺に向かって素早く動かした。　それは俺を正確に捉えるのだろう。脚に魔術を込める、傷ついている脚を無理矢理動かすのには相当の痛みと代償を伴うが、四の五の言っていられないのも確かなんだ。
俺は横向きに跳んだ。代償を払った甲斐は有ったようで、触手は俺が居た場所を素通りしていき、止まること無く突き進んでいく。
俺の背後に有った森を急速に腐らせる。　触手があんな所に有るんじゃ、防御は疎かになるだろう。　密かに笑ってる杏梨を討つチャンスは今しか来ない。俺は動かぬ脚に鞭を打ち、なんとか立ち上がる。
未だ笑いをやめない、黒戦に嫌気がさす。　なぜ笑いをやめない？
その考えが脳裏をよぎった瞬間、それは俺の背筋を伝って、冷や汗として俺の身を冷やした。
「まさか・・・」
「――――！」
背後から聞こえた声は、叫び声のようでは有ったけど、断末魔でもあったのか。
嫌な予感の正体は、銃弾が飛んできていた方向だったのか。森の中から撃って、自分の姿を見せなかったつもりなのだろうが、真流は常に同じ位置から銃を構えていた。それは、少し注意力があれば読み取れることだ。
案の定、杏梨は真流が居る位置を悟った。　そうなれば、脚を怪我してしまって俺がかばうことが出来ないタイミングで、真流を狙うのは必然だ。
その結果――――俺は冷や汗を止めることが出来ずに振り返る。そこには、脚を腐らされ、無様に這い蹲る真流が居た。
「う、うぅ・・・わ、私は大丈夫。　だから、早く杏梨ちゃんを・・・」
真流が無理して笑いながら言った台詞を言い終わる前の事だった。

触手は無慈悲に彼女に叩きつけられ、脚と同じ様に真流の体全体が腐らされていく。骨や臓腑さえも、あまりにも簡単に溶けていった。
少しの時間が経った時、彼女が居た場所には、彼女が持っていた拳銃だけが名残のように残っていた。
「さて、うざったい涼お姉ちゃんはコレで居なくなったね。　じゃ、二人だけでやり直そう！」
と、杏梨がそう囀るように言う顔は、あまりにも無邪気だった。
誰かが死ぬことの意味を知らずに、笑う子供のようで。
今はその笑顔が、真流を死なせた自分と同じ様に憎かった。
急速に魔術を全身に通す。　脚は傷ついているが、そんな事はもう気にならない。寧ろ、脚が壊れるという事より、杏梨を殺すことの方が重要項に思えた。
「お兄ちゃん、顔怖いよ？　もっと笑ってよ～」
「もう俺に勝ちはない」
おどける杏梨をよそに、俺は呪文を唱えるように、或いは詩を唄うようにして言葉を出す。　これは、杏梨にというよりは、自分に言い聞かせるようだった。
「真流は死んだ。　俺の勝利条件は消え失せたんだ。だから、その代わりが必要だ・・・だが、俺に思いつく勝利の対価は一つしか無い。俺が欲しいのは――――」
〝お前の命だけだ〟　その言葉は果たして杏梨には聞こえたのか分からない。　その言葉を置き去りにする気で俺は強化された肉体で走った。
その結果、加速・速度は最高度に達していた。　いや、強化の魔術そのものの練度が、今までよりも一段階上のレベルに達しているのだ。初めて、本気で戦わなければならないと思ったから。
杏梨が笑いを崩す前に、冷や汗が落ちる前に、拳を振るう。　杏梨は触手をかろうじて盾にすることが出来たが、触手そのものが軋むのが手袋の向こうから感じる。
だから、俺は拳を握り直し、数度と言わず何度でも触手を殴る。
これが原因で手が壊れても後悔はしない。

「うっそ、触手(これ)が怖くないの!?」
口を苦しみに歪ませながら、杏梨は触手を横薙ぎに振るった。　横腹をえぐられたら、流石に俺とて無事とはいかないだろう。
だから、俺は跳んだ。　飛んでる内に、逆向きになり、空中で俺と杏梨が向き合う形になる。
「怖くないさ」
見上げる彼女は、ほんの少しだけ笑いを取り戻した気がした。
「俺の腕、俺の命より、お前の命の方が重要だからな。　それが〝勝つ〟って事だ」
彼女の背面に着地した俺は、もう一度力を込め、砲弾になったかのように突撃する。
杏梨はこちらを向けないのは当然として、触手でさえも反応が一歩遅れていた。　結果として、数度の拳との激突の末、触手はついに弾かれていき、真流と俺の間を遮るものはなくなったのだ。
「お前の命を奪えるなら、お前に勝てるなら、俺は何であれ支払うんだ！」
彼女の背中に、掌をぶつける。　掌底の形で衝撃を与えられた杏梨は、紙がそうなるように、森へと吹っ飛んでいった。
破砕音の後、何かにぶつかるような音が聞こえた。　近寄ると、木に背中を強かに打ち付け、苦しそうに悶える杏梨が居た。
集中が途切れたからか、触手はすでに消えていた。　だが、杏梨本人は戦う意志を途切れさせていないようで、まだ目は死んでいなかった。
「ま、まだ私は・・・」
杏梨は立ち上がろうとする。俺は拳を構えた。だが、ふいに杏梨の動きが止まる。
いつの間にか、杏梨の喉元には濡れたように光っているナイフが突きつけられているからだ。その持ち主の一存で、杏梨の細い首は切り裂かれてしまうだろう。
「はい、やめ。　これ以上余計なことをするなら、切っちゃうよ？喉。」

「え、なんで・・・」
ナイフの主は、さっき腐らされていくのを見たはずの彼女だった。
真流は、手首こそ痛々しく血を垂れ流しているが、少なくとも死体だと思うには血色が良かった。
「おまえ、なんで・・・」
思考を放棄したかのように、真流に問いかける。
だが、真流はチェシャ猫のように、含みの有る笑いをこちらに投げかけた。
「それは後ででいい？　とりあえず、今はこっちでしょ」
「あ、あぁ。頼む・・・正直、限界・・・だ」
真流が生きていた、その安堵は全身に伝わっていった。温かみのある感覚とともに、脱力感が全身・・・特に脚部を襲う。
俺はもう立つことも出来ずに、倒れ込んでいた。
「さて、何から聞こうかな～。　取り敢えず、メジャーどころから聞こっか。〝光〟のサーヴァント、情報全部頂戴？」
「い、言うわ――――」
杏梨が言い切るより前に、真流はナイフを脚に突き刺し、そのまま魚でも捌くように、無造作にナイフで引き裂いた。
「うん、杏梨ちゃんは賢いもんね。　だから、立場を教えるのはコレぐらいで良いでしょ？」
そう言い聞かせ・・・いや、躾けて、真流はナイフを喉に触らせ直す。
次は喉を容赦なく切り裂くのだろう。　真流はそれだけの凄みを持っていた。
だが、自分の命が危機にさらされたからと言って、杏梨はその姿勢を突き崩すことはないようだ。その目は、決意の色を帯びて真流を見つめ返していた。
「ちぇっ・・・橙乃、この子、どうする？」
杏梨から情報を搾り取るのは無理だという判断から、真流は俺に判断を仰いだ。彼女自身は杏梨をどうしても良いのだろうが、どうやら俺はそうではない、という判断を下したらしい。

「・・・好きにしろ。　俺はもうそいつに用は無い」
「そう、じゃぁ私はこの子を持って帰ろうかな。　私は拷問は専門じゃないしね」
拷問、とか恐ろしい単語が聞こえた気がしたが、気の所為・・・なんだろうな。　きっと。
ともあれ、俺達の勝利でこの戦いが終わる・・・かと思われていた。
何の前触れも無く、世界が光に包まれた。いや、包まれた・・・と言うには、多少その光は荒々しかった。
俺たちの目はすっかり闇に慣らされていて、急激に襲った光に対応が効かなかった。とっさに目を瞑ってしまう。
数秒、視界が白く染まった後に目を開く。既に光は無く、月明かりだけが森を照らしていた。だが、眼の前の景色は既に変貌していた。
杏梨が既に居なかったのだ。　一番近くにいた真流が、杏梨を探し始めているということから、彼女は何者かによって逃されていたのか。
「誠に申し訳ないけど――」
背後から声が聞こえる。　俺と真流は、立ち上がり、すっかり腐食した森の真ん中に立つ誰かを見据えた。
パーカーを目深に被り、目さえも見せない小柄な誰か。　声色からして、少女だろうか。
そいつは、杏梨を軽々と持ち上げていて、お姫様抱っこの形を取っていた。杏梨は腕の中で暴れてはいるが、全く離す気配を見せない。見た目以上に剛力なのだろうか。
「この子は死なせるわけには行かないからね。　不承不承ながら、この子を救いに来た」
そういう彼女の口元は笑っていた気がした。